

に伴いP07-08列にその機能を譲り、補修されたものと考えられる。建物は東西棟のものと思われ、主軸（東西）は真北から132度東偏する。柱間距離は、北列は西より1.50-1.30-1.10m、西列は補修前が1.95m、補修後が1.70mと規則性を見いだすのが困難な配置状況を呈している。SB04からSB05への改築に伴い西列に配された柱穴（P01・02）は、平面形態が38×47cm程の小振りな隅丸長方形を呈し、深さは22cm前後である。北列に配されたP03は平面形態が20×26cm程のさらに小振りな隅丸長方形を呈し、深さも5cm程と浅い。また棟列補修に伴い配されたP07・08については、平面形態及び深さはそれぞれ22×28cm程の小振りな隅丸長方形で10cm程、62×55cm程のいびつな卵形で32cm程と、総じて柱穴配置及び規模において規格性を見いだしがたい。改築時の埋土は灰橙色ないし褐黄灰色混砂粘質土、補修時の埋土は濁濃灰色混砂粘質土で、柱痕部と考えられる窪みは見られるものの、抜き取りのためか埋土における柱痕部の遺存を確認することはできなかった。

f. SA01

SA01は、調査区北西隅で検出された遺構である。山裾と掘立柱建物群を画するように1.85~2.20m間隔で6本ないし8本の柱穴が配されている。柱穴の平面形態は、直径30cm程の円形を呈するものと40~50×55~70cm程の隅丸方形を呈するものの2種類存在する。後者は柵列が大きく屈曲する位置に存在するようである。深さは5~30cm程で、埋土は橙褐灰色系混砂粘質土である。北列はSD02にほぼ平行するが、P05はSD02に切られており、またSB02のP01はSA01と接近しすぎる。以上のことから、SA01はSB03~05の時期に機能していたものと考えられる。なお、P01は直径15cm、長さ48cm程の柱根木質が遺存していた。材質の同定・鑑定については、未実施である。

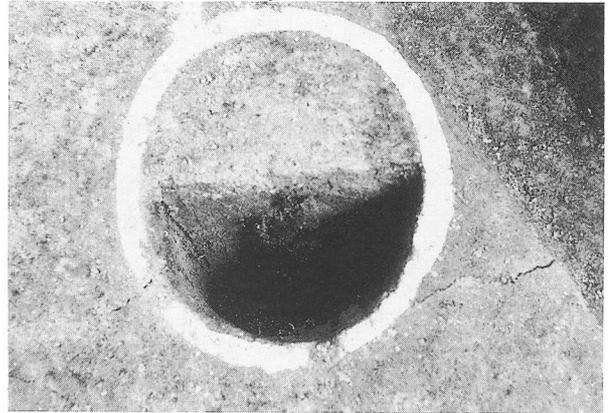


写真25 SA01-P01柱根検出状況（西より）

(2) II区（第48図）



写真26 II区 a 遺構完掘状況（南より、中央SD03）

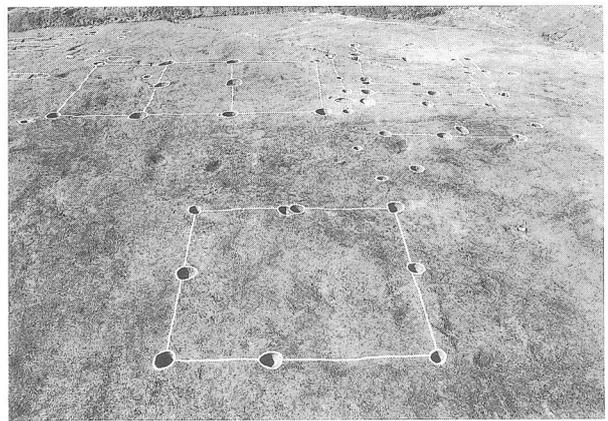
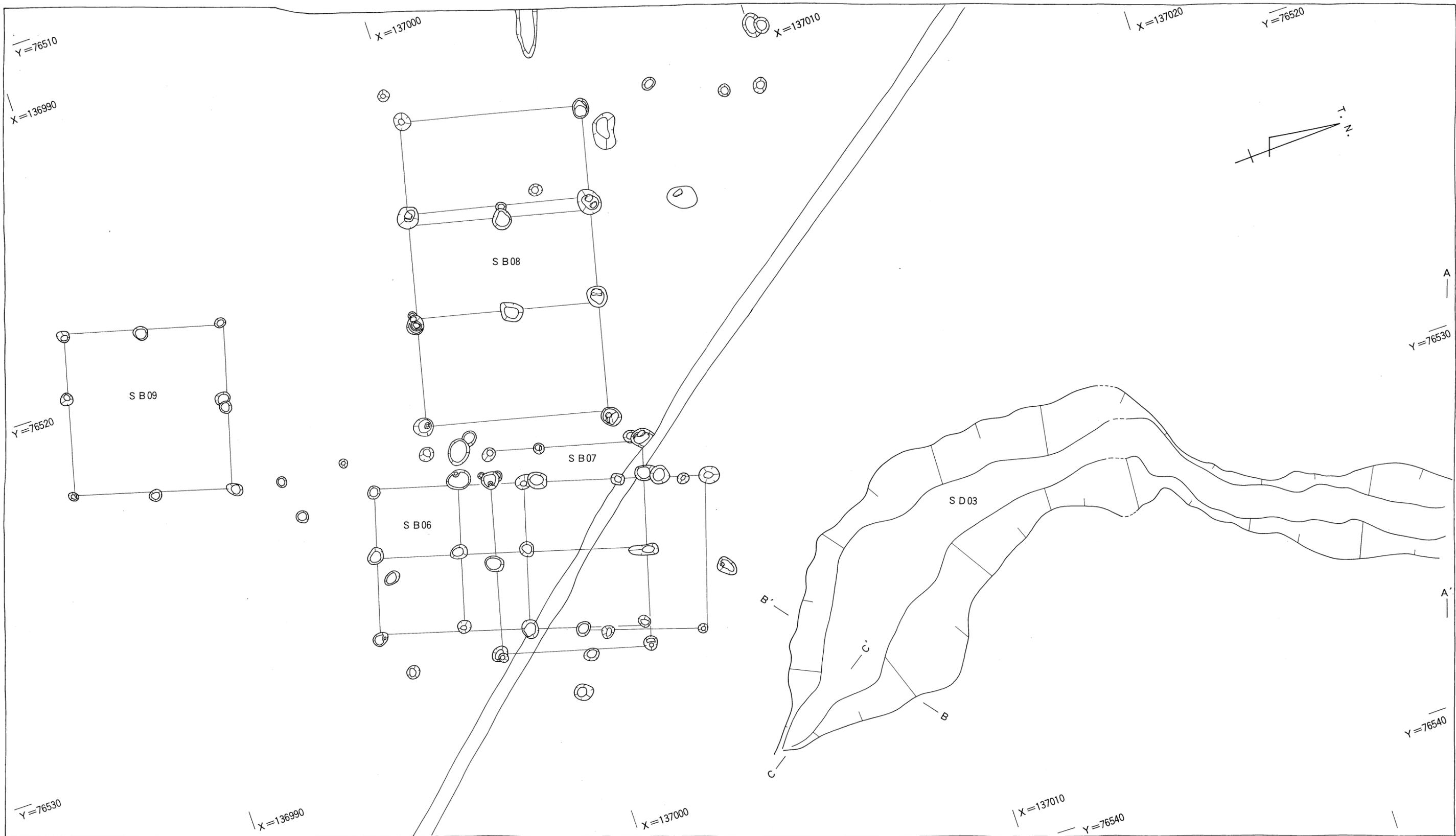


写真27 II区 b 遺構完掘状況（南より、手前SB09）



第48图 II区遺構配置図(主要部)

Ⅱ区は谷平野東部に位置する調査区内では比較的低地部分で、弥生時代後期の溝1条と中世の掘立柱建物群及び鋤溝が検出された。掘立柱建物群の東西に、埋没河川と思われるSX01及びSR03が存在するが、前述したようにほぼ埋没を終えており、掘立柱建物群を区画する自然及び人為的な遺構はないものと思われる。

① Ⅱ区掘立柱建物群及び鋤溝

Ⅱ区では総数70個程のピットが検出され、その配列から4棟の掘立柱建物(SB06~09)を復元した。主軸方向及び切り合い関係から、SB06・09が先行して建てられ、SB07・08が後出するものと考えられる。ビニール袋中1袋分程の遺物を出土したが、遺物の項で後述する。

a. SB06 (第49図)

SB06は、東西2間×南北4間(3.25×5.90m)の総柱的建物である。北側に1.30~1.40m幅の庇を伴う。建物は南北棟のもので、主軸(南北)は真北から16度東偏する。梁列の柱間距離は、北端部は西より1.65~1.60mとほぼ中央に位置するのに対し、南部は1.45~1.70~1.80mとやや西偏して配され、やや曲がった棟木を用いたことが想定される。桁列の柱間距離は、南半部は東西及び中央ともに北より1.45~1.85mで配されているのに対し、北半部は東側が北より1.40~1.10m、西側が0.55~2.10m、中央は存在せずと不規則な配置をしている。庇部分は、P15がP01を切ることに加え、東列がやや張り出したり、桁に中央柱を伴わないなど、SB06が建てられた後に増築された状況が考えられる。柱穴の平面形態は、楕円形ないし隅丸方形を呈し、小さいもので28×30cm程、大きいものでも35×40cm程である。深さは5~42cm程で、浅い南梁列は削平のためと考えられるが、P10は例外的としかとらえがたい。埋土は暗橙灰色系混砂粘質土で、P04・05・11には直径7cm、長さ5~25cm程の柱根木質外皮部分

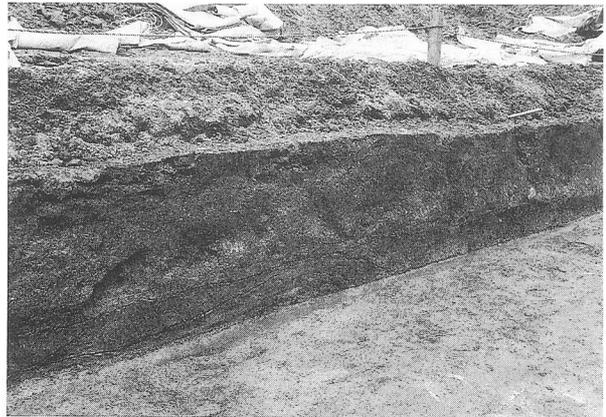
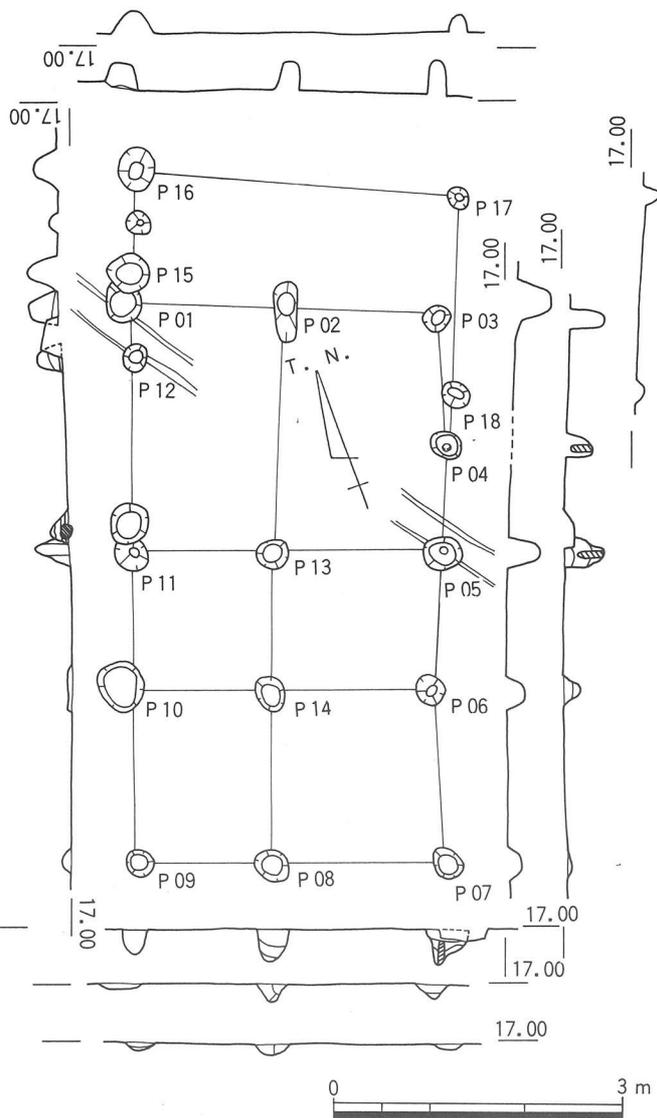


写真28 Ⅱ区a南西壁土層(北東より)



第49図 SB06平・断面図

のみが遺存していた。

b. S B07 (第50図)

S B07は、S B06のP01・02を継続使用して改築した東西2間×南北2間(3.85×3.35m)、西側に0.70m幅の庇を伴う建物である。建物は東西棟のもので、主軸(東西)は真北から104度東偏する。柱間距離は、東西列北は西より1.70-2.05m、南が1.80-1.95mとほぼ対称的に配置されるのに対し、南北列東は北より1.30-2.05m、西及び庇は2.35-1.00m、2.25-1.10mと東西で逆配置されている。柱穴の平面形態は、楕円形ないし隅丸方形を呈し、小さいもので28×32cm程、大きいもので40×42cm程である。深さは10-40cm程で、南西隅を除く隅柱穴が深く、中間柱穴が浅い傾向が見られる。埋土は暗褐灰色系混砂粘質土で、P07は直径8cm、厚さ3cm程の泥岩系円礫の根石の上に直径5cm、長さ15cm程の柱根木質部が遺存していた。また、庇P11は人頭大の円礫と拳大の垂角礫を組み合わせた根石が検出された。

c. S B08 (第51図)

S B08は、S B07の西に0.60m程離れて建てられた東西3間×南北2間(6.85×4.00m)の建物である。建物は東西棟のもので、主軸(東西)は真北から104度東偏し、S B07と平行し、同時併存したものと考えられる。柱間距離は、東西列北は西より2.00-2.20-2.65m、南が2.15-2.45-2.25mと規則性を有しない。それに対し南北列は、東西端は中間柱穴を有せず、内側2列は北より2.00-2.00mと中央部に中間柱穴を配している。この2穴P09(11)・10は、他の柱穴と比べ極端に浅く、しかも規則性を有しない桁列のP02とP07、P03とP06を結ぶ直線上に位置しており、東柱の可能性が考えられる。東西方向の棟柱を支えたも

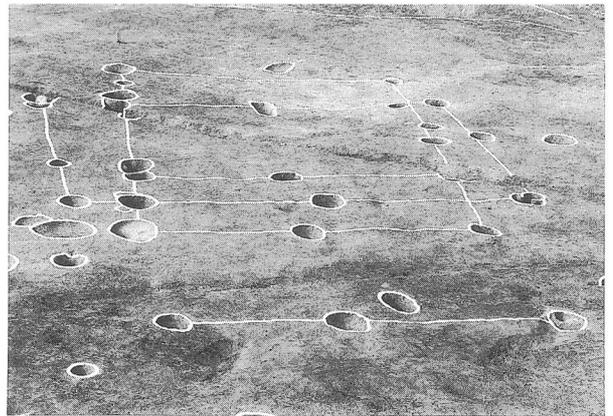


写真29 S B06・07近景(南より)

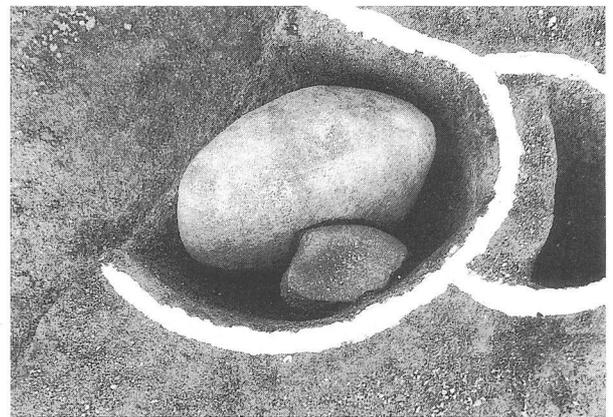
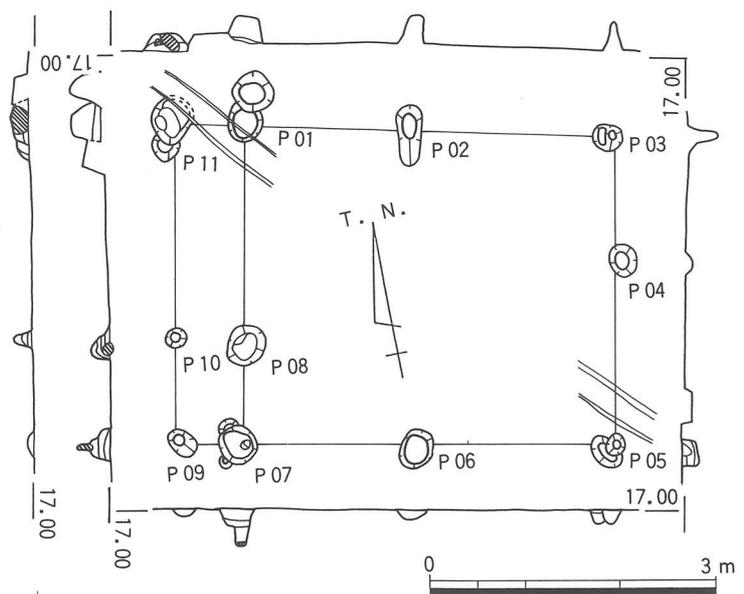


写真30 S B07-P11根石検出状況(西より)

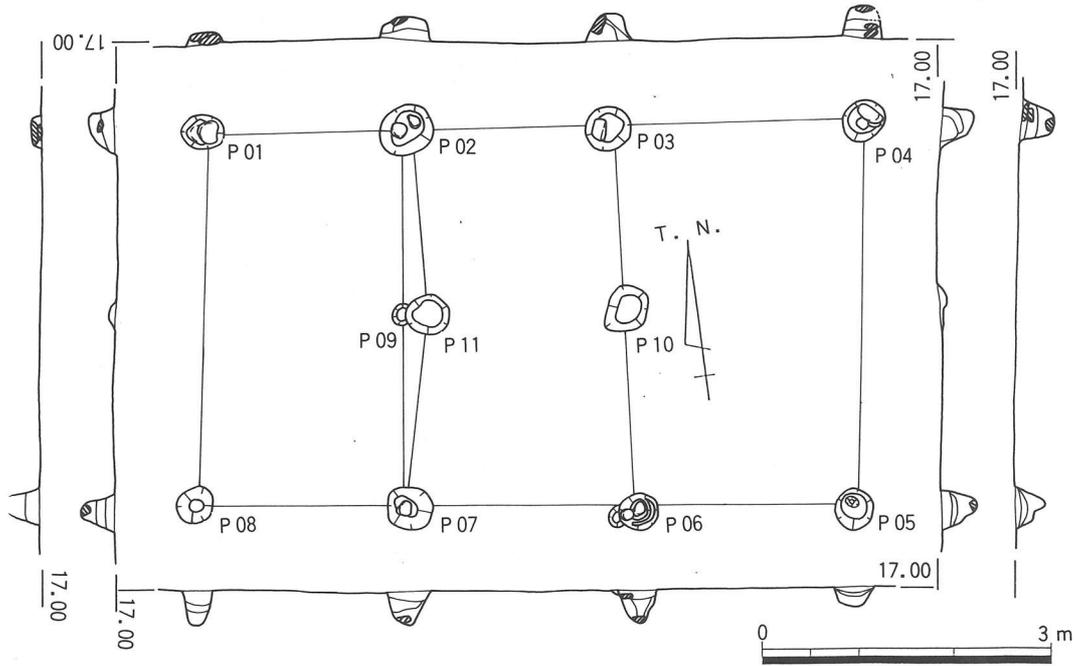


第50図 S B07平・断面図

のとも考えられるが、その場合は内側2列の梁を一旦支えたものと推定される。柱穴の平面形態は、楕円形ないし隅丸方形を呈し、小さいもので36×46cm程、大きいもので50×56cm程である。深さは8～38cm程で、束柱に加え、北西隅と南西隅柱穴がやや浅い傾向が見られる。埋土は褐橙灰色系混砂粘質土で、褐暗灰色系混砂粘質土の柱痕部が見られるものも存在する。SB08に特徴的なことは、柱穴に石を多用していることである。P01は縦横20cm前後、厚さ7cm前後の扁平な円礫と亜角礫を2個重ね合わせて根石としている。P02・04・06・07は縦横14cm程、厚さ6cm程の扁平な亜角礫を根石に用い、P02・06については拳大の扁平な亜角礫を1個、P04については拳大と幼児頭大の角礫を2個柱の横に添えるように配している。また、P03は根石を用いず扁平な幼児頭大の角礫のみを柱に添わせている。



写真31 SB08近景（南より）



第51図 SB08平・断面図

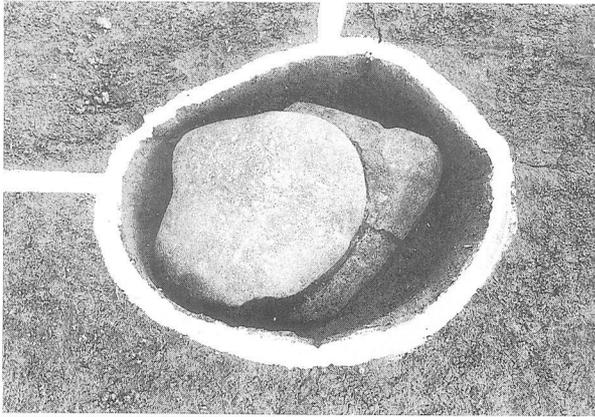


写真32 S B08-P01根石検出状況(北より)



写真33 S B08-P02根石・添石検出状況(南より)



写真34 S B08-P03根石検出状況(東より)

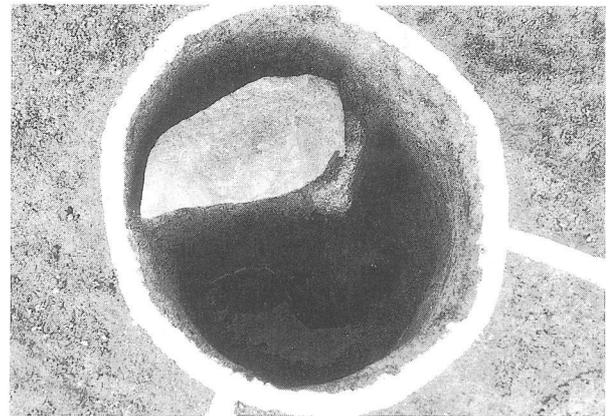


写真35 S B08-P04根石・添石検出状況(南西より)



写真36 S B08-P06根石・添石検出状況(東より)

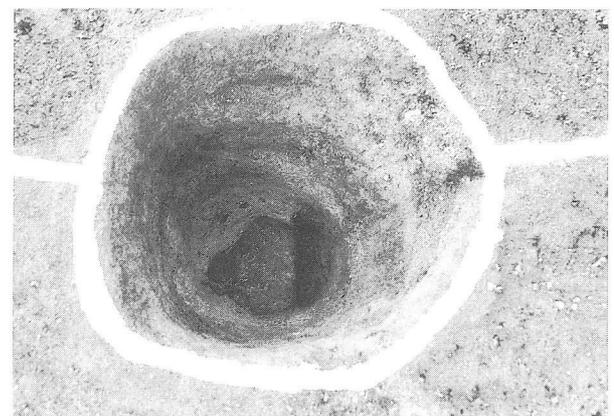
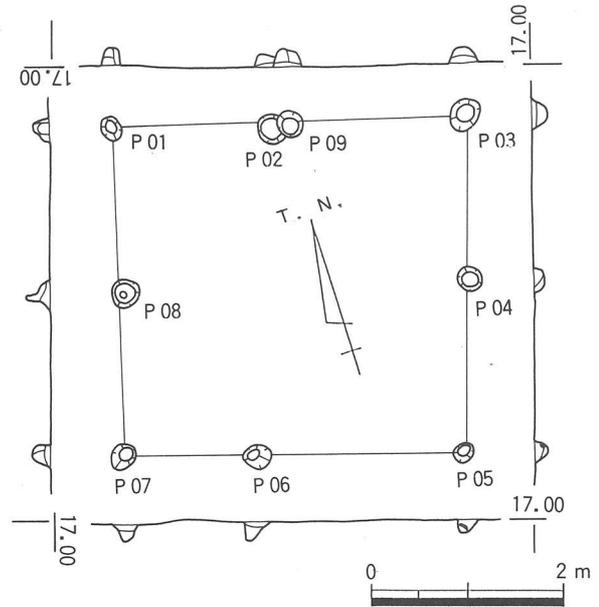


写真37 S B08-P07根石検出状況(南より)

d. S B09 (第52図)

S B09は、S B06の南に3.00m程離れて、S B06の西桁列とS B09の梁東列が一直線上に配置されるように建てられた、東西2間×南北2間(3.54~3.70×3.46~3.56m)の建物である。建物は東西棟のもので、主軸(東西)は真北から106度東偏し、S B06と直交し、同時併存と考えられる。柱間距離は、東西列北は西より1.64~2.06m、南が1.34~2.30mと規則性を有しないのに対し、南北列東

は北より1.78-1.78m, 西が1.76-1.70mとほぼ中央部に柱穴を配しており, この2穴P04・08に棟木が載せられていたものと考えられる。柱穴の平面形態は, 楕円形ないし隅丸方形を呈し, 小さいもので18×26cm程, 大きいもので28×30cm程である。深さは15~26cm程で, 全体的に浅く, 圃場整備時に削平されたものと思われる。埋土は暗褐灰色系混砂粘質土で, 褐暗灰色系混砂粘質土の柱痕部が見られるものも存在する。なお, P04は拳大程の垂角礫の根石を有している。また, P05では拳大程の炭化木が出土したが, 斜めに横たわる状態で, 柱材とは考えがたく, 抜き取り時の混入品と思われる。



第52図 SB09平・断面図

e. 鋤跡

削平及び攪乱が激しく詳細は不明であるが, 調査区西端部で幅50~60cm, 深さ5~7cm程の3本の鋤溝と思われる遺構を検出した。淡橙灰色混シルト細~中砂の埋土を有し, 真北より104度東偏する東西方向の鋤溝である。検出面での鋤溝間の幅(畝幅)は, 0.40と2.80m程であるが, 後者の間には削平された鋤溝が複数存在したと思われる。方向はSB07・08と一致し, SB08と最も近い鋤溝との距離は0.55m程である。掘立柱建物群の集中する付近以東に鋤溝は検出されず, SB08の0.55~2.00m程西で鋤溝が検出され, しかもそれ以西は柱穴が検出されていない。このことから, この鋤溝ないし畝状遺構はSB07・08と同時併存の可能性が考えられる。屋敷地内の畑作利用ととらえるべきか, 両者を区画するものは検出されなかった。

② SD03 (第53図)

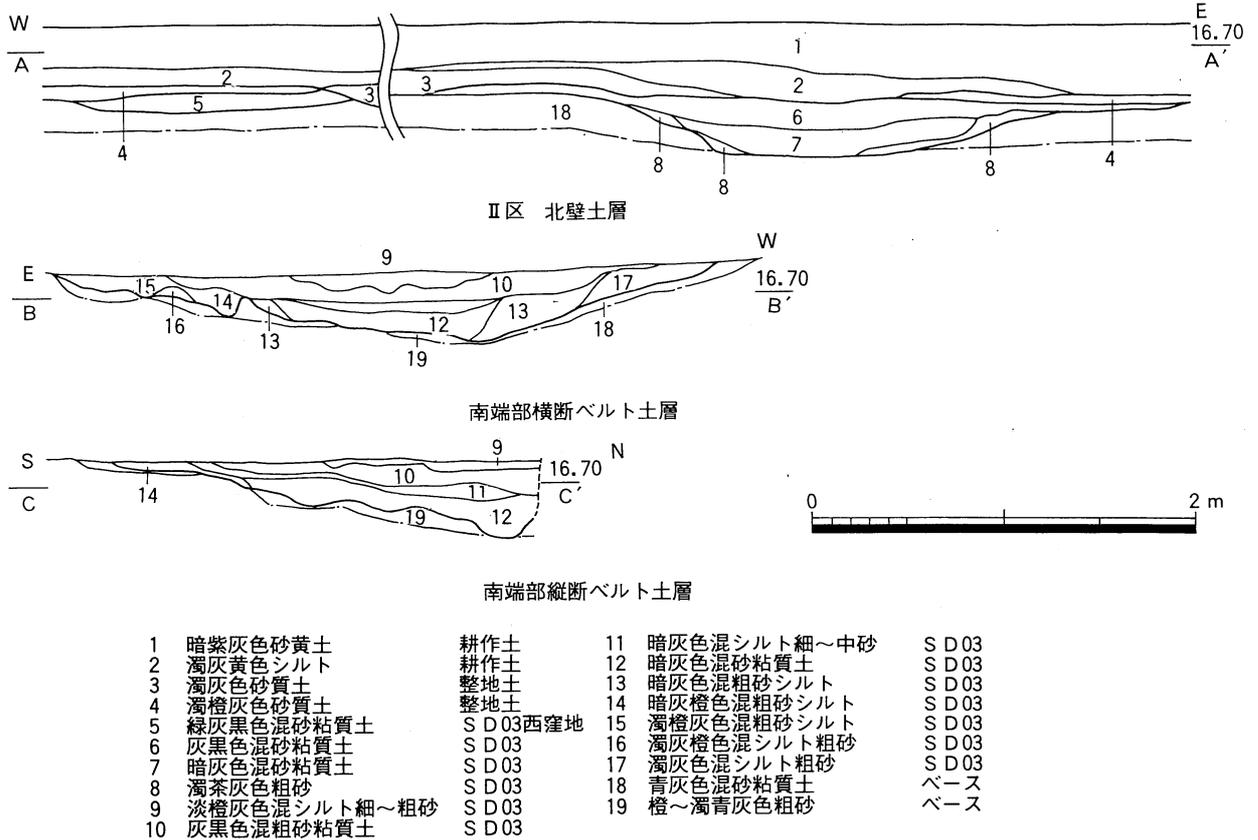
SD03は, II区中央部から「く」の字状に折れ曲がり調査区北に流れる弥生時代後期の溝である。中央部の検出地点から開削されたものではなく, 南部は削平のため消滅したものと思われる。中央部検出地点から北に8m程は約40度西偏し, 続く6m程はほぼ真北に, それ以北は約30度東偏して流れる。幅2.86~5.00m, 深さ30~37cm程で, 途中極端に狭く浅くなっているのは, 水田面が1段下がり削平されたためである。埋土は, 上層に灰黒色混粗砂粘質土, 暗灰色混シルト細~中砂の間層をはさみ, 下層に暗



写真38 II区北壁SD03部分土層断面(南より)

灰色混粗砂シルト, 最下層に灰橙色混シルト粗砂を有し, レンズ状堆積の状況を呈し, 徐々に埋没した状況を呈する。ビニール袋大1袋分程の弥生土器及び敲き石等の遺物を出土したが, 主として肩部及び底部からベース土に貼り付く状況で出土した。なお北壁付近では, SD03本体の西に緑灰黒色混砂粘質土のわずかの窪地が存在し, 弥生土器甕・泥岩製石器・石鏃等が出土した。溝の幅がもっと広

かったものが、上部が削平されたために二分される形で出土したと思われる。

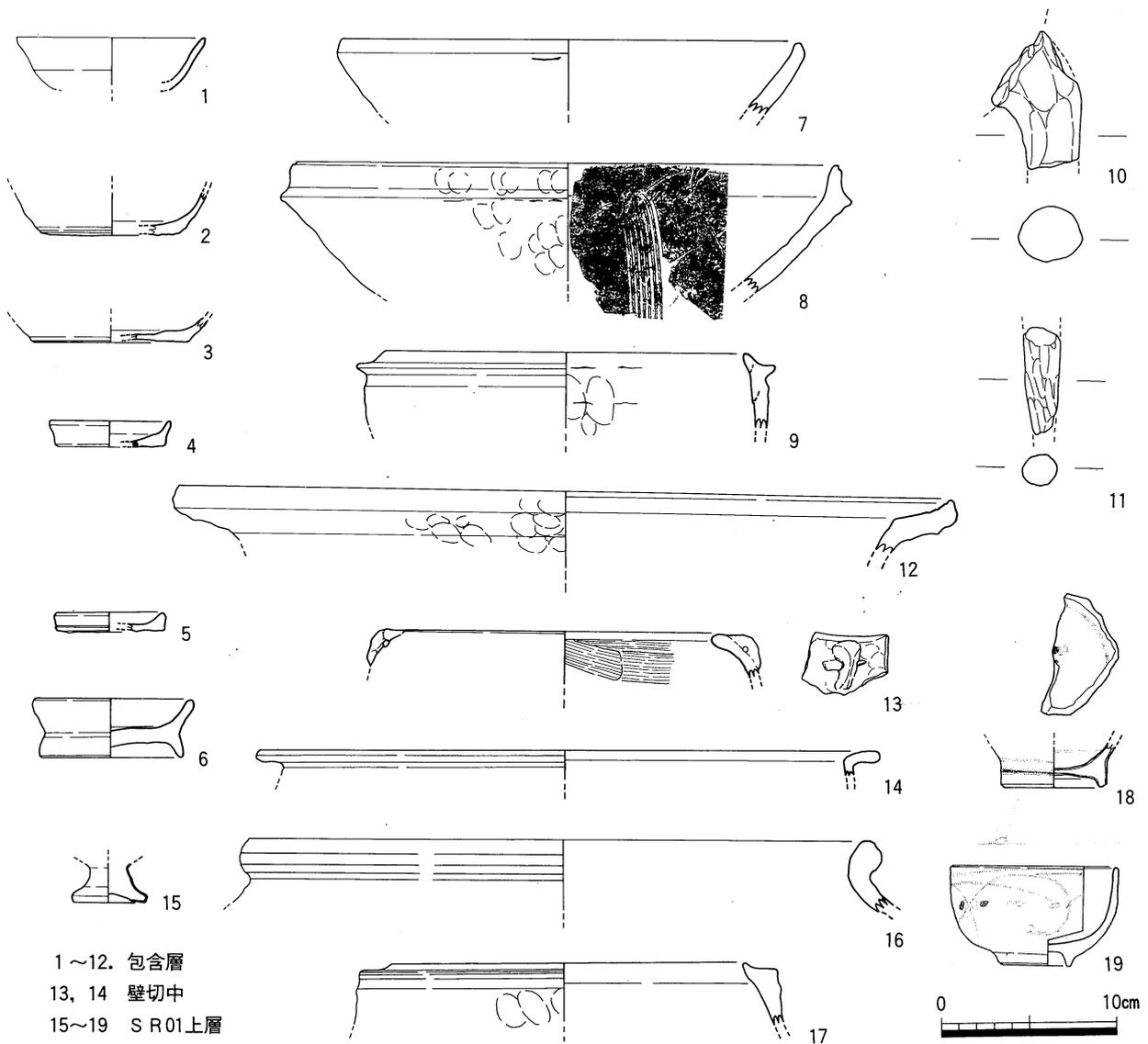


第53図 S D 03土層断面図

(3) 出土遺物

① 包含層・整地土・S R 01上層出土遺物 (第54図)

1～12は掘立柱建物上を覆う包含層より出土したものである。13・14は壁切り中に出土したもので、包含層上を覆う整地土に伴うものである。15～19はS R 01西肩部を掘削した際に出土したものである。1～3は土師器杯である。底部はヘラ切りされ、体部はやや内彎気味に外上方に延びる。4・5は土師器小皿である。底部はヘラ切りされ、体部は短く外上方に延びる。なお、5の体部下端には1条の沈線が施されている。6は土師器台付杯と考えられる。類例が東山崎・水田遺跡より出土しており、土師質土器皿(573)と紹介され、15世紀代の中国産白磁皿と同伴している。7は土師質こね鉢と思われる。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は方形のまま終わらせ、端部内面を上方に小さく摘み出す。体部外面に指頭圧痕がわずかに残っている。土鍋口縁の可能性も残るが、復元口径が鍋としては小さくなりすぎる。8は備前焼播鉢である。口縁部が上下に拡張され、拡張部に凹線が見られない。また、7本1単位の卸目を用い、その間隔が広いことから備前焼第Ⅳ期前半に属し、14世紀後半～15世紀前半のものである。9は土師質羽釜である。口縁部と鏝部の突出が短く、口縁部はやや内傾する。体部上端を外反させ鏝部とし、その上に口縁部を接合し、鏝部直下には爪形状圧痕が見られる。胎土



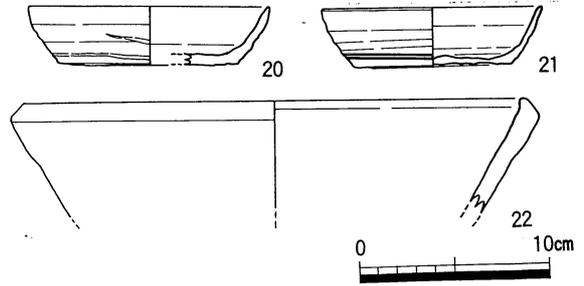
第54図 S R01上層及び包含層出土遺物実測図

は国分寺町楠井産とは異なり、粗い砂粒を多く含む。10・11は羽釜脚であるが、11は土師質、10は芯部は黒灰色を呈し焼成温度が低かったことを推定させ、表面部5mm程は明灰色を呈し還元焰焼成を受けており、焼成不良の瓦質と考えられる。畿内の影響を受けた在地窯の存在が想定される。12は土師質土鍋である。口縁部を「く」の字に外反させ、口縁端部は上方に摘み上げる。以上、包含層出土遺物は、14世紀後半～15世紀前半代と比定される。13は土師質の茶釜形羽釜、14は瓦質焙烙鍋である。15は白磁花器の底部と思われる。16は土師質甕、17は土師質羽釜である。18は瀬戸焼系の碗である。高台畳付け以外の内外面に青味を帯びた透明釉が掛かっており、貫入が著しい。18世紀末～19世紀前半である。19は肥前系陶胎染付碗である。高台畳付け以外にやや青味を帯びた釉が掛かっている。焼成はまずまずであるが、呉須はややくすんだ青色に発色している。時期は18世紀前半～中葉である。整地土とS R01上層出土遺物に大差なく、19世紀前半代にS R01上層とともに整地を行ったものと考えられる。

② S R02出土遺物 (第55・58図)

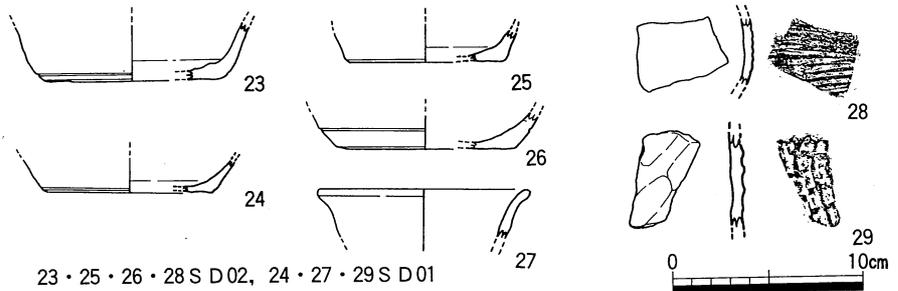
20・21は土師器杯である。底部はヘラ切りされ、体部外面は器高中程で明確な綾をなして屈曲して外

上方に延びる。内彎ぎみに外上方に延びる体部から口縁部を成形し、回転などで調整を施した後、体部下半を強く指などでし、余分な土をそぎ落とし、器壁を薄くする意図が感じとれる。(第58図参照) さらに特徴的なことは、ヘラ状工具の先端で、体部下半から底部にかけて3~4回転する螺旋状の沈線を施し、そのまま底部ヘラ切りに連続する手法である。県内では他に類例を見ず、興味深いところである。22は土師質こね鉢



第55図 S R 02出土遺物実測図

である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は方形のまま終わらせ、端部内面を上方に小さく摘み出す。体部外面の指頭圧痕をなで消し、丁寧な作りである。時期は、杯の口径が小振りになっていることから13世紀後半頃と思われる。

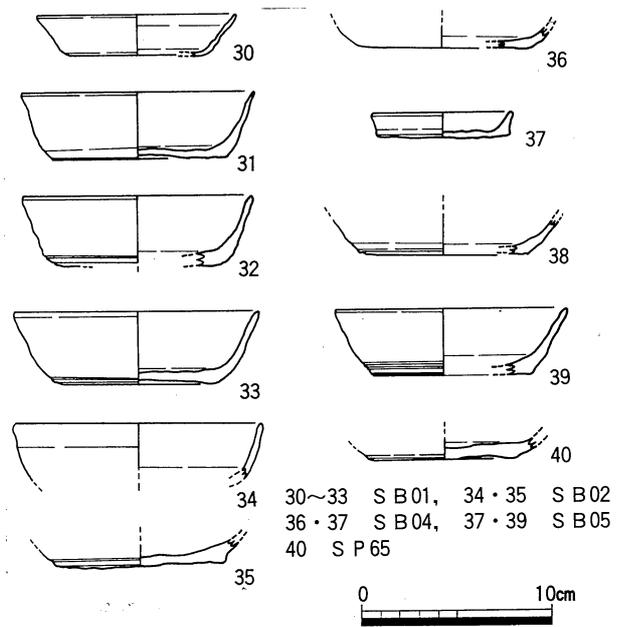


23・25・26・28 S D 02, 24・27・29 S D 01

第56図 S D 01・02出土遺物実測図

③ S D 01・02出土遺物 (第56図)

23~26は土師器杯である。底部はヘラ切りされ、体部は内彎ぎみに外上方に延びる。底部から体部下半にかけての断面が三角形状を呈し、器壁を薄くする作業が簡略化されている。24は摩滅が激しく明瞭ではないが、その他は体部下半に螺旋状沈線を伴う。27は青磁碗である。口縁端部を外方に短く屈曲する。龍泉窯系と思われる、時期は14~15世紀頃と比定される。28は土師質羽釜もしくは土鍋の体部である。水平からやや左下がりと思われる1.5~2.0mm間隔の平行叩き文が施されており、煮こぼれに伴う煤が付着している。同一個体と思われる破片もともに出土したが、体部下半から底部にかけては叩き文は施されていないようである。厚さは叩き文を伴う部位が4~5mm程、伴わない部位が2~4mm程で、堅緻な焼成である。



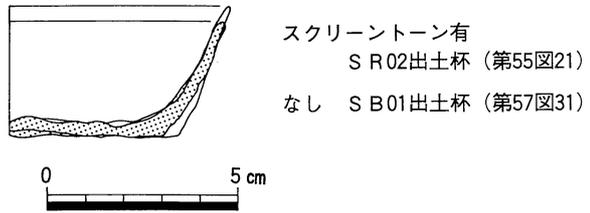
30~33 S B 01, 34・35 S B 02
36・37 S B 04, 37・39 S B 05
40 S P 65

第57図 S B 01~05・S P 65出土遺物実測図

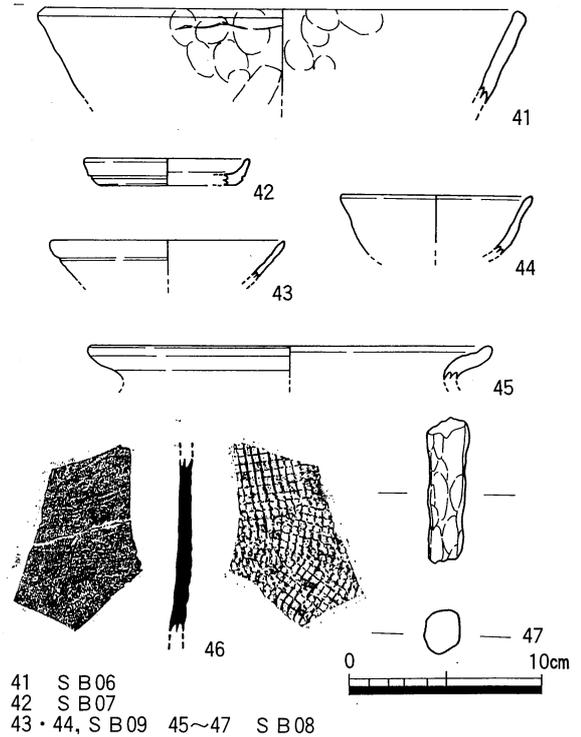
口縁部は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、13~15世紀頃の東播磨系の羽釜もしくは土鍋と考えられる。29は土師質羽釜もしくは土鍋の底部である。5×7mm程の長方形窪みを有する格子状叩き文が施されている。叩き目原体の彫り込み幅は、板目に平行するものが4mm、直行するものが2mmを計り、縦横ともに明瞭に叩き出されている。善通寺市西部から高松市東部にかけて広く分布する楠井産羽釜にも格子状の底部叩きが存在するが、叩き目原体の板目に直行する線が細く不明瞭な傾向を呈することから、胎土の違いに加えて、別の在地系窯の存在が想定される。

④ S B 01～05出土遺物 (第57・58図)

主軸方向の違いからS B 01・02が同時併存で先行し、S B 03～05が後出するものと考えた。30～35はS B 01・02出土の、36～39はS B 04・05出土の、40はS P 65出土の土師器杯及び小皿である。30は器高が低く、器壁も薄く、他と趣を異にする。他の杯は、底部はヘラ切りされ、体部は内彎ぎみに外上方に延びる。36・39は摩滅が激しく明瞭ではないが、その他は37小皿を含めて体部下半に螺旋状沈線を伴う。第58図は掘立柱建物群の生活面をなすS R 02出土の杯21とS B 01-P 03出土の杯31の断面を重ねて提示したものである。底部から口縁部に至る体部内面の彎曲具合はさほど変わらないが、体部外面の下半部に大きな差異が認められる。杯21では体部下半を強く指でし、余分な土をそぎ落とし、体部外面中位に明瞭な稜線が形成される。それに対し、杯31は底部から体部下半にかけての断面が三角形を呈し、器壁を薄くする作業が簡略化されるにしたがい、体部中位の稜線も消滅している。しかしながら、体部下半に底部ヘラ切りに連続する螺旋状沈線を施す手法は残される。この傾向は、掘立柱建物を含む柱穴出土の杯に加え、S D 01・02出土の杯にも見られるように思われるが、後日の詳細な検討に委ねたい。現段階では13世紀後半～14世紀初頭と考える。



第58図 S B 01・S R 02出土杯断面比較図



第59図 S B 06～09出土遺物実測図

⑤ S B 06～09出土遺物 (第59図)

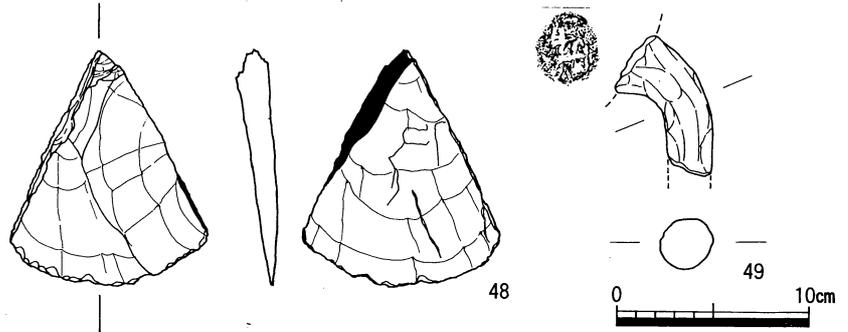
柱穴の切り合い関係と主軸方向の違いからS B 06・09が同時併存で先行し、S B 07・08が後出するものと考えた。41はS B 06出土の土師質こね鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は方形のまま終わらせる。I区出土のこね鉢に見られた端部内面を上方に小さく摘み出す手法は用いられていない。体部内外面には指頭圧痕が顕著に残り、外面口縁直下には水平方向に連続した指頭圧痕が見られる。また、外面は下から上への板なでを施している。42はS B 07出土の土師器小皿である。底部はヘラ切りされ、体部は短く内彎ぎみに立ち上がる。体部下半に螺旋状沈線を伴う手法はI区出土杯・小皿と共通する。43はS B 09出土の瓦質杯と思われる。器壁は薄く、体部はやや内彎ぎみに外上方に延びる。口縁付近をやや肥厚させるが、端部はシャープに終わらせる。44はS B 09出土の土師器碗である。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部を外方に短く屈曲する。45～47はS B 08出土のものである。45は土師質甕の口縁部で、端部を短く上方に屈曲させている。46は亀山焼きと思われる須恵質甕の体部である。外面には3.5×4.0mmの格子目叩きが施され、内面は大きめの指頭圧痕を消すように板なでが施されている。47は土釜脚と思われるが、やや扁平で手の平でしっかり握りしめたような指頭圧痕が顕著に残っている。時期は13世紀後半～14世紀初頭と思われる。

⑥ S X 01出土遺物 (第60図)

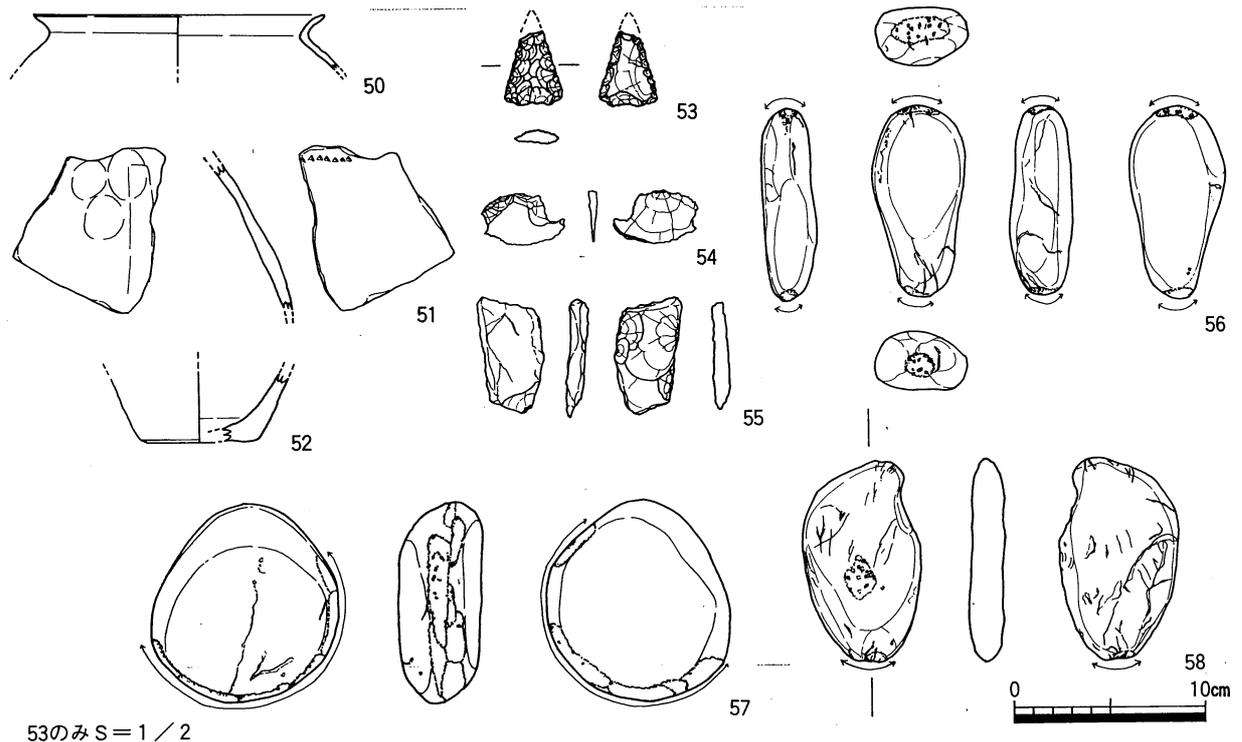
48はサヌカイトの大型剥片である。S X 01上面精査中に出土したもので、一方の側面は原石の風化面が見られる。原石から大型剥片を連続して剥ぎ取ったものの一つと考えられる。49は土釜脚である。体部との接合部に縦4本横2本の格子状の彫り込みを入れ、接着力を強化しようとする手法が用いられている。楠井産土釜には見られない手法で、東讃地方の在地窯の存在が想定される。

⑦ S D 03出土遺物 (第61図)

50~52は弥生土器である。50は甕で、口縁部は外反ぎみに外上方に延び、頸部の屈曲はきつい。器壁表面の剥離が激しく、調整は不明である。51は壺もしくは甕の体部で、三角形の列点を施している。52は甕の底部で、しっかりとした平底を持つ。53は円基式の石鏃で、先端部は欠損している。背面は全体に細かい加工を施す一方、腹面は縁辺部だけの加工である。54は楔形石器の剥片である。55は楔形石器である。表面は全体に白色に風化している。53~55はサヌカイト製である。56・57は砂岩系の敲き石である。56は両極に敲打痕が認められる。57は扁平な円礫の側面1/2にわたり敲打痕が認められる。58は泥岩製石器である。正面中央部に弱い敲打痕が認められ、表裏ともに微弱な擦痕が観察される。時期は弥生時代中期中葉~後期初頭と思われる。



第60図 S X 01出土遺物実測図



第61図 S D 03出土遺物実測図

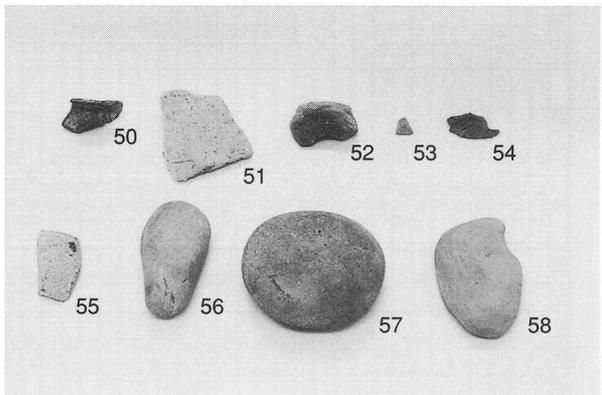
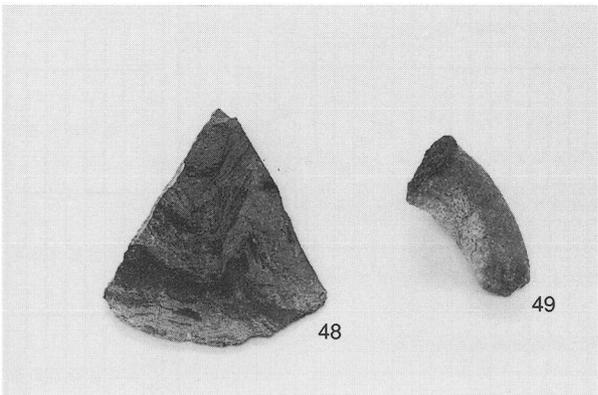
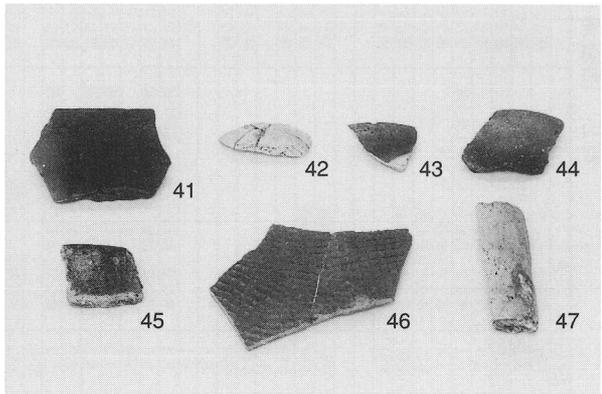
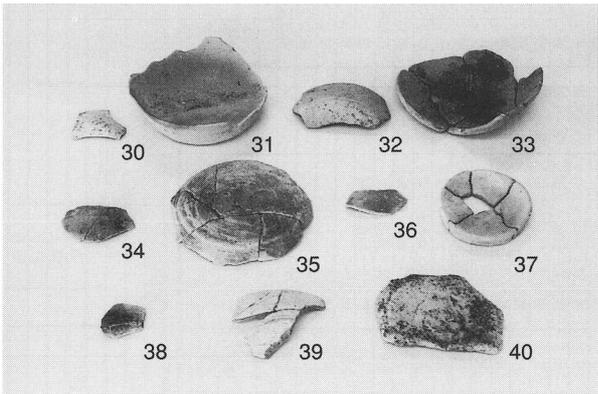
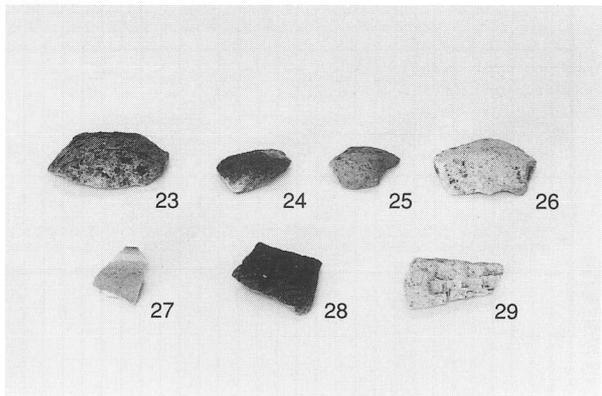
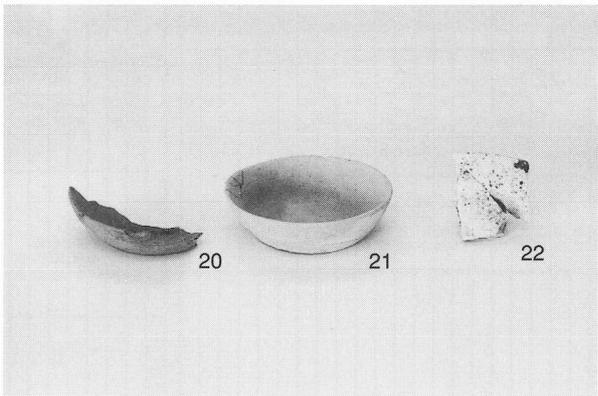
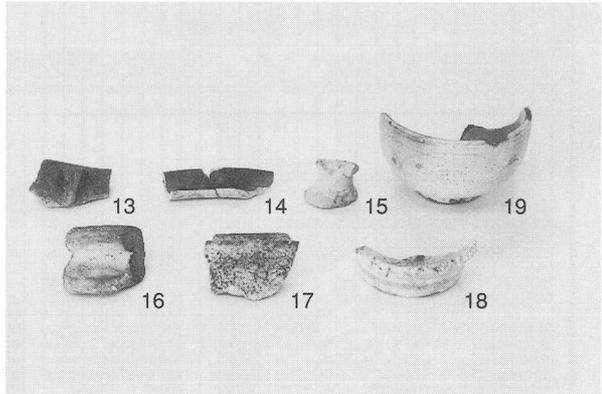
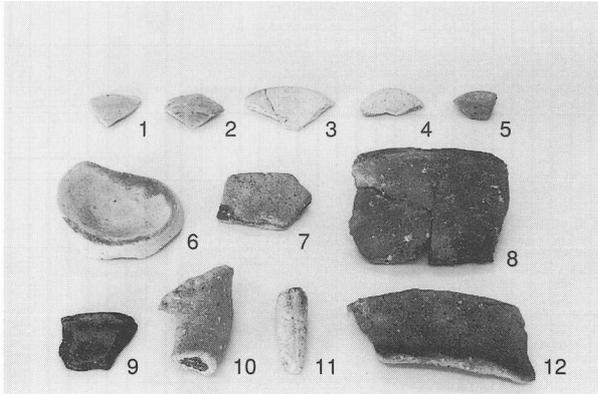


表2 西谷遺跡出土遺物観察表

遺物番号	棟図番号	写真番号	器	種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外	内	面	成	色	調	胎	土	出土位置
1	53	39	土師器 杯	不明	10.6	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 7/6	6	0.1~4mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
2	53	39	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	やや不良	10Y R 8/4	4	0.1~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
3	53	39	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 8/3	3	0.1~4mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
4	53	39	土師器 小皿	不明	6.8	1.5	6.1	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	7.5Y R 8/4	4	0.1~4mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
5	53	39	土師器 小皿	不明	6.1	1.1	6.1	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10R 6/6	6	0.1~2mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
6	53	39	土師器 台付杯	不明	8.8	3.4	7.8	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	7.5Y R 8/4	4	0.1~4mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
7	53	39	土師器 台付杯	不明	25.6	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	7.5Y R 7/4	4	0.1~4mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
8	53	39	土師器 杯	不明	30.4	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 4/1	1	0.1~2mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
9	53	39	土師器 杯	不明	20.3	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 6/2	2	0.1~2mmの砂粒を含む	石英・長石含む	包含層
10	53	39	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	不良	N 7/	7	0.1~5mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	包含層
11	53	39	土師器 杯	不明	44.0	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 8/2	2	0.1~3mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	包含層
12	53	39	土師器 杯	不明	17.3	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	やや不良	10Y R 5/2	2	0.1~3mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	包含層
13	53	40	土師器 杯	不明	35.6	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 5/3	3	0.1~2mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	包含層
14	53	40	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 3/1	1	0.1~2mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	包含層
15	53	40	土師器 杯	不明	4.0	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	5Y 7/1	1	緻密	整地土	
16	53	40	土師器 杯	不明	35.6	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	7.5Y R 6/6	6	0.1~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SR01上層
17	53	40	土師器 杯	不明	19.8	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 7/2	2	0.1~5mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SR01上層
18	53	40	土師器 杯	不明	9.1	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	5G Y 8/1	1	緻密	SR01上層	
19	53	40	土師器 杯	不明	12.3	3.1	9.3	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	5Y 8/1	1	緻密	SR01上層	
20	54	41	土師器 杯	不明	11.3	3.2	8.0	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 6/2	2	0.1~3mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	SR02
21	54	41	土師器 杯	不明	25.7	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 7/3	3	0.1~3mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	SR02
22	54	41	土師器 杯	不明	11.6	3.8	8.5	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	やや不良	10Y R 8/2	2	0.1~4mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SR02
23	55	42	土師器 杯	不明	12.0	3.5	9.1	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	7.5Y R 7/3	3	0.1~4mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SD02
24	55	42	土師器 杯	不明	12.6	3.8	7.9	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 2/1	1	0.1~4mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SD01
25	55	42	土師器 杯	不明	12.7	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 7/3	3	0.1~2mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SD02
26	55	42	土師器 杯	不明	10.5	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	7.5Y R 8/4	4	0.1~4mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SD02
27	55	42	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y 6/2	2	緻密	SD01	
28	55	42	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	N 4/	4	0.1~3mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	SD02
29	55	42	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	7.5Y R 8/4	4	0.1~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SD01
30	56	43	土師器 杯	不明	10.3	2.2	6.8	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	2.5Y 8/2	2	0.1~2mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	SB01-P03
31	56	43	土師器 杯	不明	12.0	3.5	9.1	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	7.5Y R 8/4	4	0.1~4mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SB01-P03
32	56	43	土師器 杯	不明	11.6	3.8	8.5	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	7.5Y R 7/4	4	0.1~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SB01-P05
33	56	43	土師器 杯	不明	12.6	3.8	7.9	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	7.5Y R 7/3	3	0.1~5mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SB01-P10
34	56	43	土師器 杯	不明	12.7	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 7/4	4	0.1~2mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	SB02-P01
35	56	43	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 8/3	3	0.1~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SB02-P07
36	56	43	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 7/2	2	0.1~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SB04-P06
37	56	43	土師器 杯	不明	7.1	1.4	6.5	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 8/3	3	0.1~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SB04-P06
38	56	43	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	2.5Y 8/2	2	0.1~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SB05-P08
39	56	43	土師器 杯	不明	12.0	3.5	8.7	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 8/2	2	0.1~4mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SB05-P07
40	56	43	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	7.5Y R 8/4	4	0.1~2mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	SB06-P05
41	58	44	土師器 杯	不明	24.5	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 4/1	1	0.1~3mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SB07-P11
42	58	44	土師器 杯	不明	8.4	1.4	7.1	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	7.5Y 7/4	4	0.1~2mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SB09-P05
43	58	44	土師器 杯	不明	12.0	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	N 5	5	0.1~2mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	SB09-P05
44	58	44	土師器 杯	不明	9.8	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 6/2	2	0.1~2mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SB09-P07
45	58	44	土師器 杯	不明	20.6	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	2.5Y 5/1	1	0.2~3mmの砂粒を含む	石英・長石含む	SB09-P02
46	58	44	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	N 6/	6	0.1~1mmの砂粒を少量含む	石英・長石含む	SB08-P11
47	58	44	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	普通	10Y R 7/2	2	0.1~6mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SB08-P10
48	58	44	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 6/6	6	0.2~3mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SX01
49	59	45	土師器 杯	不明	14.9	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	10Y R 8/3	3	0.1~4mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SD03
50	60	46	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	やや不良	2.5Y 8/2	2	0.1~7mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SD03
51	60	46	土師器 杯	不明	不明	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好	5Y R 6.4	6.4	0.1~4mmの砂粒を多く含む	石英・長石含む	SD03
52	60	46	土師器 杯	不明	6.1	不明	不明	横なで・回転ヘラ切り	横なで	不明	良好					SD03

遺物番号	棟図番号	写真番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(mm)	重量(g)	材	質	調整	特徴	出土位置
48	59	45	大形銅片	12.5	10.2	1.7	0.3	サマサイト	普通	風化風礫面・一部欠損	SX01	
53	60	46	石器 石	2.0	1.5	0.7	1	サマサイト	普通	風化・円基式・先端部欠損	SD03西窪地	
54	60	46	石器 剥片	2.7	0.4	0.5	4	サマサイト	普通	風化	SD03	
55	60	46	石器 楔形石器	5.5	3.2	1.0	30	サマサイト	普通	向面に敲打痕	SD03	
56	60	46	石器 敲き石	10.1	5.0	3.1	220	砂岩系	良好	側面に敲打痕	SD03	
57	60	46	石器 敲き石	10.3	9.3	4.3	640	砂岩系	良好	側面に2に敲打痕	SD03	
58	60	46	石器 敲き石	10.6	6.2	1.7	170	泥岩	良好	中央部に強い敲打痕・表裏に微弱な擦痕	SD03西窪地	

4. まとめ

西谷遺跡では、弥生時代中期～後期の溝1条と中世～近世にかけて埋没ないし人為的に埋め立てられた3・4本の旧河道、大きく二カ所に隔たる中世の集落を検出した。弥生時代の溝S D03は、石鏃、敲き石等の石製品数点と3個体のやや摩滅した甕を出土し、南部は削平された様相を呈している。南東方向の山裾部から流れ出すものと考えられ、当遺跡東に存在する低丘陵南部に弥生時代中期の集落が存在したことが想定される。

中世の集落は、西側低丘陵裾部と谷平野東部で検出され、いずれも増改築されている。一定期間定住した様相を呈するが、包含層を含む出土遺物からは13世紀後半～15世紀前半代の100年余りの時期に限定される。西側山裾部の集落の下位から検出されたS R02出土の土師器杯が、当遺跡の中世遺構から出土する土師器杯・小皿に先行する形態と考えられる。西側家屋は山裾と河道に挟まれ、建物方位は地形の制約を受けている。一方、東側家屋は平野に位置し、現状地割りとは若干異なるが、条里を意識した建物方位であり、根石を多用するなど、東西家屋に差異が見られる。両者の関係は不明であるが、南西部の谷を迂回するなどして、一定期間共存したものと思われる。

底部ヘラ切りに連続する螺旋状沈線を施した土師器杯・小皿の存在や善通寺西部から高松市東部にかけて広く用いられる羽釜・鍋とは異なる手法の脚部の存在に加え、東播磨及び畿内との関係を思わせる平行叩きや瓦質の羽釜・鍋の存在など、東讃地方独自の窯の存在や流通圏を想定させる。

中世末には両家屋ともに廃絶され、水田もしくは畑作地として利用され、西側山裾部には溝が検出されるのみとなる。そして、19世紀前半頃には南西部の谷間から流れ出していた河道も埋め立てられ、ほぼ圃場整備前に見られた光景が出現したものと思われる。

当遺跡では、これまで明らかでなかった大内平野における中世集落の一端を伺い知ることができた。今後、近隣で発掘調査例が増え、豊富な遺物が出土され、詳細な形態変化を検討し、時期決定や流通圏の確定がなされることとおもわれるが、その一資料提供及び問題提起となれば幸いである。

原 間 遺 跡

1. 立地と環境

原間遺跡は香川県東部の大内町に広がる平野の南部，大川郡大内町原間1356番地外に所在する。阿讃山脈の分脈である矢筈山系の山裾部にあたり，東に原間池，南に原間上池，南西方向に虎丸山を望む微高地を中心に広がる。現在の地表の標高は約18mを測る。

本遺跡は3方を丘陵に囲まれ，古川水系古川が山間部から平野部に流れ出る堆積地上にあたり，古川を東西から挟むように展開している。今回の調査区でも，現在に至るまでの古川の流路が含まれると考えられ，発掘調査においても調査区の北部・東部でかなり厚い洪水砂の堆積や，南西部で蛇行した流路跡を確認した。

原間遺跡周辺には，主として弥生時代～古墳時代の遺跡が存在する。

旧石器時代の遺跡は存在しないが，遺物は当遺跡の西方の与田川の河原で採集されたスクレイパーや尖頭器が³⁾，明治末期から昭和初期にかけて採集されている。与田川の河原では，大内ダムができるまでは大雨の後に旧石器時代の遺物が落ちていたといわれている。

縄文時代の遺跡もまだ発見されていないが，与田川上流域で発見された石鏃・石斧・すり石などが水主神社宝物殿などに所蔵されている。

弥生時代では，中期後半に比定できる遺跡として大内町南西部の水主神社遺跡があり，現在の水主神社を中心とする地域から様々な遺物が採集されている。後期になると，飛谷遺跡・別所遺跡などのように与田川やその支流を中心として集落が成立してきた。

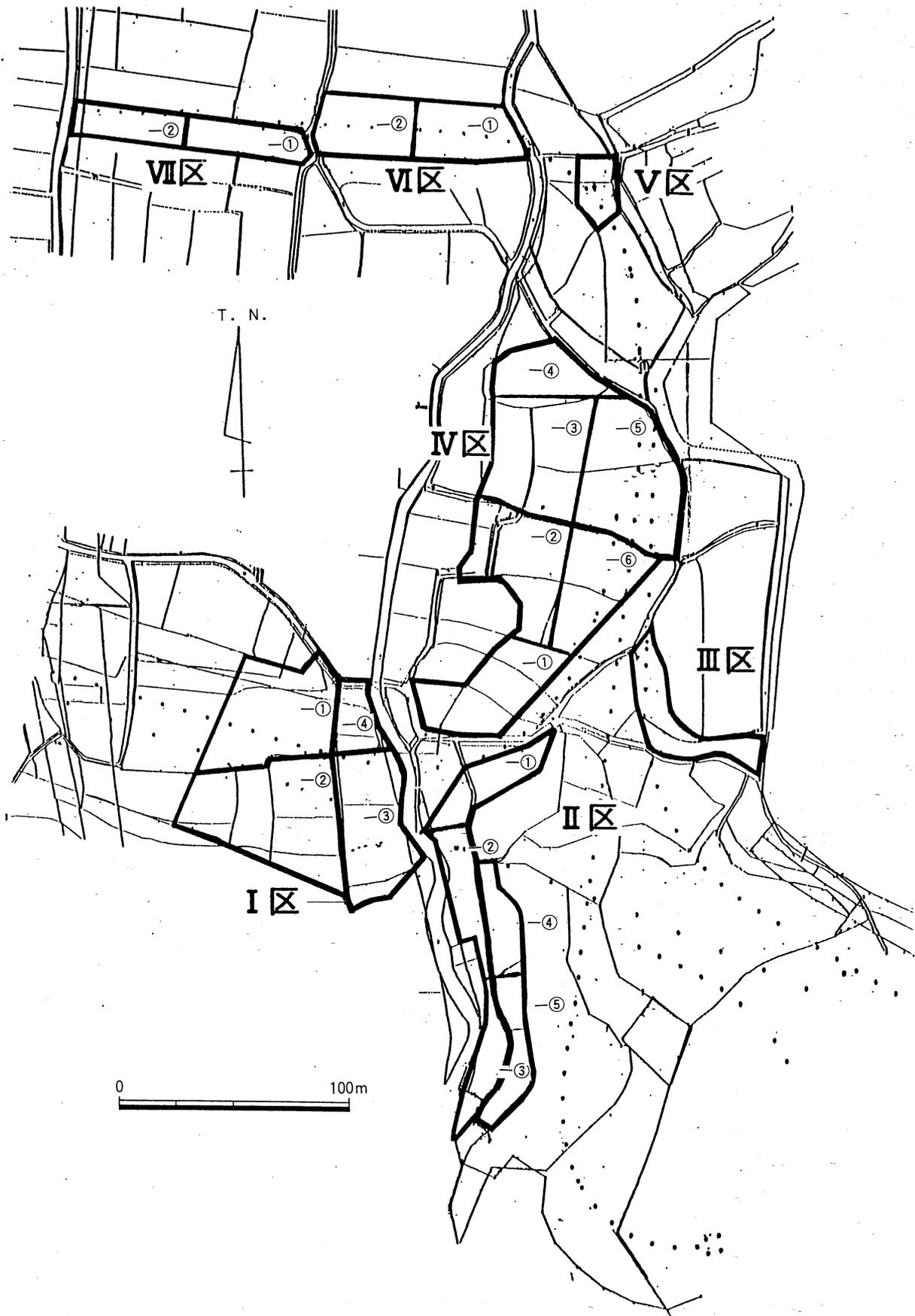
古墳時代には，当遺跡周辺でも数基の古墳が確認されている。古墳時代前期では当遺跡の北東に位置する香川県下の前方後円墳で最も東に位置する大日山古墳が築造されている。この古墳の規模は全長38m，後円部の径は20m，高さ3m，前方部の西側は一部削平されていて，形状には不明の点があるが，くびれ部等の状況から推定すれば柄鏡状を呈する前方後円墳である可能性が高い。また，古墳時代後期のものでは，当遺跡の南方にある片袖式の横穴式石室を有する原間1号墳がある。その規模は玄室長3.8m，奥壁幅2.1m，玄門内側で幅1.9m，玄門幅1.4m，玄室高2.4m，玄門高1.3mを測り，玄門と玄室の比高差は0.9mである。

奈良～平安時代のものとしては与田寺があげられるが行基草創の伝説を持つため，奈良時代建立と考えられがちだが，当時の建立を裏付ける資料が存在しないため立証することは難しいのが現状である。

中世以降では虎丸城跡がある。当遺跡南西の標高420mの虎丸山頂にある，大内郡を領有した寒川氏が構えた城である。南北朝時代に護良親王が入城したという言い伝えがあり，戦国時代には土佐の長宗我部氏の攻撃を受けたとされている。

2. 調査の成果

原間遺跡の発掘調査は本調査に先立ち平成9年4月から5月9日に予備調査を実施し，弥生時代から古代にかけての遺構がある微高地部分と旧古川の氾濫源を確認した。この予備調査の結果を基に本調査対象面積を18,893㎡とした。この対象面積をⅠ～Ⅳ区（第62図）に分け，Ⅰ～Ⅲ区を5月12日から，Ⅳ区を6月1日から本調査を開始した。



第62図 原間遺跡調査区配置図

ちょうど調査対象地区は白鳥・大内インター部分ということもあり，東西南北に調査区が広がっている。調査区ほぼ中央を古川が南北に流路をとっており，Ⅰ区が西に，Ⅱ～Ⅳ区が東に位置する。

発掘調査の結果Ⅰ区では微高地を中心に弥生時代後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡などの集落跡が，Ⅱ・Ⅲ区では，古川の洪水砂上面で7・8世紀の竪穴住居跡・掘立柱建物跡などの集落跡を，Ⅳ区では一部微高地上面で弥生時代後期の竪穴住居跡，平安時代の掘立柱建物跡などの集落跡をそれぞれ検出した。

以下それぞれの調査区ごとに説明する。

Ⅰ区の概要

Ⅰ区では弥生時代後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡等をⅠ-②区の東半分を中心に検出した。遺構面はⅠ-②区西は西に向かって傾斜し，Ⅰ-③区は東へとやや傾斜していることから，遺構を検出したⅠ-②区東半分がやや微高地状になっていることが判明した。一方Ⅰ-①区では蛇行しながら南東方向から北西方向に流路をとる自然河川を検出し，流路内から多量の弥生土器が出土したことからこの自然河川が集落の北限と考えられる。

S H03

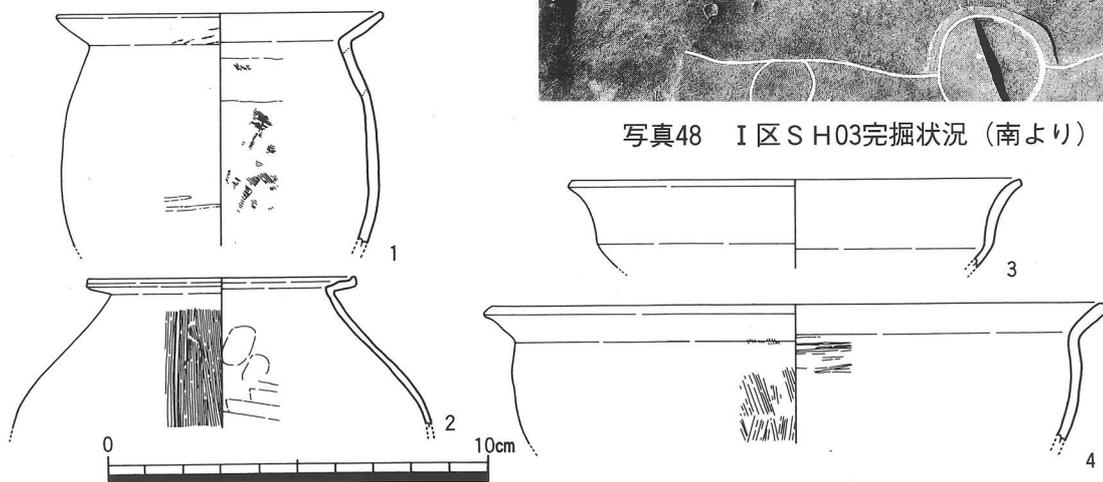
S H03はⅠ-②調査区北東部で検出した竪穴住居である。平面形態は長辺（南北）が約6.9m，短辺（東西）が約6.5mの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは平均して約0.15mを計る。南北主軸は北から約7°東偏する。検出面は耕



写真47 調査区遠景（北より）



写真48 Ⅰ区S H03完掘状況（南より）



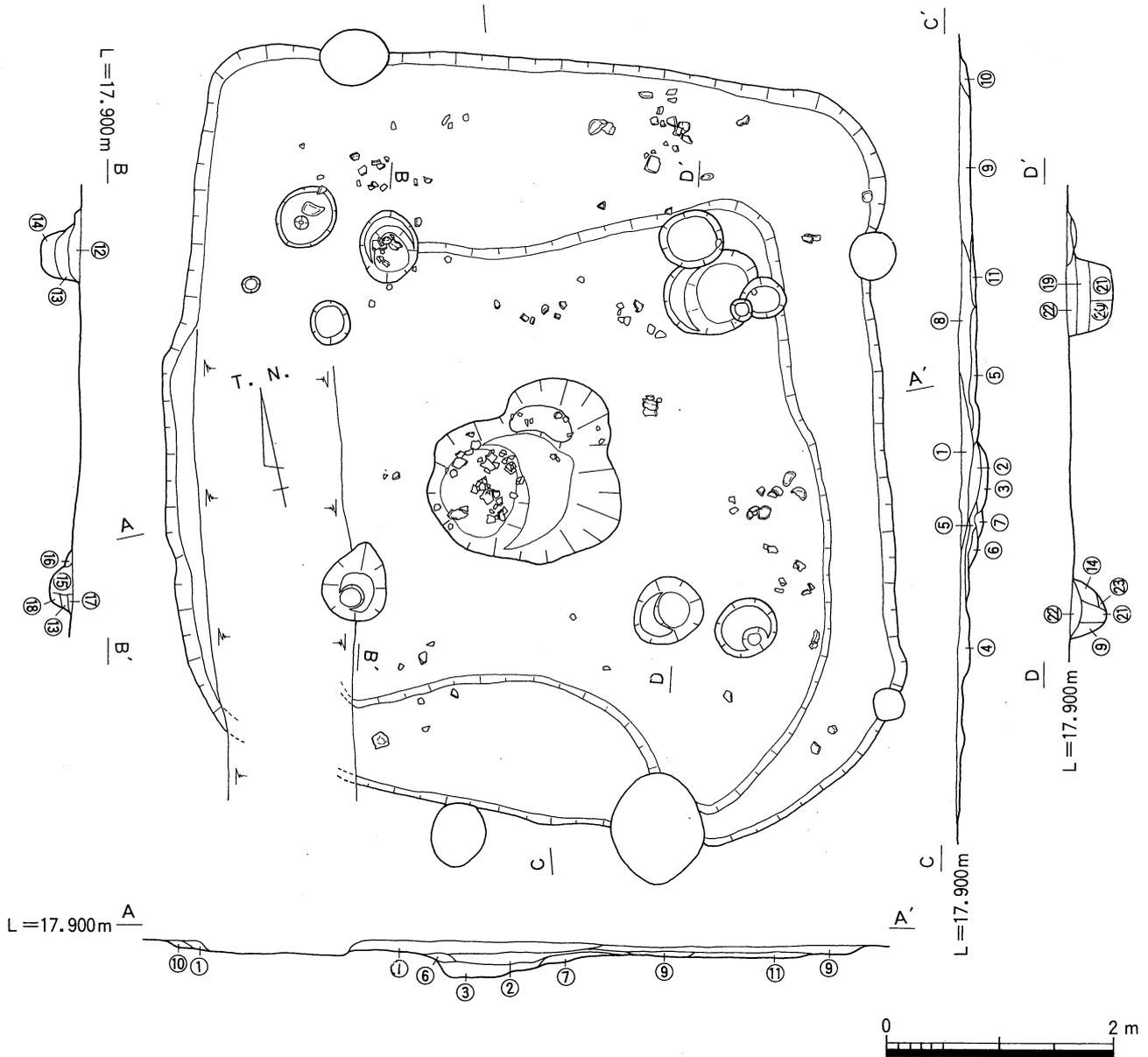
第63図 Ⅰ区S H03出土遺物実測図



第64図 I区遺構配置図

作土・床土及び若干の包含層直下で、西部の一部は予備調査トレンチによって削平されているが、検出された部分から周囲に内形で方形のベッド状遺構があるものと考えられる。支柱穴はそのベッド状遺構の内側コーナー部に計4穴あり、中央には歪な円形の炉を検出した。S H03内の床面には他にも柱穴があり、支柱穴の近くに同様な柱穴があることなどから、何回か建て替えられた可能性も考えられる。

埋土は検出面からの掘り込みが浅いためほぼ単層で、灰色粘質土に浅黄色粘質土（ベース）のブロッ



- | | | | | | | | |
|---|-------|------|----------------------|---|-------|-----|------------------|
| ① | N | 4/ | 灰色土（小礫混じり）（炭化物をやや含む） | ⑬ | N | 6/ | 灰色土 |
| ② | N | 2/ | 黒色土（炭化物を多く含む） | ⑭ | N | 5/ | 灰色土 |
| ③ | N | 1.5/ | 黒色土（炭化物を多く含む） | ⑮ | N | 5/ | 灰色土（炭化物混じり） |
| ④ | 2.5GY | 6/1 | オリーブ灰色土（炭化物をやや含む） | ⑯ | 2.5GY | 7/1 | 明オリーブ灰色土（炭化物混じり） |
| ⑤ | 7.5YR | 5/6 | 明褐色土（焼土、炭化物を多く含む） | ⑰ | 10Y | 7/2 | 灰色土 |
| ⑥ | 7.5Y | 7/2 | 灰白色土（焼土、炭化物を多く含む） | ⑱ | N | 4/ | 灰色土 |
| ⑦ | 7.5Y | 7/1 | 灰白色砂質土 | ⑲ | 2.5Y | 4/1 | 黄灰色土 |
| ⑧ | 5Y | 7/3 | 浅黄色土 | ⑳ | 5Y | 8/4 | 淡黄色土 |
| ⑨ | 7.5Y | 6/1 | 灰色土 | ㉑ | N | 4/ | 灰色粘土 |
| ⑩ | 5Y | 7/4 | 浅黄色土 | ㉒ | 7.5Y | 5/1 | 灰色土 |
| ⑪ | 7.5Y | 7/3 | 浅黄色土 | ㉓ | N | 3/ | 暗灰色土 |
| ⑫ | 7.5Y | 7/2 | 灰白色土 | | | | |

第65図 I区S H03平・断面図

クを含む。

遺物は炉の北半分と支柱穴、北部のベッド状遺構から甕などの弥生土器が集中して出土した。

1・2は甕である。1は頸部が「く」の字に屈曲するもので、胎土に砂粒を多量に含み、色調は褐橙色を呈する。2は頸部から口縁部を水平近くまで屈曲させるもので、体部最大径が上位にあるものである。体部外面上半に細かい刷毛目を、内面に最大径までをヘラ削り、上位には指頭痕が施されている。色調がチョコレート色を呈する甕で、「下川津B類」である。3は高坏の坏部である。4は大型の鉢である。3・4とも1と胎土及び色調が同じである。おそらく1・3・4が地元の土器で、2が高松市上天神遺跡周辺からの搬入品の可能性が高いものである。

時期はB類甕より弥生時代後期中葉頃と考えられる。

S H06

S H06はI-②調査区東部で検出した竪穴住居である。東部の一部を水路によって削平を受けているが、復元すると平面形態は円形を呈し、北部と南部に張り出し部を持つ。規模は復元径約8.0mで、検出面からの深さは約0.2mを計る。この竪穴住居は焼失家屋で、炭化木材が出土している。そのほとんどの炭化木材（垂木）は中央を向くよう出土しており、また僅かに直行するように横木が出土している状況から上部構造が復元できる。内部には内形が五角形と思われるベッド状遺構を西半部で確認した。そのベッド状遺構のコーナー内側には支柱穴が計五個復元でき、柱穴土層から約0.2mの柱痕が確認できた。

竪穴住居のほぼ中央では、周囲に土手を巡らした円形の炉と、焼土及び炭を多量に含んだ長方形の炉を計2基検出した。

埋土は大別して2層に分層でき、上層は茶色砂混じり粘質土（濁茶色・灰茶色）で、下層は暗灰色粘質土層に炭化物を含んでいる。

竪穴住居内からは遺物が少量出土している。遺物は弥生土器甕・高坏・鉢などで、時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。また、石製品はほとんど出土しておらず、ベッド上面から結晶片岩製の石包丁が出土している程度である。

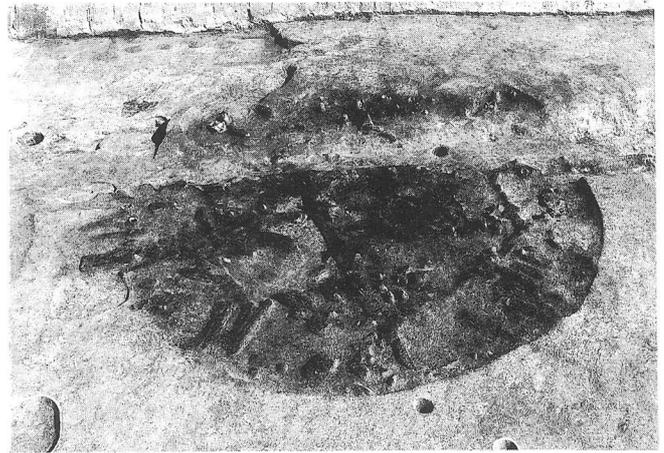
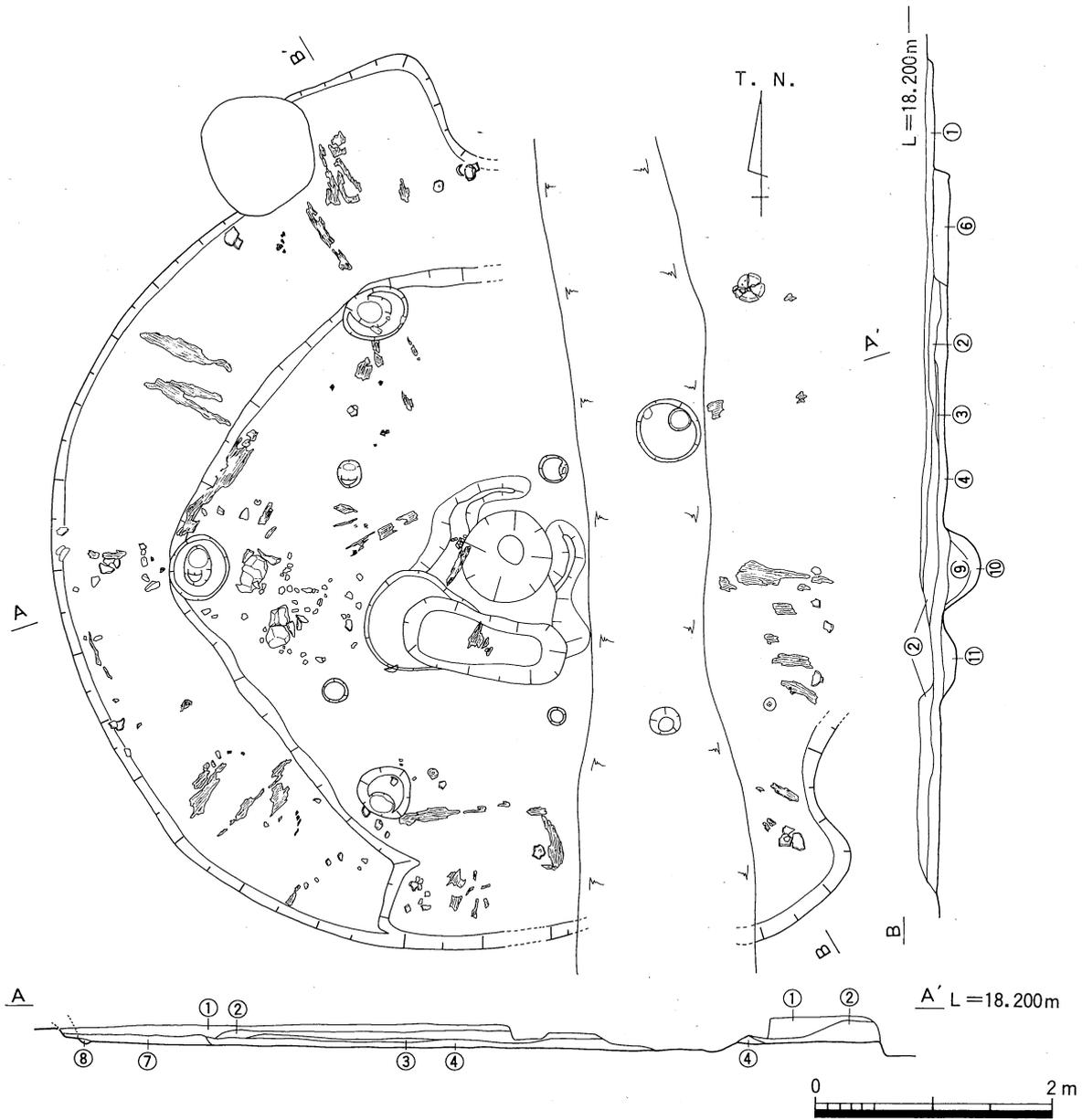


写真49 I区S H06（焼失家屋）検出状況（西より）



写真50 I区S H06完掘状況状況（西より）



- | | |
|--------------------------------------|--------------------------|
| ① 濁茶白色砂混じり粘質混じり土層 (φ 1~3mm程度の砂粒) | ⑦ 褐灰黄白色砂混じり粘質土層 (新ベット埋土) |
| ② 灰茶色粘質土層 (φ 1~3mm程度の砂粒) | ⑧ 灰焦げ茶色砂混じり粘質土層 (壁溝) |
| ③ 褐茶色混じり粘質土層 (φ 1~3mm程度の砂粒) | ⑨ 灰色砂混じり粘質土層 |
| ④ 暗灰色砂混じり粘質土層 (φ 1~3mm程度の砂粒+炭化木材を含む) | ⑩ 暗灰色砂混じり粘質土層 (炭を少量に含む) |
| ⑤ 淡茶黄色粘質土層 (ベース) | ⑪ 黒色砂混じり粘質土層 (炭を多量に含む) |
| ⑥ 暗焦げ茶黄灰色砂混じり粘質土層 (新拡張ベット埋土) | ⑫ 明茶黄色砂混じり粘質土層 (ベース) |

第66図 I区 S H 06平・断面図

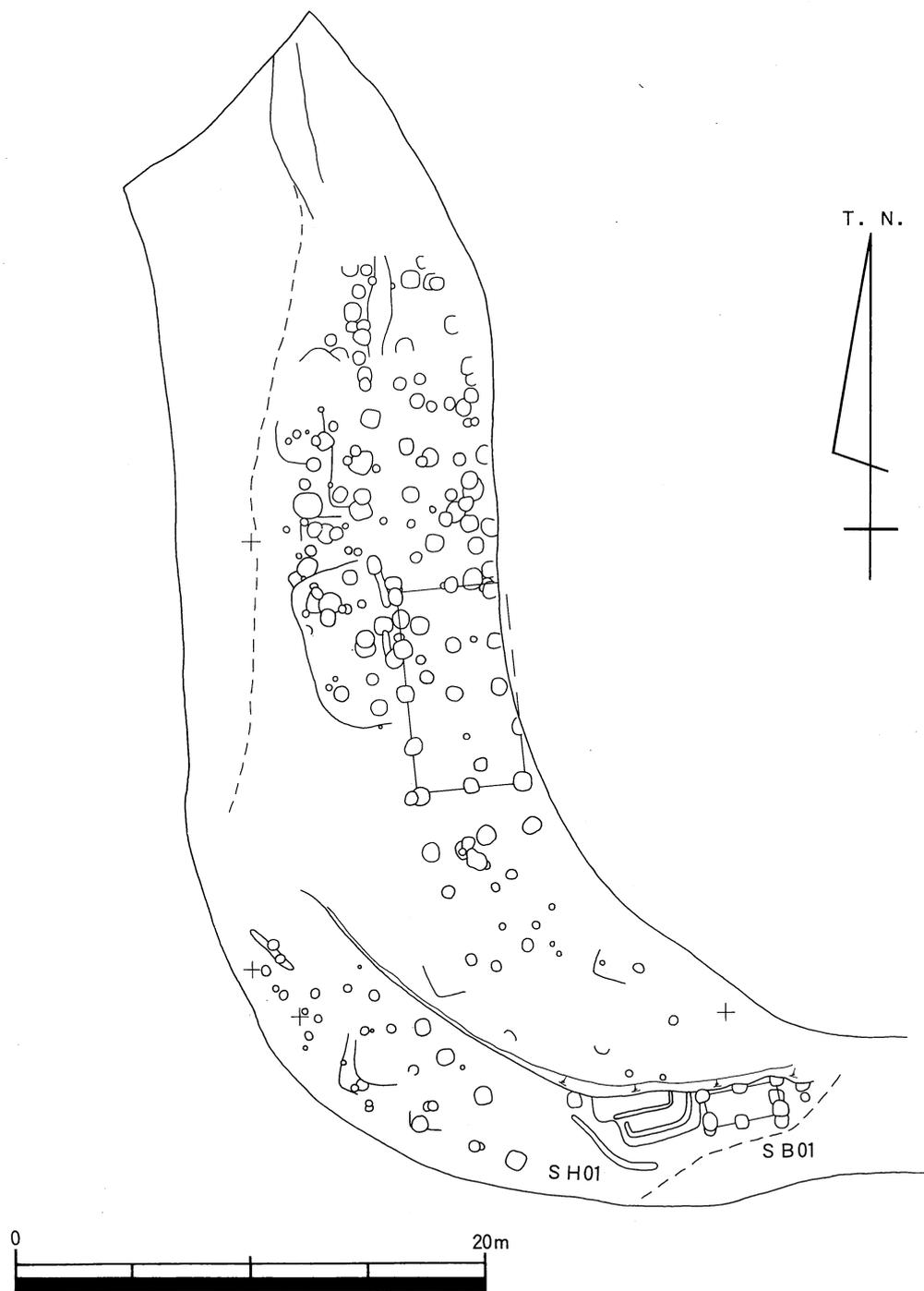
II区の概要

II区は古川と東丘陵に挟まれた南北に長い調査区である。旧地形を復元すると古川の蛇行した部分にあたり、耕作土及び約0.1m程度の包含層下で厚さ1m程度の洪水砂を検出している。東丘陵の西裾部にあるII-④・⑤区では前述した洪水砂上面で7・8世紀の竪穴住居跡・掘立柱建物跡等を検出した。竪穴住居は一辺約3mの小振りのもので、平面形態は隅丸方形を呈する。北辺部に造り付けの竈を持つ構造で、住居内埋土から7世紀前半の遺物が出土している。また、掘立柱建物は南北主軸がほぼ南北を取るもので、柱穴は一辺約0.9mを計るかなり大型のものである。時期は竪穴住居よりやや古い7世紀初頭頃のものである。一方古川よりのII-②・③区ではそのほとんどが旧古川の氾濫源で、遺構はほとんど検出できなかった。

Ⅲ区の概要

Ⅲ区は東丘陵の北裾部に設定した調査区である。遺構検出面は東丘陵裾部から緩やかに北東方向に傾斜する地形で、現在この調査区の東にある原間池方向に平坦地が位置している。原間池は構築時期が新しいもので、Ⅲ区で検出した遺構は原間池方向に延びるようである。また、旧地形を復元すると、原間池部分は、白鳥町に開けた谷筋であったと考えられる。また、この東丘陵の北裾は南東方向にも谷筋があり、南海道推定地とされている。

この調査区で検出した遺構はⅡ-④・⑤区と同様に7・8世紀の竪穴住居跡・掘立柱建物跡等である。また、主軸方向も同様にほぼ南北に向く。



第67図 Ⅲ区遺構配置図

S H01

S H01はⅢ調査区南東部で検出した竪穴住居である。北部は後世の旧水路により削平を受けているが、復元すると方形を呈し西部に張り出し部を持つと考えられる。規模は南辺が約3.8mで、張り出し部も含めると約4.7mで、検出面からの深さは約0.22mを計る。竪穴住居の南部から東部にかけて壁溝が2条確認でき、建て替えられた可能性がある。2本の壁溝に挟まれた部分から炭が検出された。山側には竪穴住居を取り囲むように排水用の溝が掘削されている。明確な主柱穴は確認できなかったが、住居内で、直径が約0.2mの柱穴を検出した。

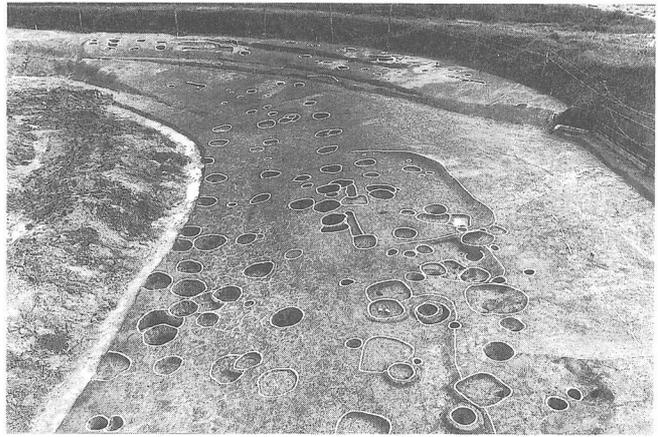


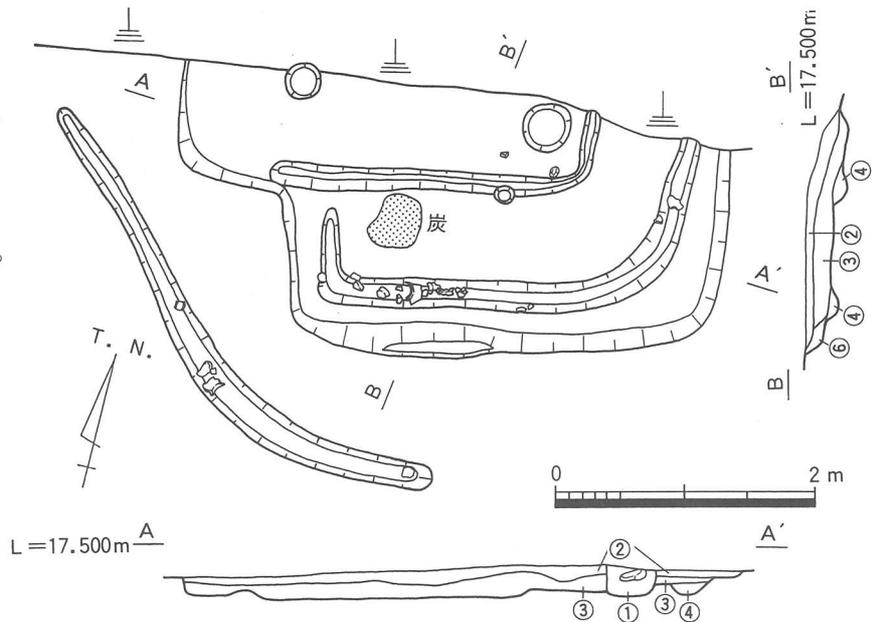
写真51 Ⅲ区遺構完掘状況（北より）

埋土は上下2層に分層でき、上層は暗黄灰色粘質土層で、下層は暗灰色粘質土層に黄色粘質土のブロックを少量含む。

遺物は竪穴住居内（5・6）及び排水用の溝S D01（7・8）から出土している。

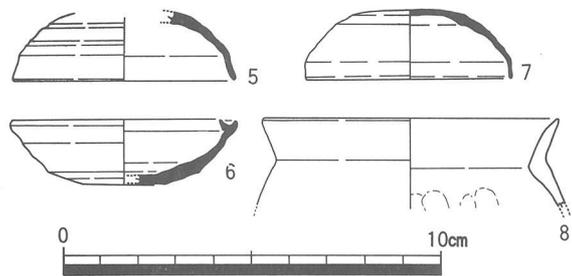
5は須恵器杯蓋である。6は須恵器杯身である。7は須恵器杯蓋である。8は土師器甕である。

時期は須恵器杯の天井部及び底部の調整がヘラ切りのままで未調整であることや口径の縮小及び立ち上がりの矮小化などから7世紀中葉頃と考えられる。



- ① 濁茶黄色粘質土層（φ1～3mm程度の砂粒を含む）
- ② 暗黄灰色粘質土層（φ1～3mm程度の砂粒を含む）
- ③ 暗灰色粘質土層（黄色粘質土ブロックを少量含む）
- ④ 暗灰色粘質土層
- ⑤ 白黄色粘質土層（花崗土）
- ⑥ ③とほぼ同じ

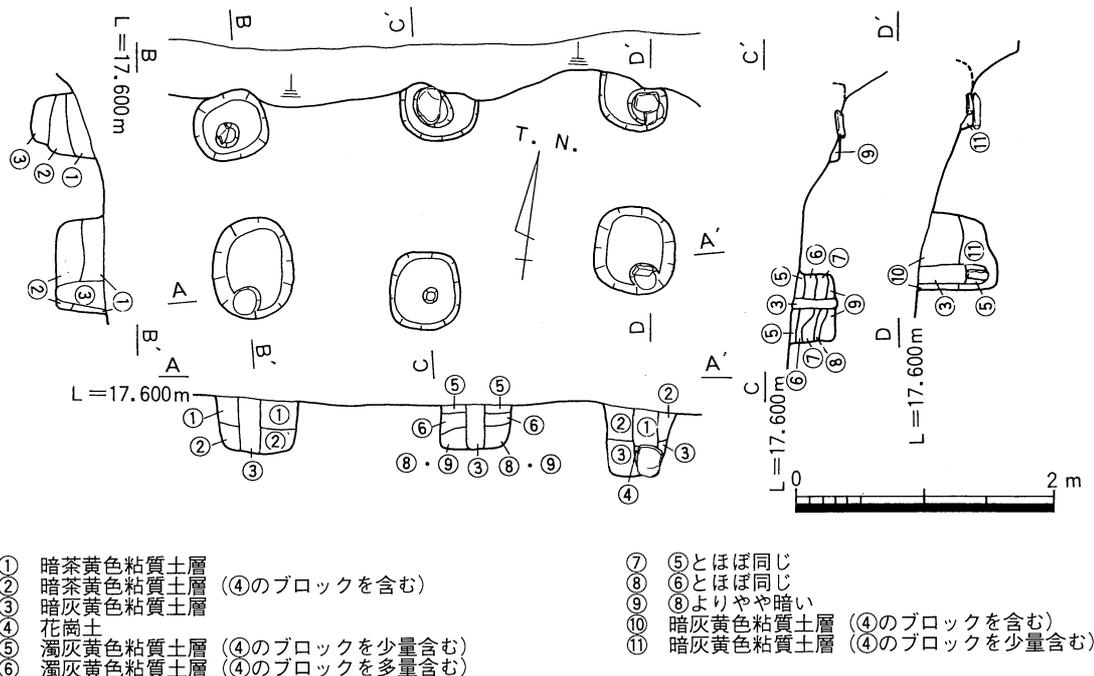
第68図 Ⅲ区S H01平・断面図



第69図 Ⅲ区S H01・S D01出土遺物実測図

S B01

S B01はⅢ区南東部で検出したものである。竪穴住居S H01に近接しており、竪穴住居よりやや古く、時期は7世紀初頭頃と考えられる。規模は現存で梁間1間×桁行2間（1.3m×3.2m）の総柱の掘立柱建物である。柱穴規模は1辺が0.5m～0.7mで、検出面からの深さは掘立柱建物の北側柱穴で0.1m～0.6m、南側柱穴で0.4m～0.6mを計る。建物の南北軸は真北から6°西偏する。柱穴S P01, S P02には根石と考えられる扁平な板石を底に配石している。



第70図 S B01平・断面図

Ⅳ区の概要

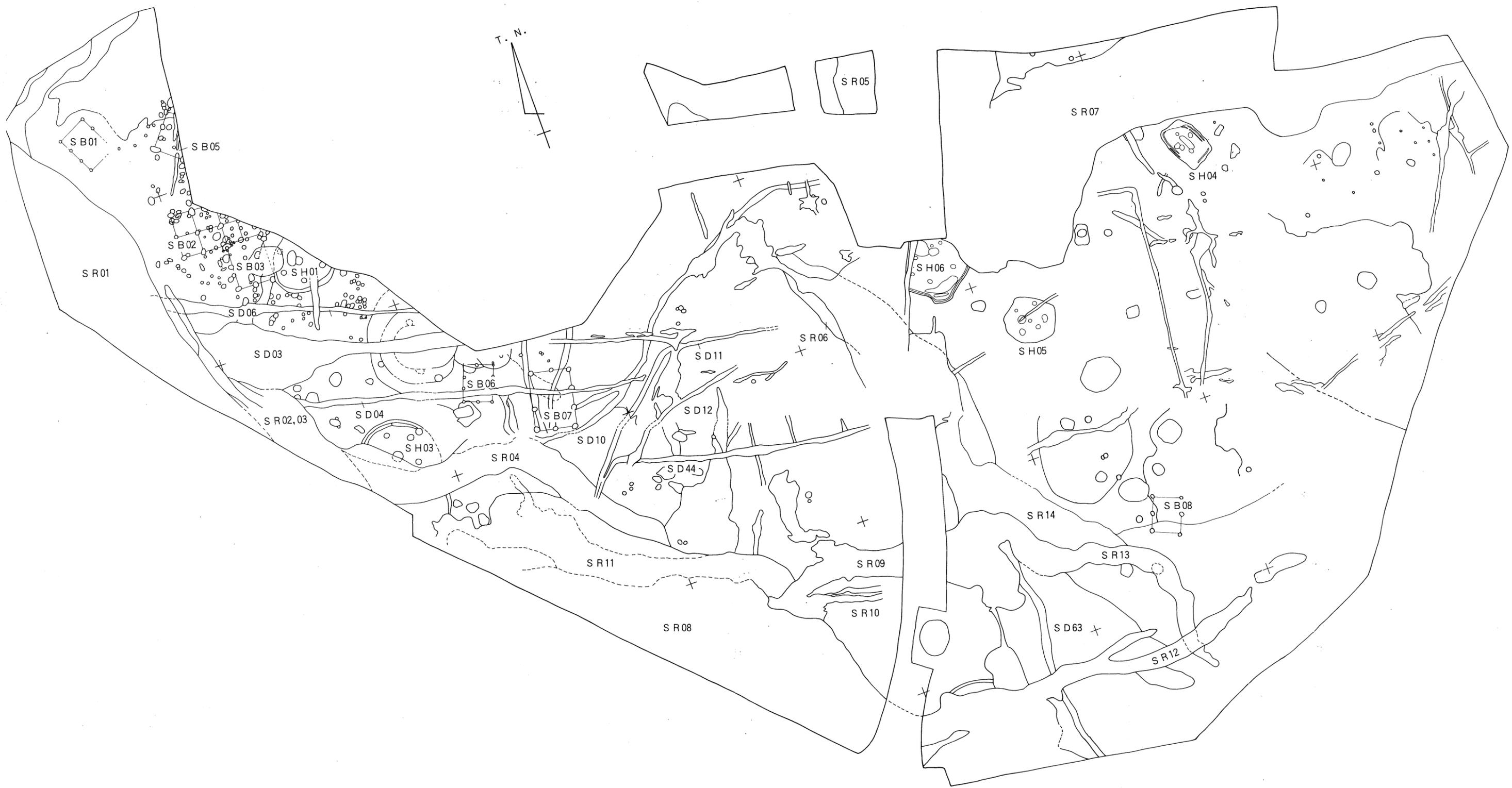
Ⅳ区内を、南より時計回りで、①～⑥区に細分して調査を行った。調査区の東西には中世に埋没した旧河道が存在し、その間の微高地には、南端部を除き、10～30cm程の弥生時代後期の茶褐色～黒灰色混砂粘質土の包含層が覆う。ベース面は、谷筋の扇状地堆積で変化が激しいが、大きく4地域に分けることができる。南端部の①区南半部は明橙灰色系の乾燥した砂層、①区北半部～②区南半部及び③④区西半部は黄灰色ないし淡青灰色シルト層で、それぞれ古代～中世のピット群と弥生時代後期の竪穴住居が検出されている。それに対し、②区北半部は濁灰色系砂及び砂質土層、③④区東半部から⑤⑥区は濁淡青灰色系砂質土層で、両者ともに湿潤であるためか、⑤区S B08を除き住居に伴う遺構は検出されていない。以下、東西の旧河道、包含層上面遺構、同下面遺構に分け、遺構の概況を記す。

a. 西側旧河道

②区西北部でS R05、③④区西部でS R07を検出した。両者は同一のものであると考えられ、径30cm程の流木を含み、東から北に鋭角に流れを変え、屈曲部は大きく張り出す。東側旧河道の洪水砂を切り、出土遺物から14～15世紀頃の流路と考えられる。

b. 東側旧河道

①区でS R01～03、①⑥区でS R04、④⑤⑥区でS R08～13を検出した。S R01は14～15世紀頃、S R02・03は13～14世紀頃の埋没と考えられ、東北東の流路を示す、S R04は9世紀頃の埋没と考えられ、



第71図 IV区遺構配置図

北から北東に流れを転じる。S R08~13は、切り合い関係は見られるものの、12~13世紀頃のほぼ同時期の洪水堆積による埋没と考えられ、調査区北半部の包含層を上下左右に削り込むとともにその上位に厚く堆積する。S R08の西肩部には杭列を伴う。

c. 包含層上面遺構

①区から②区南半部で掘立柱建物数棟を含むピット群と溝数条を検出した。S R01に平行するS B01は14~15世紀頃、暗褐色系埋土を有するS B02・03は南北の主軸を持ち、8世紀頃と考えられる。灰色系埋土を有するS B06・07は、10°と22°東偏する主軸を有し、条里を意識した建物配置を示す。それ

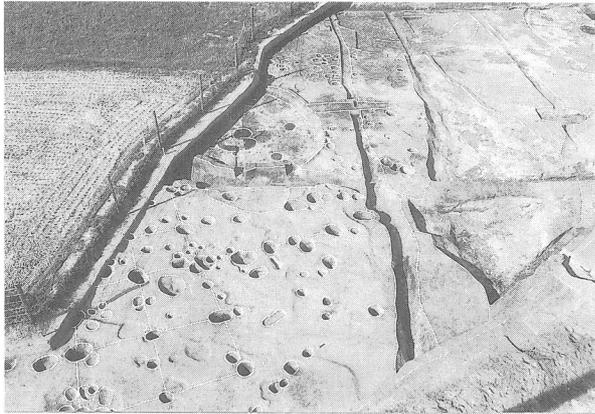


写真52 IV-①区遺構完掘状況（南より）



写真55 IV-①区S H03完掘状況（南より）



写真53 IV-①区S B02完掘状況（南より）

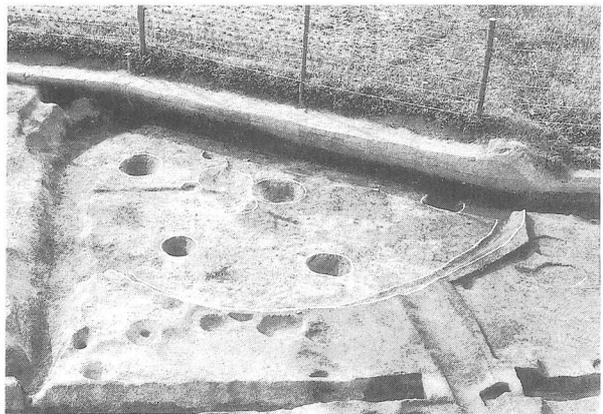


写真56 IV-①区S H01完掘状況（東より）



写真54 IV-②区S R06土器溜り（南より）



写真57 IV-⑥区遺構完掘状況（南より）

を切って約5m隔て平行して北流するSD03・04は、洪水砂による埋没状況を示し、12～13世紀頃の同時併存が考えられる。条里坪界推定線付近に位置しており、側溝を伴う道の可能性も考えられる。SD06は、須恵器を伴う黒褐色系粘質土の埋土で、条里施行期のものと思われる。また、⑥区から②区にまたがり、北西方向から条里方向に流れを転じる4条の溝を検出した。SD10はSR04洪水砂が流れ込んでいる状況が観察され、SD11・12・44はSR04を切り、SR08・11との同時併存が考えられる灌漑機能を持つ溝と思われる。

その他、③～⑥で、井戸と思われる遺構を数基、貯木土坑かと思われる遺構を3基検出している。

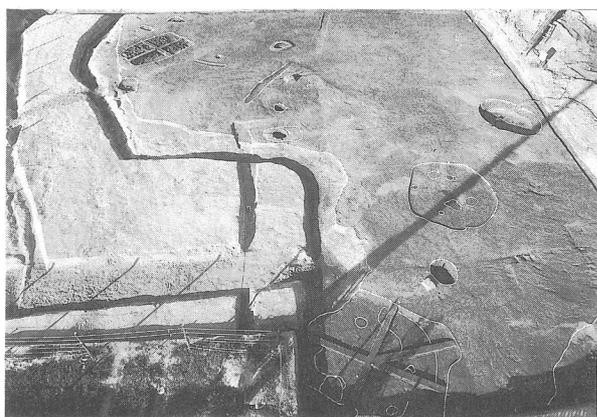


写真58 IV-③区遺構完掘状況 (南より)

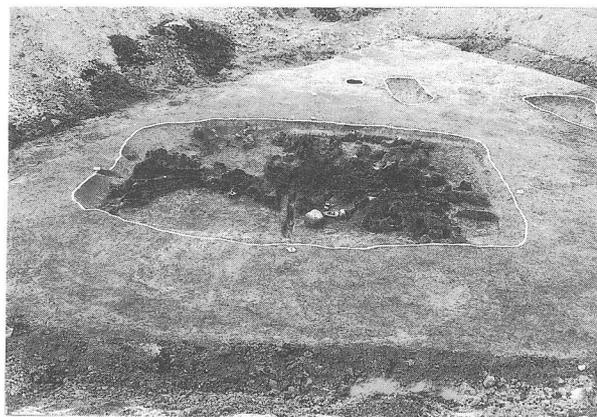


写真61 IV-③区SH04(焼失家屋)検出状況(南より)

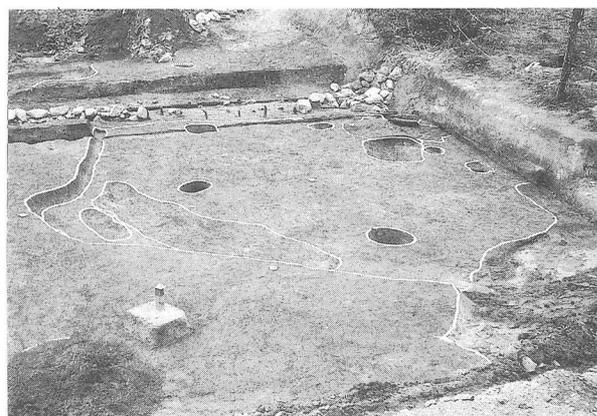


写真59 IV-③区SH06完掘状況 (北より)

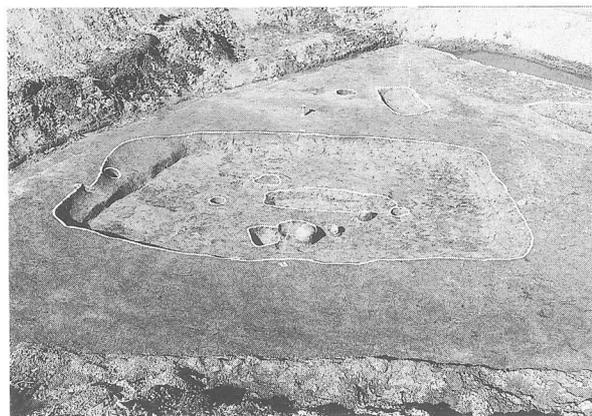


写真62 IV-③区SH04完掘状況 (南より)



写真60 IV-③区SH05完掘状況 (南より)



写真63 IV-③区SR06土器溜り (南より)

d. 包含層下面遺構

①区北半部から②区南端部で、竪穴住居2棟、壺棺墓2基の他、性格不明のピット群、土坑等を、また③区では竪穴住居3棟、性格不明土坑2基を検出した。竪穴住居の平面形態と主柱穴配置は、①区は直径8m程の円形で6本柱であるが、③区は変化に富む。焼失家屋のSH04は隅丸長方形の2本柱、SH05は変五角形の4本柱、SH06は張出部を有する隅丸方形で6本柱と推察される。

①③区の竪穴住居群の間にはSR06土器溜まりが存在する。②区北端部より開削され、⑤区SD63に続く北肩部に多くの土器を出土する。黒灰色粘土ブロックと砂層がラミナをなすSR06本体部は⑤区で、土器溜りを切り、北東へと流路を転じ、SR14に続き、須恵器・黒色土器片を出土した。SR06本体部及びSR14は包含層上に見られた古代の粗砂流路と一体のものとしてとらえるべきもので、その他の遺構はいずれも弥生時代後期である。

3. まとめ

原間遺跡で検出した遺構をみるとそれぞれの調査区ごとに中心となる遺構の時期が違ってくることを確認できた。それぞれの中心となる時期はI区が弥生時代後期、II・III区が7・8世紀、IV区が弥生時代後期と平安時代の3期に大別できる。それぞれの時期ごとに説明し、まとめにかえたい。

弥生時代

弥生時代の遺構はI区とIV区で主として検出している。遺構は竪穴住居・掘立柱建物・土坑・井戸などである。検出した遺構面を細かく見るとI区ではやや微高地上になる部分で検出しており、IV区では南西から北東へと緩やかに傾斜する西側微高地部分で検出していることが解る。また、竪穴住居の平面形態には方形のものと円形のものがあり、住居内からの遺物の時期や切り合い関係がほとんどないことから、同時期に方形と円形の竪穴住居が併存していたことが窺われる

遺物は壺・甕・鉢・高坏が出土しており、「下川津B」類土器がかなり目立っている。

以上のことから原間遺跡の弥生時代の遺構はほぼ弥生時代後期中葉に成立し、継続することが無かったと考えられる。また、遺物の面からも「下川津B」類土器の出土が徳島県への「下川津B」類土器搬入の拠点的な集落の可能性を考えるのに重要な位置を占めるものとする。

7・8世紀

7・8世紀の遺構はII・III区で検出している。検出した遺構は竪穴住居・掘立柱建物・土坑などで、特にII区は洪水砂の上面で検出するという特異な状況を呈している。また、7世紀の掘立柱建物は南北主軸がほぼ南北を取るもので、丘陵裾部の地形的な制約を受けず、同じ方向であることが確認できる。立地は弥生時代の遺構の検出場所と大きく変わっており、I・IV区の平坦地を選ばず、丘陵裾部に立地している。

平安時代

平安時代の遺構はIV区で検出している。検出した遺構は掘立柱建物で、南北主軸を現在大内町に見られる方各地割と同じ方向を持つ。このことから大内町の方格地割の施工時期を決定するのに有効な資料となるものである。

成 重 遺 跡

1. 立地と環境

成重遺跡は、大川郡白鳥町成重にある。国道318号を挟んで東西に約450mほどの範囲が調査対象となっている。

成重遺跡の南方から東方にかけては虎丸山系・帰来山系・与治山山系の山麓地が北方へ連続しており、その中の通称、かんざし山からの尾根が調査区のすぐ東側にのびる。西方には湊川が流れ、北方に向けて沖積平野が続いている。北方約1kmの地点に旧の海岸線が存在していたと考えられている。

四国横断自動車道建設（津田－引田間）に伴い、発掘調査が実施されている周辺の遺跡としては、大内町の原間遺跡、住屋遺跡、白鳥町の善門池西遺跡があり、また、谷地区、樋端地区、法月地区は実施予定である。

白鳥町周辺の遺跡について、まず縄文時代の遺跡は、町内では現在まで確認されていなかったが、本年度の原間遺跡の調査で縄文時代後期の自然流路を確認している。

弥生時代の遺物が出土している例としては、四房遺跡で大型の壺形土器、松原遺跡で壺、赤坂古墳周辺で石鏃が出土している。

白鳥町内で見つかっている古墳のうち、最も古い古墳が大日山古墳である。古墳時代前期の築造と考えられており、大内町との境になっている秋葉山山頂から西300mの尾根上に築かれている。標高56mの地点にあり、墳丘上に大日如来の石仏が祀られているためこの名称がつけられている。墳丘全長は38mあり、前方部の長さ18m、後円部直径20m、高さ1.8mの前方後円墳である。未発掘のため埋葬施設は明らかでないが、後円部頂上に安山岩の板石が積み上げられており、これはもと竪穴式石槨の用材だったかもしれない。出土遺物は、埴輪片が出土したという言い伝え以外には知られていない。

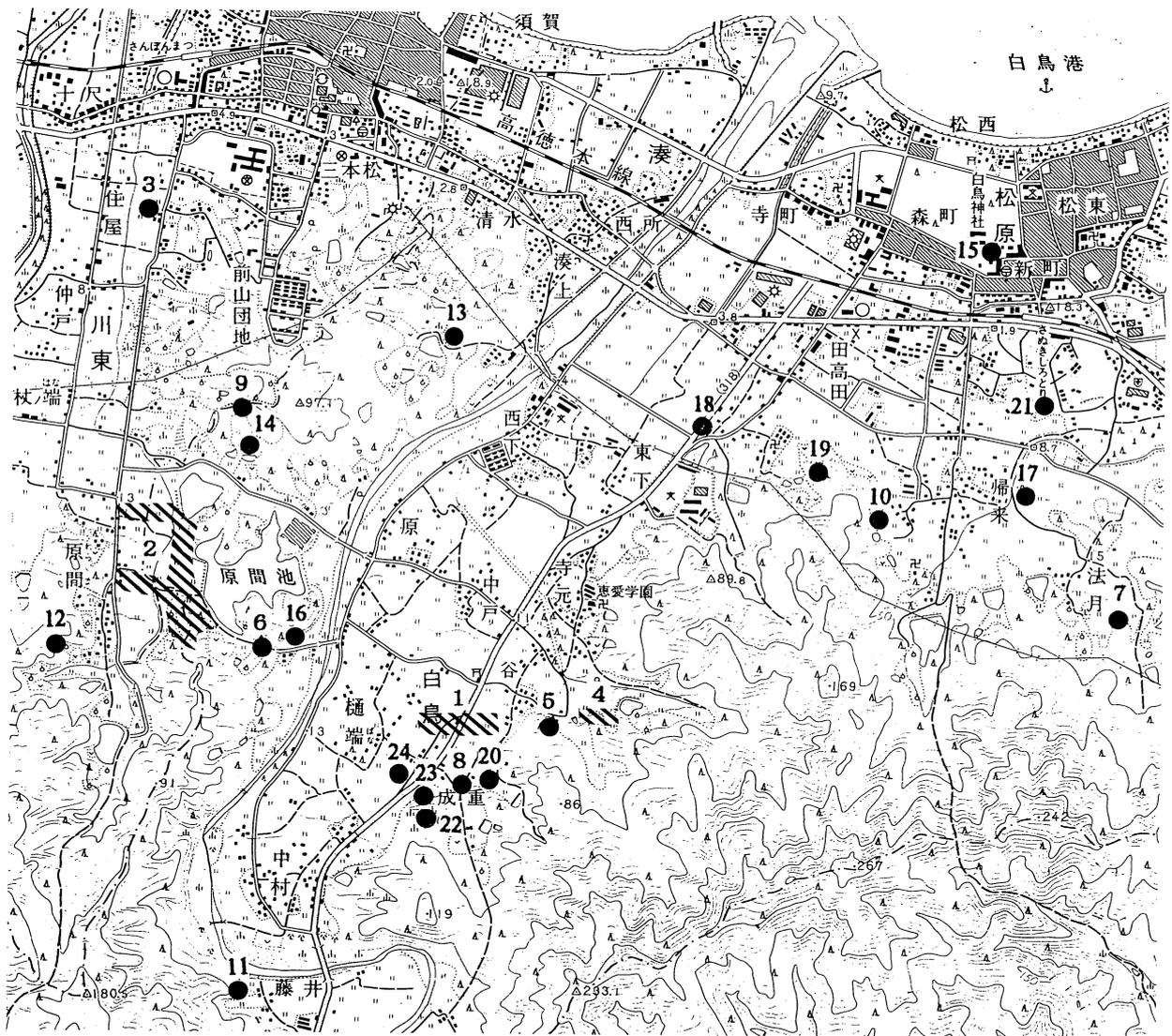
帰来の観音寺の北西2～300mの丘陵斜面に、赤坂古墳群が所在する。横穴式石室を埋葬施設とする古墳が7基ほどあったらしいが、開墾などでくずされ、現在残っているものは2基ほどである。1号墳は最も高い標高30mの丘陵斜面に築かれた古墳である。すでに墳丘はないが横穴式石室の一部が原位置のまま残されている。石室は長さ2.3m、幅1mの大きさである。2号墳は、1号墳から数十m下に位置し、出土した遺物から6世紀末頃の築造と考えられている。

藤井古墳は町内にある古墳のうちで最も南に位置している。標高30mの山裾にあり、墳丘は後世の開墾等に変形しているが、南側が旧形をとどめているようで、この部分から推定すると直径12～14mの円墳だったようである。高さは3～4m、石室は全長7.85mの横穴式石室である。出土遺物は土器片が少量で、そのため築造時期は明確でないが両袖式石室が退化した石室のようなので、6世紀末～7世紀前半頃のものと考えられる。

原間古墳は現在は大内町に属しているが、もと白鳥村に属していた。この古墳は大内郡内では最大の横穴式石室として以前から知られていた。場所は、虎丸山から北に派生した一支脈上にあり、原間集落の南西隅である。墳丘は直径10mの円墳で、規模としては普通の大きさである。内部には全長6mの片袖式の横穴式石室が築かれている。奥壁は一枚の巨石が使われており、側壁は5段積である。床には礫がしかれる、いわゆる礫床の可能性が強い。出土遺物は少量であるが、須恵器杯・高杯・壺・甕等の破片が見つかり、これらから、築造年代は6世紀後半から7世紀初め頃と考えられる。

湊川にかかる千光寺橋の西200mのところ、白鳳時代創建と考えられている白鳥廃寺が所在する。南北の丘陵に挟まれた低地の丘陵付近に、二つ東西に並んだ土壇があり、付近に瓦片が散っていることから、以前から古代寺院として関心を持たれていた。塔跡や堂跡の存在が確認され、また寺全体の大きさや伽藍配置についての推定でも大きな成果を上げている。

町の西端にひかえる寺山の南麓にもう一つの寺院跡、高松廃寺がある。この名称は、大内町与田寺にある文書に「高松寺」とあることからつけられた名称らしい。基壇など寺院遺構は認められず、平坦地の範囲は狭く、白鳥廃寺のように伽藍を配置した寺院とは考えられず、小規模な寺院だったと推定できる。



- | | | | |
|----------|---------|----------|-----------|
| 1 成重遺跡 | 7 法月地区 | 13 白鳥廃寺 | 19 秋葉神社古墳 |
| 2 原間遺跡 | 8 四房遺跡 | 14 高松廃寺 | 20 成重北遺跡 |
| 3 住屋遺跡 | 9 大日山古墳 | 15 須崎山竊跡 | 21 白鳥城跡 |
| 4 善門池西遺跡 | 10 赤坂古墳 | 16 神越古墳 | 22 成重南遺跡 |
| 5 谷地区 | 11 藤井古墳 | 17 帰来遺跡 | 23 観音谷遺跡 |
| 6 樋端地区 | 12 原間古墳 | 18 城泉遺跡 | 24 一支部南遺跡 |

第72図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第73図 調査区割図 (1/4,000)

調査区は国道318号線を挟んで東西に約450m、南北に70~80mの範囲に及ぶ広大なものである。道路や田畑の畦畝などで大きく調査区割を行い、その中で調査工程の都合などにより小調査区に分けた。大きくA区からG区に分かれ、国道318号線から東側がA区~D区、国道から西側をE区~G区となっている。

調査区の地形は、調査区東端の丘陵 (D区付近) と、調査区の南側から北側にかけてひろがる2つの微高地 (C2区付近とB・E・F区付近) の間の谷筋に自然流路が流れ、それが堆積している。弥生時代の遺構や集石墓は2つの微高地上にあり、自然流路が埋まった場所には古墳時代以降の遺構がある。調査区西端 (G区付近) には比較的新しい時期の自然流路があり、微高地以外にも弥生時代の遺構は存在している。

遺構面はどの調査区も基本的に2面あり、下層の第2遺構面には弥生時代の遺構が、第1遺構面には古墳時代から中世にかけての遺構がある。しかし遺跡東端部の山裾部分では一部、弥生時代後期の遺構が埋没したすぐ横から、その遺構を壊して古墳時代前半期の遺構が構築されていることから、第2遺構面から第1遺構面までの埋没時間は比較的早かったことが伺える。

2. 調査の成果

弥生時代

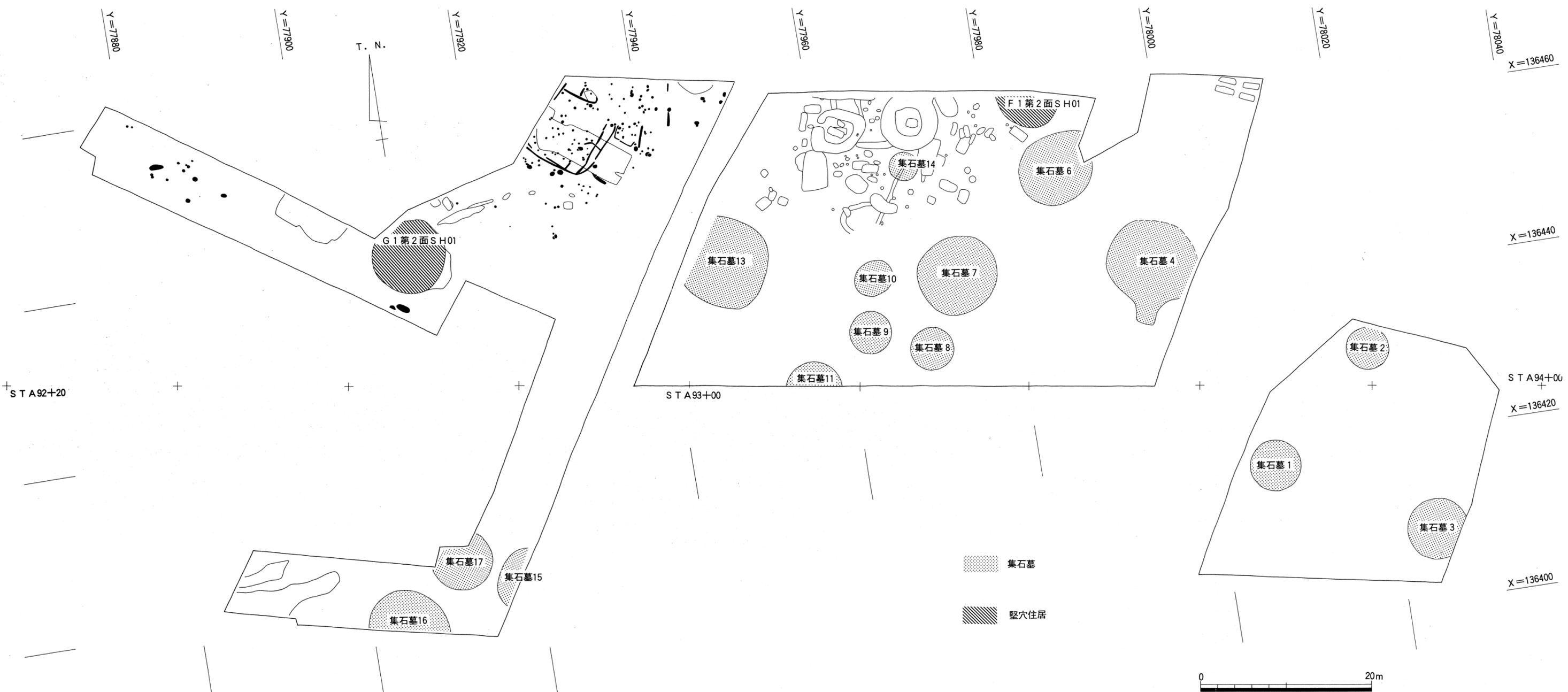
D2区第2面S D05 D2区の西部において部分的に検出された方形プランを呈すると思われる溝状遺構である。規模については幅0.7m、長さ南北9.2mを測り断面形は逆台形を呈する。南側は鋭く、北側は穏やかに屈曲するコーナー部分をもち、調査区外西へ延びる。平面プランより方形周溝墓の可能性を考えたが、南北の溝の屈曲部比高差が約0.6m程存在することや周辺に同時期に属する竪穴住居などがやや濃密に分布することなどから、居住域内の区画溝かあるいは竪穴住居の周溝の可能性はある。遺物の出土状況は両コーナー部分にやや集中して見ら



写真64 D2区第2面S D05検出状況 (北より)



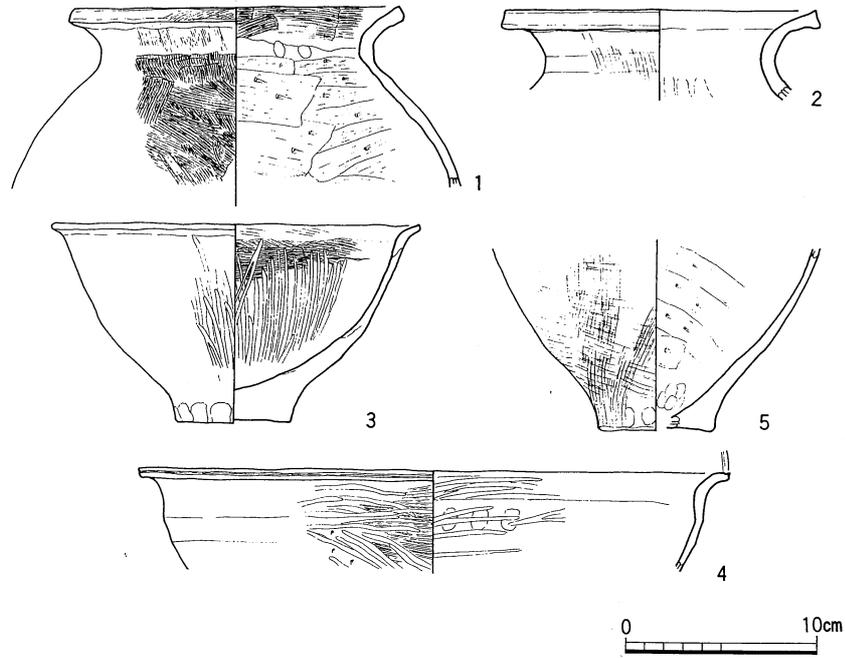
第74図 A区~D区第2遺構面遺構配置図 (1/400)



第75図 E区~G区第2遺構面遺構配置図(1/400)

れた。時間的に同時性の高い土器群であるため全点ではないがここに提示したい。

1, 2は広口壺である。1は外面は密なタテハケ、内面は頸部付近まで横方向のケズリ調整を施す。3・4は鉢である。3の鉢は内外面ともにタテミガキ調整を行う。5は甕である。調整方法は外面に左上がりのタタキを行った後タテハケ、内面は縦方向のケズリを施す。以上、これらの土器群は後期中葉に属すると思われる。



第76図 D 2区第2面S D05出土遺物 (1/4)

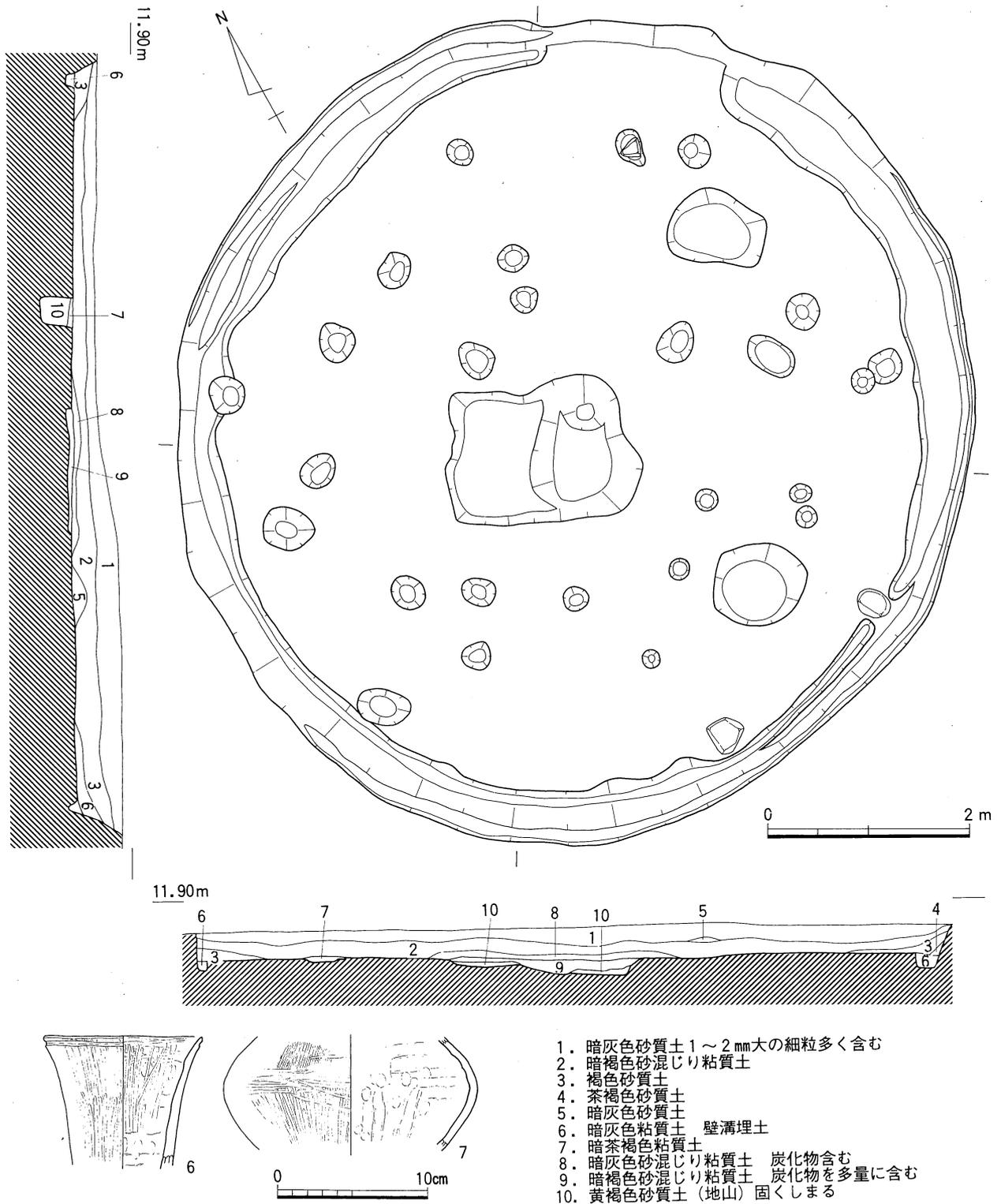
D 1区第2面S H01 D 1区の南側で東から西へ下る山裾部分の平坦面で検出した竪穴住居跡である。平面形は円形で直径は7.8m~8.1mと大型である。検出面から床面までの深さは35cm~45cmであった。床面の壁際には壁溝が巡っているが、壁そのものから離れている部分もあり、北東部分と南部分は一部位切れている。中央部分には1.25m×1.95mの長方形の土坑があり、周囲に柱穴を円形に巡らせている。中央土坑は深い部分でも15cmほどしかないが、炭化物が多量に含まれており焼土も一部に見られた。またこの土坑の上面には炭化物を含む暗灰色砂混じり粘質土が堆積していた。床面には直径3.2mの円周上にのる柱穴が6基と、直径5.4mの円周上にのる柱穴が8基あるがどれが支柱穴に相当するかは今後の検討としたい。柱穴と土坑の中間の大きさのピットも2つ検出した。北東部分の壁溝が途切れた部分でサヌカイトの大型剥片が3点まとまって出土した。また南側では台石と思われる石が2点出土している。このことから住居内で石器を製作した可能性もあるが、それを示すようなチップなどは出土していないが、安山岩製の石庖丁の未製品が1点出土した。土器・石器以外に器種は不明であるが鉄器が1点出土している。

6は細頸壺の口縁部である。口縁端部よりやや下がった位置に一条のヘラ描き沈線を施す。7は下川津B類の細頸壺の胴部である。胴部上半はタテハケ、下半部はヨコハケを施した後にタテミガキを施す。そして最大径付近はヨコミガキを施している。6, 7ともに後期中葉に属する。

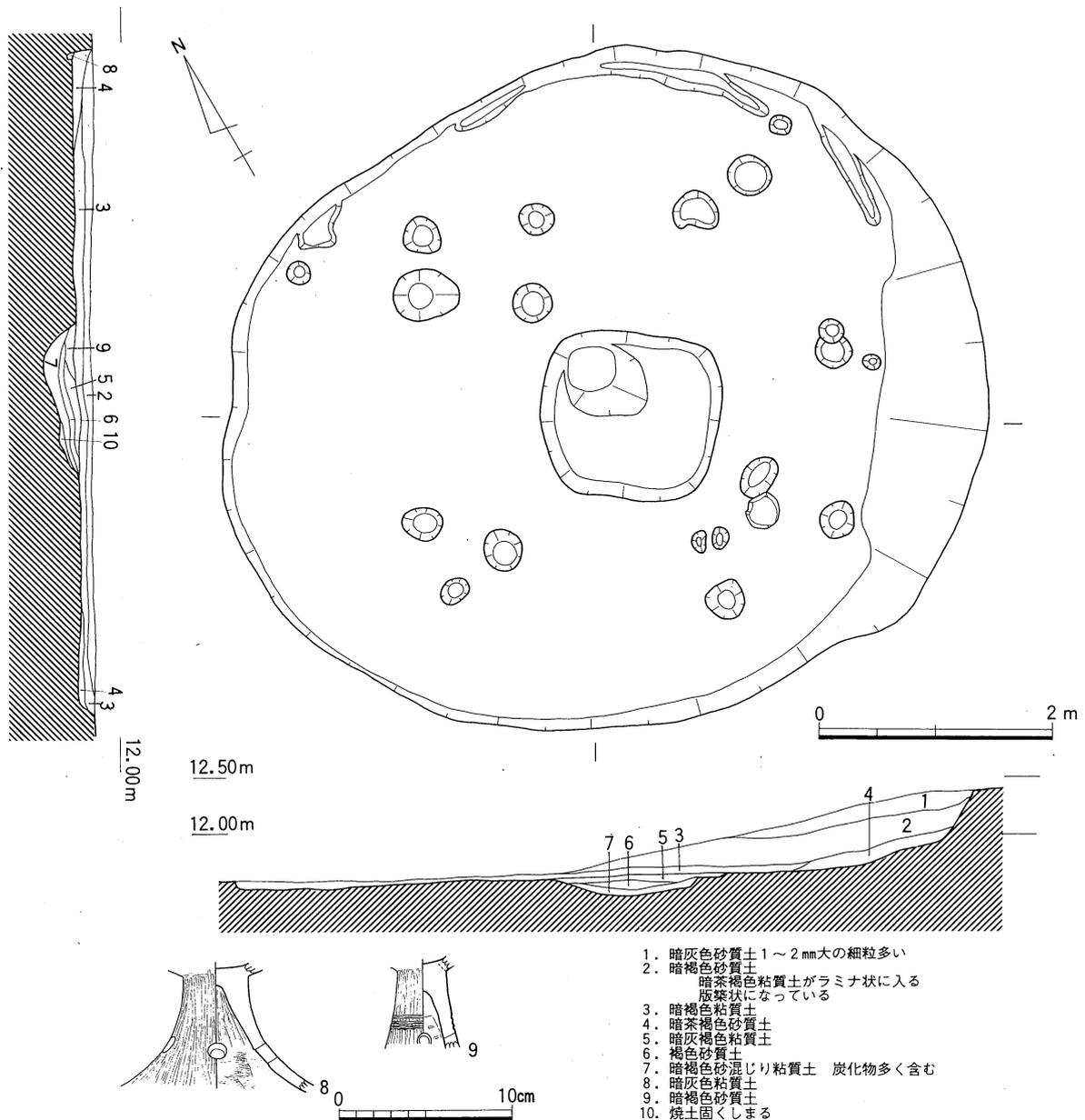
D 1区第2面S H02 D 1区の南側で東から西へ下る緩斜面から平坦面に変換する部分で検出した竪穴住居跡である。S H01の北東約4mの位置に隣接している。平面形は円形で、直径は5.9m~6.5mで東西方向に少し大きくなっている。住居は山の傾斜地から掘り込んでいるが床面は平坦にしている。そのため住居壁面は山側の部分では80cmと深くなっている。これに対して西側の平坦面側は逆に10cmと浅くなっている。北側部分に壁溝が部分的に巡っている。住居の中央部分には1.4m×1.7mほどの長方形の土坑がある。土坑底面は北側の隅が部分的に深くなっており、30cmほどの深さがある。また硬くしま

り焼けた部分があり、埋土中には炭化物が多く見られた。床面には柱穴が幾つかあるが、主柱穴は4本と考えられる。

8は高杯の脚部である。透かしは脚部中位に3方向穿たれている。外面は密なタテミガキを施し、内面は上半部に絞り痕を残す。9は高杯の脚部である。透かしは脚部中位に2方向穿たれている。この透



第77図 D1区第2面SH01平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)

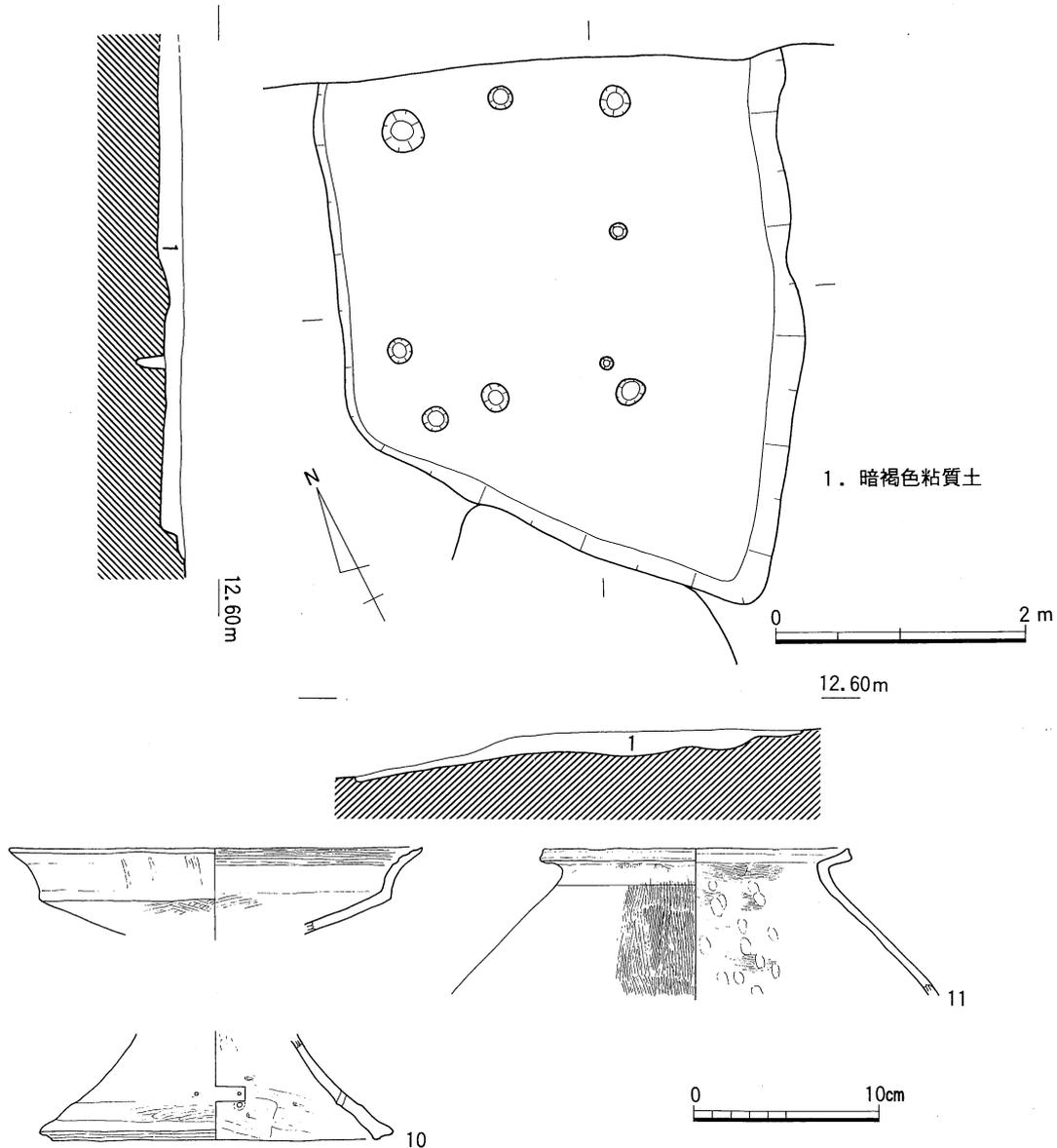


第78図 D1区第2面SH02平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)

かしの上方に4条のヘラ描沈線を施している。調整方法は外面がタテミガキ, 内面は下方から見て右方向のヘラケズリ調整を行う。8, 9ともに後期中葉に比定される。

D1区第2面SH03 SH02の北側約5mのところの位置する竪穴住居跡で緩斜面に作られている。住居の北側部分は調査区外に続いたため全体の規模は不明である。平面形は方形で東西方向3.7m, 南北方向は検出部分で2.8m~4.4mとなっており, 南側の部分が斜めになっている。壁の立ち上がり部分は東側の山側部分で20cm, 平坦部側の西側で5cmと全体に浅くなっている。床面は南北方向は平坦であるが, 東西方向で若干西側に傾斜している。床面の施設としては, 検出部分で土坑や壁溝などは伴っておらず, 支柱穴は4本と考えられるが, 全体に西側に偏っている。1点であるが鉄鏝が出土しているのが注目される。

10は下川津B類の高杯である。杯部と脚部は接合しないが同一個体と思われる。口縁部内面に3条の凹線を施す。脚部の透かしは2孔一対で脚部やや下方に2方向穿たれている。11は下川津B類の甕であ



第79図 D1区第2面SH03平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)

る。鋭く屈曲する短い口縁部をもち、口縁端部内面を強いヨコナデによって若干比高させている。調整方法は胴部外面がタテハケ、内面に指頭痕を明瞭に留める。10, 11ともに後期後葉に比定される。

C2区第2面SK02 調査区の東端で検出した木棺墓と考えられる土壌である。墓壙の平面形は全体としては1.8m×1.1mの長方形であるが、南側が北側に比べて狭くなっている。内部には木棺の痕跡が認められた。木棺は両側板で小口板を挟み込むもので、北側の小口板は内側に入り込んでいるため、北側の側板の端部が把手状に突き出している。側板の長さ相当の長辺は1.6m、短辺は0.75mほどである。木棺の側板および小口板が粘土化しながらも部分的に残存しており、木棺部分の高さは35cmほどに復元出来る。木棺は土壌の底部を整形・置き土した後に据えている。そして木棺を安定させるために裏込めの土を充填している。墓壙の短辺は木棺の割に幅広になっており、充填土も多めになっている。副葬品にあたる遺物は皆無であった。時期決定が出来る遺物はないが、検出遺構面や周辺の遺構との関係から

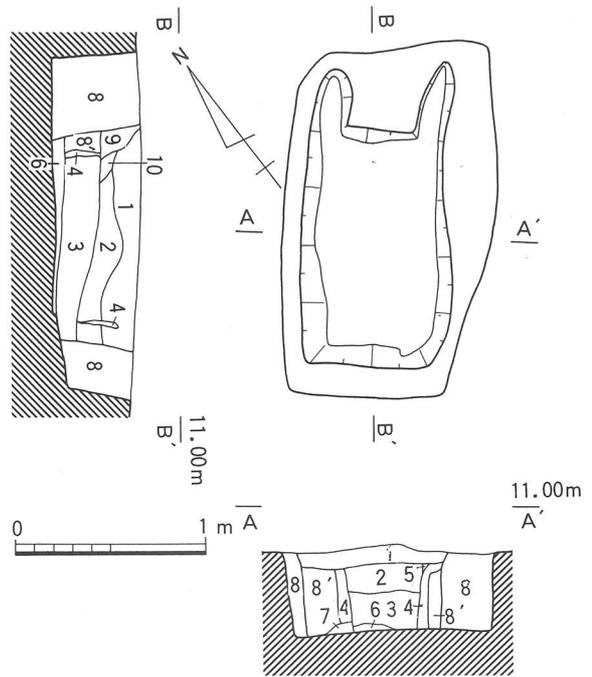
弥生時代後期頃と考えられる。またS K02と主軸をそろえて縦に列をなして並ぶ土壇が他に3基検出されている。

B区～C区第2面集石墓

立地 調査区内のみであるがD1区の丘陵の部分とC2区低地部分との境から低地を挟み、B区の西端までの丘陵もしくは微高地から低地へ若干傾斜する地形に分布する。また、D1・2区などの丘陵部分には分布しない点は注意される。各集石墓の时期的な点を無視して分布を見るならば、集石墓K01のみが単独で存在し集石墓K2～7はやや不規則ながら列状に西に向かって分布している。また、竪穴住居に隣接して分布している点も注意される。

形態 集石墓K1・2が長軸約9m～8m程の楕円形をとる他は約6m程の円形プランを呈する。

各集石墓とも出土土器の帰属時期に若干の時間差をもつ。概ね弥生後期中葉～終末期の所産と現時点では捉えたい。この時間差がそのまま遺構の存続幅に起因するものなのか、単なる混在している状態な



- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 暗褐色粘土 | 6. 暗黄褐色粘土 |
| 2. 暗茶褐色砂混じり粘質土 | 7. 暗褐色砂混じり粘質土 |
| 黄褐色粘土ブロック含む | 8. 暗茶色粘土+黄褐色粘土 |
| 3. 黒褐色粘土 | 8'. 8よりやや暗い |
| 4. 暗灰色粘土 | 9. 黄褐色砂混じり粘質土 |
| 5. 暗茶褐色粘質土 | 10. 黄灰色砂混じり粘質土 |

第80図 C2区第2面S K02平・断面図(1/40)

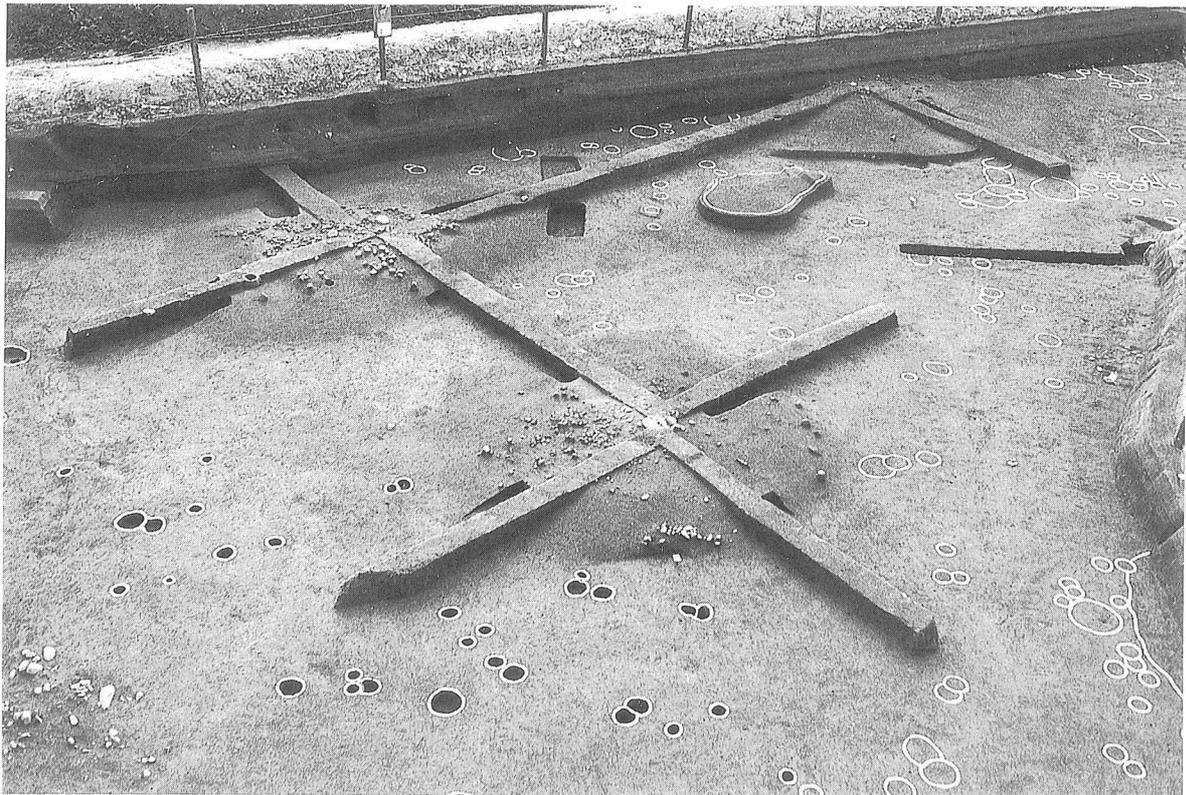


写真65 集石墓K02・03・04検出状況(東より)

のかは調査途中であるので保留したい。

C 2 区第 2 面集石墓 K 01 堅穴住居が比較的集中する D 1・2 区の丘陵部分から西へ一段下がった低地部分との境で検出された礫と土器と土から成るマウンドである。平面形は南北方向の楕円形を呈する。規模は南北約 9 m, 東西約 6 m, 高さ 0.5 m を測る。マウンド上面は土器や石器, 他に 20 cm から 3 cm 程の礫からなる礫堆によって被覆されている。現在, 調査中であるが, 現時点での調査所見を検出状況から構成要素別に述べる。

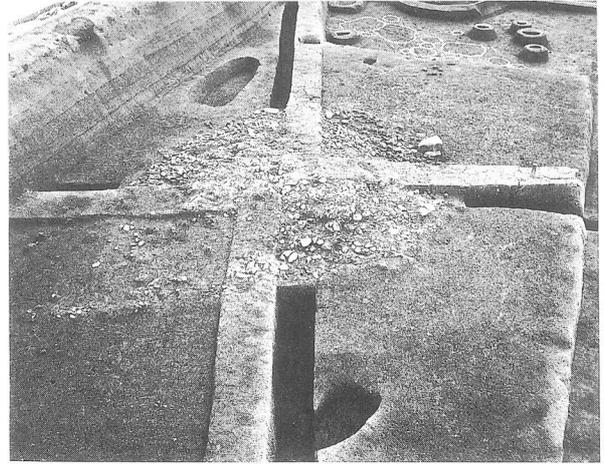


写真66 C 2区第2面集石墓 K 01 礫堆検出状況(北より)

各地区において第 1 遺構面は概ね灰色の粘土層をベースとしており, 第 1 遺構面を検出した段階で前述した礫堆の頂上部が確認できた。この礫堆は第 1 遺構面の灰色粘土層にバックされている状態であった。この灰色粘土層を除去すると礫堆はやや楕円形の平面プランで確認された。礫堆の裾のレベルは第 2 遺構面の黄灰色のシルト層まで達しないため, 第 1 遺構面と第 2 遺構面との間からこの礫堆が形成されている可能性を考えて, 礫堆周辺の精査を行ったが遺構面としての明確な認識は得られなかった。そこで礫堆中央から裾部を含めた断ち割りを行い礫堆下部と周辺の土層観察を行った。第 1 遺構面と第 2 遺構面との間には, 各地区において少量の弥生後期土器片を含み黄灰色粗砂(粘土・中粒砂混)から成る厚さ 20~30 cm 程の包含層が確認される。礫堆の下部土層とこの包含層との区別は極めて困難である。また, 礫堆の下部では周囲より, この包含層に似た土層中からの土器の出土量が多い。



写真67 C 2区第2面集石墓 K 01 礫堆内土器出土状況(西より)

礫堆下部の状況, 礫堆の中央部にあたる部分の下位には, 構築面である黄灰色の粗砂混り粘土とその下層の黄灰色粘土層が周囲よりも盛り上がった状況が観察された。元来丘陵部分から西へ突き出た微高地の部分にこの礫堆を形成していると考えられる。この礫堆中央下部のやや高まりをもった構築面の地形から, 周囲に向って前述した包含層に似た土が堆積しているが, 人為的なものなのか, 現状では判別しづらい状況である。また, この段階では礫堆の下部はほぼフラットな状態である。そして西側へ向って傾斜している状態であった。

礫堆 長辺約 40 m, 短辺約 35 m の楕円形を呈し, 中央部で厚さ約 0.2 m を測る。この礫堆は約 20 cm から 3 cm ほどの角礫と円礫を土器片や石器を灰色系の粘土で強護に固定したものである。マウンド周辺に礫や土器の転落が認められないことから構築直後には礫と土器は見えない状態であったと推測できる。礫堆の裾部には約 25 cm から 20 cm ほどの石材が配置されており礫堆の平面的プランを区画している状況も看守される。また, 礫堆の南西部分裾において人頭大の石材がやや浮いた状態で検出されたことから構築当初はこの石材が礫堆の中央に置かれていたと思われる。

礫堆内の遺物の出土状況 遺物は土器・石器ともに確認されたが, 土器については完形の状態では検



第81图 C2区第2面集石墓K01平·断面图(1/40)



写真68 C 2区第2面集石墓K01検出状況（南西より）

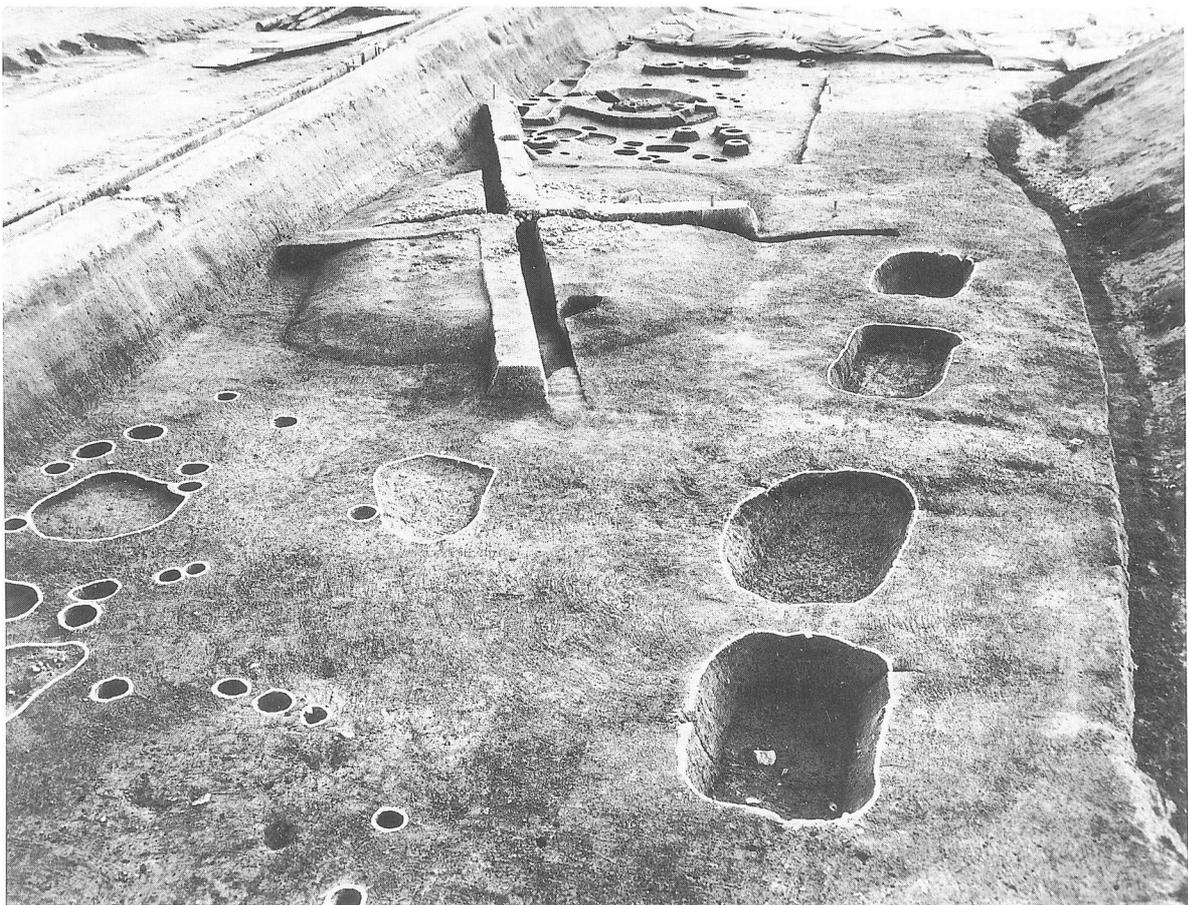
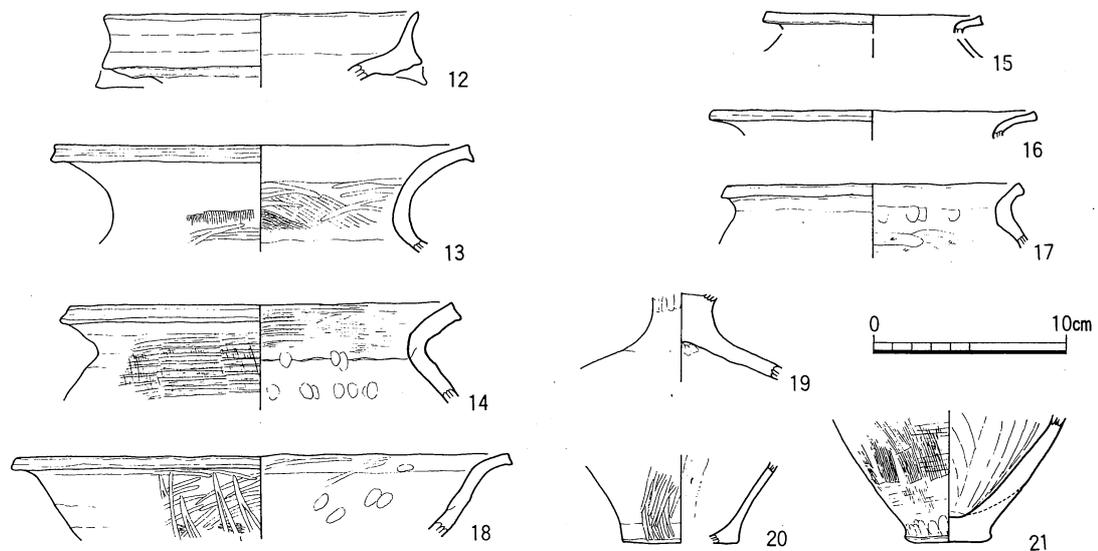


写真69 C 2区第2面集石墓K01,土壇墓列（北より）



第82図 C2区第2面集石墓K01礫堆内出土遺物(1/4)

出されない。いずれも口縁部・胴部・底部といった状態であり、また、平面的にも集中する箇所は認められない。機種組成は全点確認できているわけではないが、壺・甕・鉢・高杯が見られる。次に土器の帰属時期について検討すると中期中葉の土器を少量確認しているが、殆どが後期後葉から終末期の所産である。

石器については現在までに結晶片岩製の石包丁が1点、サヌカイト製の剥片を1点確認している。他に叩き石、磨石も若干ながら確認している。

集石墓K01礫堆内出土遺物 12は複合口縁壺の口縁部である。口縁部を上下に拡張するタイプと思われるが下方の部分は剥落している。13は広口壺の口縁部である。14は頸部が鋭く屈曲する甕である。外面に明瞭な平行タタキが見られ、全体的にやや厚手の印象を受ける。15は下川津B類甕の口縁部である。16・17ともに甕の口縁部であるが、17は内面のケズリ調整が頸部付近まで及ぶ。18は鉢である。19は低脚の高杯の脚部である。20・21は甕の底部である。20は下川津B類甕の底部である。外面はタテミガキ調整、内面はタテケズリを施す。21は底部がやや突出する形態をもつ。調整方法は外面が平行タタキを施した後タテハケ、内面は縦方向の指ナデを施している。他に少量ではあるが中期中葉に比定される土器も確認している。

土器の帰属時期について検討してみると、中期中葉のものを除いて後期中葉から終末期のものが見られる。礫堆内の土器の網羅的に検討したわけではないが、最も新しい段階に属する終末期の土器をもって集石墓K01の時期を設定しておきたい。

また、調査途中であるのでマウンドの全体の構造や下面の遺構に関しては保留したい。

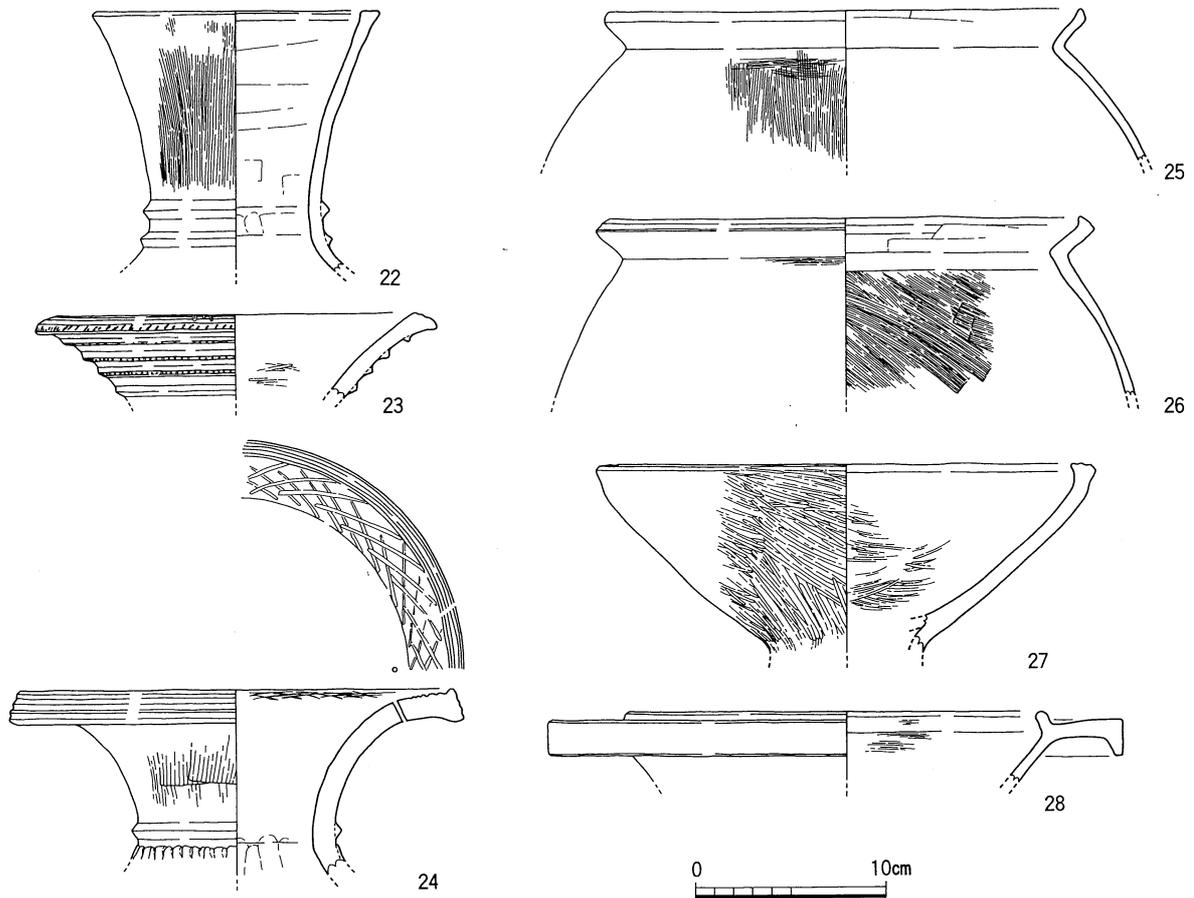
E1区第2面集石墓1 調査区の南西部で検出した集石墓である。墳丘の北東部分の大部分は失われていたが、その平面形は直径7.1m前後の円形である。墳丘は地山面から土と石を盛り上げて構築しており、墳頂部までの高さは60cmほどである。地山面から30cmほど盛り土を行ってある程度墳形を整えた後に、その上部に拳大の礫を30cmほど盛り上げている。また礫の中には人頭大のものも数個含まれている。礫は砂岩が中心であるが、その他に花崗岩・結晶片岩がある。そして礫とともに破碎された土器が多量に出土している。土器は上部の礫中のみならず、下部の盛土部分からも出土しており、器種としては壺・甕・高杯がある。土器とともに少量であるが石鏃・石庖丁・石斧が出土しているが、加えて上部の礫中に今のところ1点であるが獣骨が含まれていた。また墳端部には特に西半分で顕著であったが、10



写真70 E1区第2面集石墓1 (北より)



写真71 E1区第2面集石墓1断面 (東より)



第83図 E1区第2面集石墓1出土遺物(1/4)

~20cmほどの礫を巡らせていた。墳丘の盛土や礫に混じって少量であるが炭化物が確認された。南側の墳端付近にピット状の焼土面があり、埋葬に伴って火を使った行為を行っているようである。現在調査途中であり、埋葬施設などの墳丘の下部の状況はまだ不明であり、墳丘の構築・埋葬過程の復元は今後に譲る。

22の口縁部は緩く外反して立ち上がり、端部上面を強くナデている。外面はハケ目を施した後に端部付近をナデている。頸部には断面三角形の突帯を2条貼り付けている。23の口縁部端部は外傾する面をもち沈線を2条巡らせているが、部分的に沈線に直交するようにヘラ状工具で刻みを入れている。端部外側にも刻み目を巡らせている。外傾する口縁部外面には刻み目を施した突帯を現存で4条貼り巡らせている。24の口縁部は大きく外反して開き、端部は上下に拡張している。端面にはヘラ描き沈線が3条巡っている。口縁部内面にはヘラ描きの斜格子文を施しており、現存で1個の穿孔がある。口縁部端部付近はナデており、下部にはハケ目を施している。頸部には2種類の突帯を貼り巡らせている。下部の突帯は粘土紐を貼り付けた後に板状工具の木口部分で押圧して刻み目状にしている。25は口縁部端部を上方につまみ上げている。体部上半は丸く張っている。外面には口縁部付近に横方向のハケ目を施した後に全体に縦方向のハケ目を加えている。内面は摩滅している。26は口縁部端部を内側につまみ上げており、端部外面には強いナデにより凹線が形成されている。口縁部は体部に比べて厚手である。体部上半は丸みを帯びており、外面は摩滅しているが口縁部付近にハケ目が少し残っている。内面は全体にハケ目を施している。27は高杯の杯部で、全体に緩く内湾しており端部を強くナデることにより上方に屈曲させている。また端部は上面に平坦な面をもち、ヘラ描き沈線を2条巡らせている。内・外面全体に

丁寧にヘラミガキを施しているが、外面のヘラミガキの方が太くなっている。28は高杯の杯部で、屈曲して開き、端部は下方に垂下させている。また屈曲部の内面には内傾する突帯を1条貼り付けている。全体に摩滅している。

E区第2面集石墓2 調査区の北西部で検出した集石墓である。墳丘の北側は一部調査区外に伸びるため全体は検出できなかったが、平面形は南北方向に少し長い楕円形である。その規模は長径が検出部分で4.9m、短径が4.6mである。墳丘は地山面から土と石を盛り上げて構築しており、墳頂部までの高さは65cmほどである。墳丘の立ち上がりは急で、特に南側は屈曲して立ち上がっている。墳頂部は平坦で、平坦部分が多くなっている。また中央から少し西の墳頂部には80cm×30cm×20cmの標石と考えられる大きな石が置かれていた。墳丘は礫と土が半々ぐらいの割合であるが、中程が土の比率が高くなっている。墳丘の表面は礫が見え隠れしている状態で粘質土に包まれているが、この粘質土が墳丘の形を整え礫が崩落しないように接着剤のような役割をしているものと考えられる。礫は主に拳大の円礫・角礫で砂岩が多い。また花崗岩もあるが、花崗岩は墳丘の下部になるほど増える傾向にある。また焼けて赤変した礫も数点みられた。これらの礫に混じって多量の土器と少量の石器が出土している。土器は破碎されているものと、そのまま潰れた状態のものがあり、墳丘の北東部分に集中していた。石器には石鏃・打製石庖丁・石斧などが出土している。

埋葬施設は地山面から掘り込んで構築している。墓壇の掘り形は1.95m×1.07mの長方形であるが、北側部分が南側に比べて広がっている。また埋葬施設は木棺と考えられ、その痕跡が平面的に確認できた。木棺の平面は1.37m×0.83mで、墓壇の南側に偏って配置されていた。北側部分では木口板と考えられる痕跡が確認できた。また南側では礫が下部まで落ち込んでおり、木蓋が腐って崩落したときに上部の礫が棺内に陥没したものと考えられる。検出面からの墓壇・木棺部分の深さは15cmほどしかなく、一般的に浅すぎるものである。調査中には上面からの明瞭な墓壇の



写真72 E1区第2面集石墓2墳丘上面(西より)



写真73 E1区第2面集石墓2墳丘内部集石状況(南より)



写真74 E1区第2面集石墓2主体部検出状況(南より)

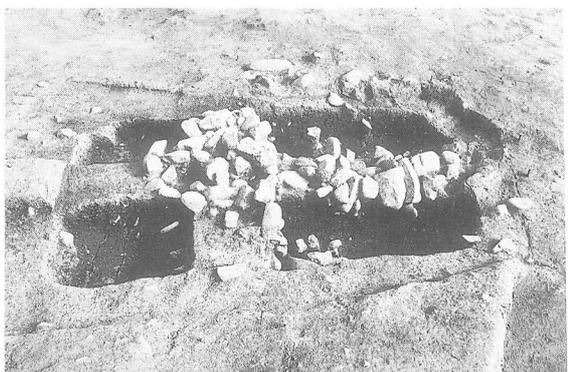
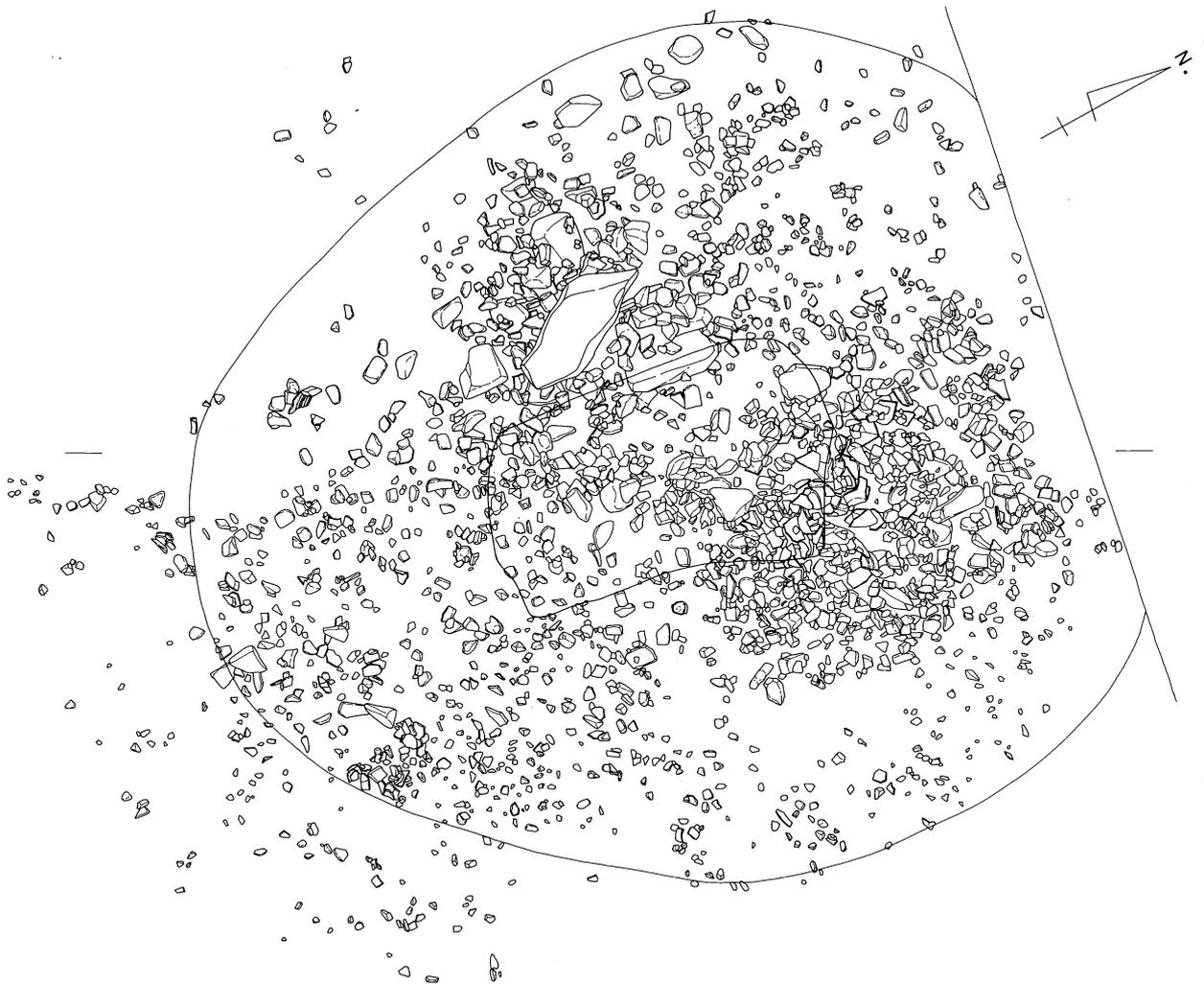


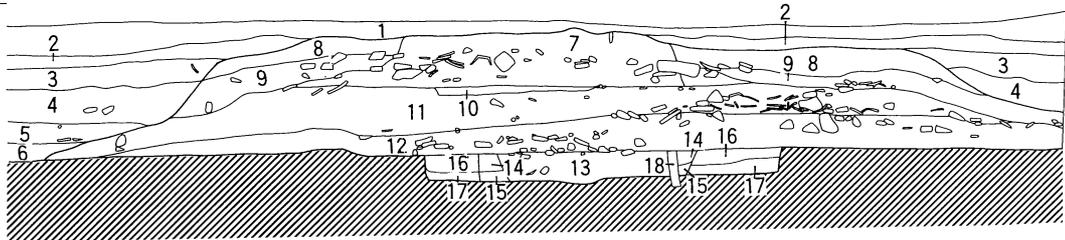
写真75 E1区第2面集石墓2主体部木棺部分(西より)



12.40m



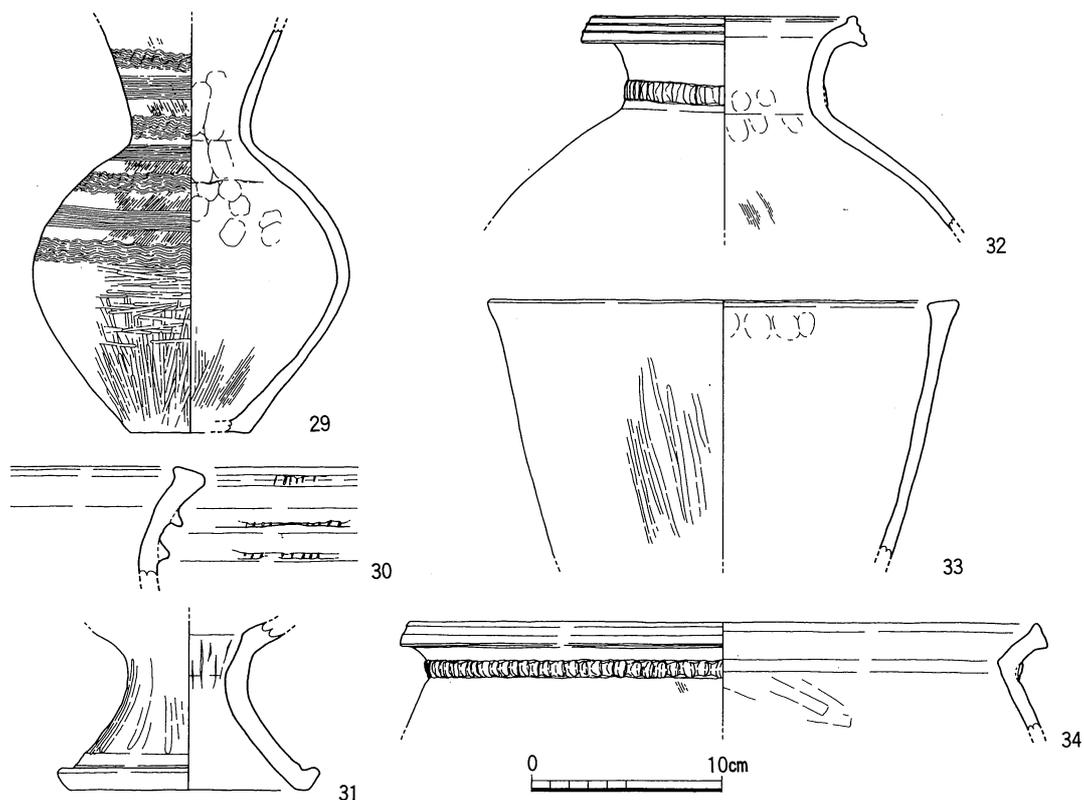
12.40m



0 1 m

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1 赤褐色砂質土 (0.2~2mm大の砂粒を多く含む) | 10 茶褐色粘質土 (砂粒はほとんど含まない) |
| 2 茶褐色粘質土 (0.2~2mm大の砂粒を含む) | 11 暗褐色粘質土 |
| 3 黄褐色粘質土 (砂粒をわずかに含む) | 12 暗茶褐色砂質土 |
| 4 赤褐色粘質土 (5mm大の砂粒を多く含む) | 13 暗茶褐色粘質土 |
| 5 赤褐色粘質土 (砂粒をわずかに含む) | 14 暗褐色砂混じり粘質土 |
| 6 茶褐色粘質土 (2mm~1cmの小石を多く含む) | 15 暗褐色砂質土 |
| 7 黄褐色粘質土 (1mm前後の砂粒を含む) | 16 暗茶色粘質土 |
| 8 黄褐色粘質土 (砂粒を含む, 3より多い) | 17 暗茶色砂混じり粘質土 (白色細粒含む) |
| 9 赤褐色粘質土 (砂粒をわずかに含む) | 18 暗灰褐色砂混じり粘質土 |

第84図 E1区第2面集石墓2平・立・断面図 (1/40)



第85図 E 1区第2面集石墓2出土遺物（1/4）

掘り込み部分は検出できなかった。このことから検出した墓壙は木棺の下部部分を固定するぐらいの施設で、木棺上部は露出しておりその周りに礫・土を積み上げたのではないと思われる。あるいは他の要因があるのかも知れないが、今後の検討に委ねたい。

また墳丘断面を検討してみると、地山直上部分と上部にふたつの墳丘状の石の曲線が見て取れないこともなく、あるいは2基の集石墓が存在していた可能性もある。平面的にも墳丘の表面部分で北西部分と西側の部分に礫の集中箇所があり、この部分がそれぞれの集石墓かもしれない。しかし墳丘内部の礫の分布状況には偏りはあまり見受けられなかった。2基が重なり合っている可能性はあるが、現段階では1基の集石墓と考えておきたい。土器の出土位置や接合関係、時期などの詳細な検討をふまえた後に正報告に譲りたい。

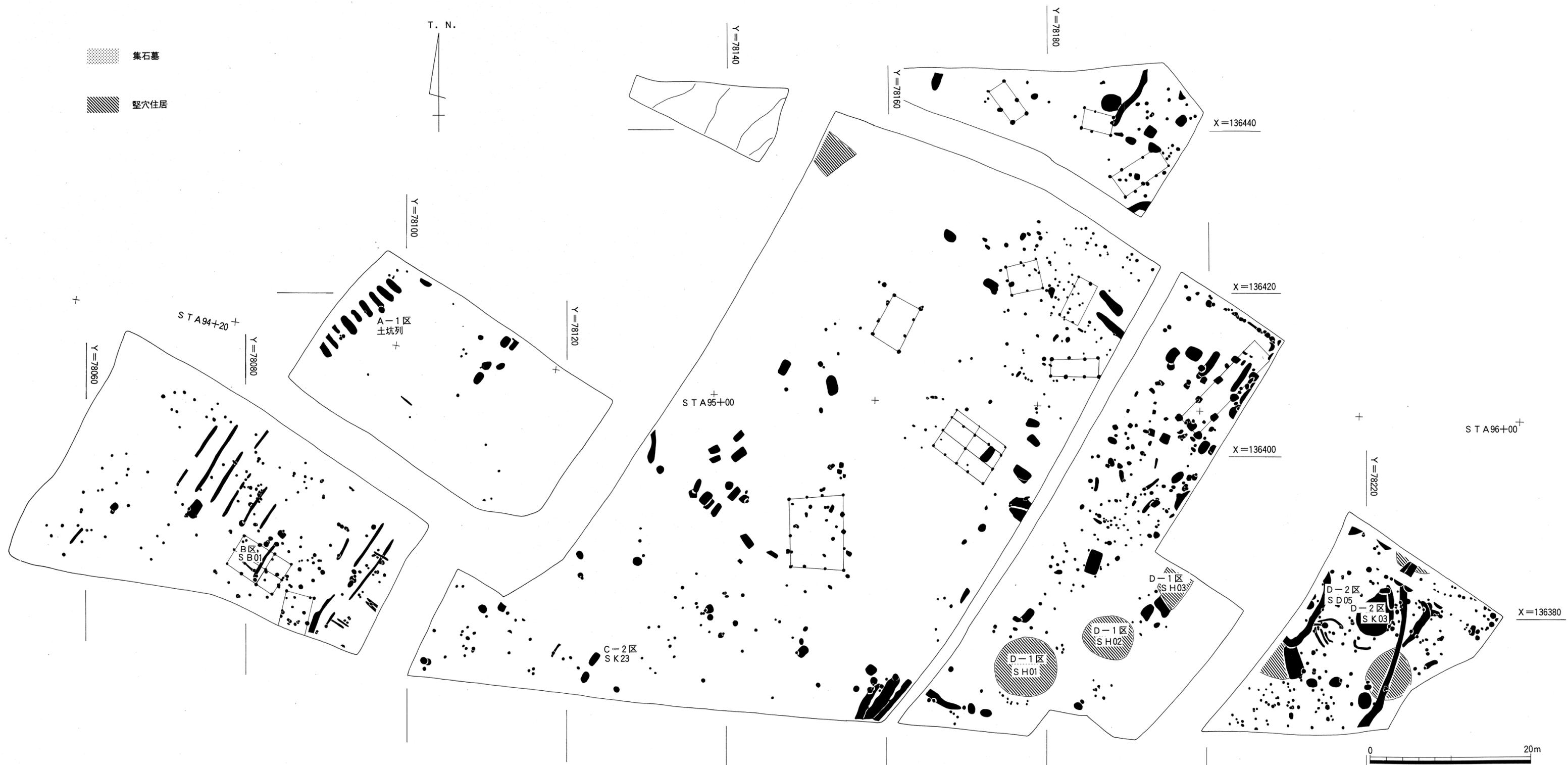
29は口縁部端部は欠損しているものの、直線的に開いている。体部は球形で最大径は中央にある。底部は安定した平底である。外面は口縁部から体部上半部にかけてハケ目を施し、体部下半にはヘラミガキを加えている。また口縁部から体部上半にかけて櫛描きの波状文と直線文を交互に巡らせている。また内面の底部付近にはハケ目を施している。30は口縁部端部を内側に拡張している。端部外面には刻み目を施し、さらに刻み目を加えた突帯を現存で2条巡らせている。31は脚部端部を上方につまみ上げている。32は幅広の口縁部端部を上下に拡張している。頸部には幅広で扁平な突帯を1条巡らせ、突帯には爪で刻み目を入れている。体部は丸みを帯びている。33は鉢と考えられ、口縁部端部は肥厚している。体部は直線的で外面にはヘラミガキが見られる。内面は摩滅している。34の口縁部は短く屈曲し、端部を上方につまみ上げている。頸部内面の立ち上がり部は鋭く、外面には突帯を1条貼っている。



写真76 F1区第2面集石墓6 (西より)



写真77 F1区第2面集石墓8~11 (北より)



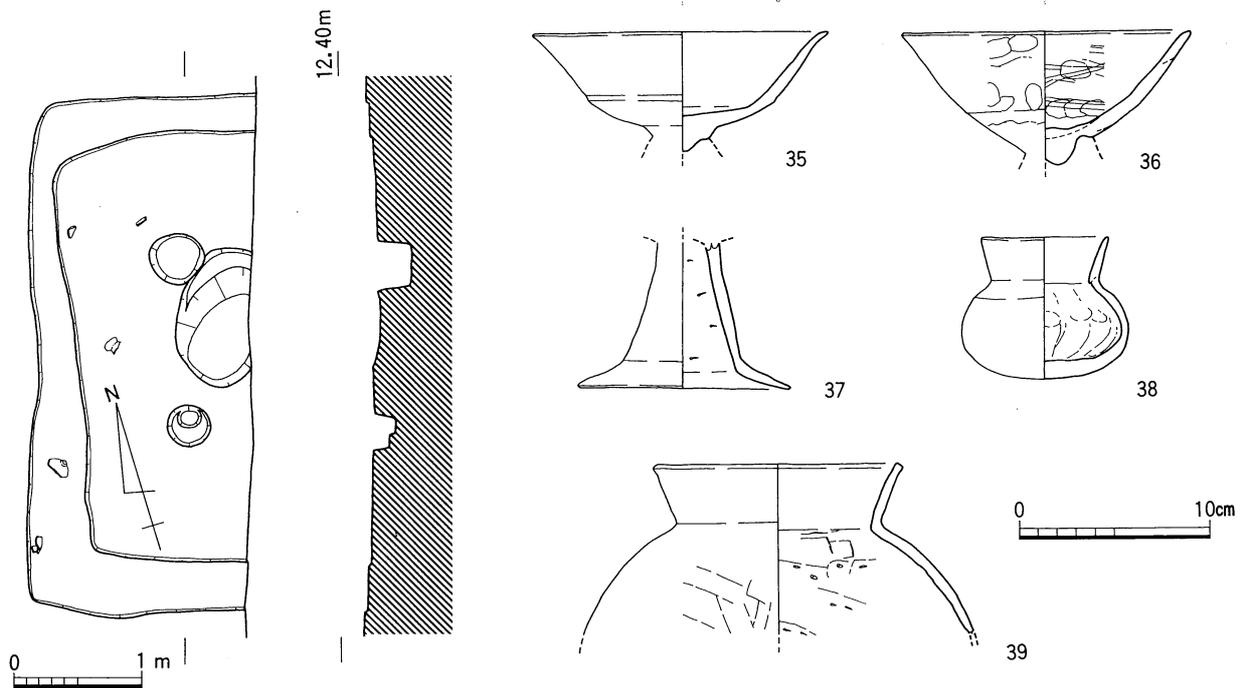
第86图 A区~D区第1遺構面遺構配置図 (1/400)

古墳時代

E 2区第1面SH01 調査区の東壁際で検出した竪穴住居跡で、東側は調査区外のため全体の規模は不明である。平面形は方形で南北方向は4.0m、東西方向は検出部分で1.6mほどである。上面は削平されており深さは15cmほどしか残っていなかった。壁際は幅30cm~40cmほどの幅でテラス状になっている。テラス面と床面との高低差は5cm前後と非常に低くなっている。中央部分には長径1.1mの楕円形の土坑があるが、短径は不明である。土坑の深さは25cmで、埋土は粘性の強い黒褐色粘土の単一層で、炭化物が土坑内の南側部分に多く含まれていた。土坑の底部からは多量の土器が出土した。検出した柱穴の配置から支柱穴は4本になるものと考えられる。土器の他に住居の床面から鉄鏃と土製勾玉が出土したのが注目される。

35の杯部の立ち上がり部は丸みを帯びており沈線が1条巡っている。端部は強くナデており外反している。脚部との接合部分が明瞭に残っている。36の杯部は全体に緩く内湾している。全体に指押さえが認められるが、内面にはハケ目が少々残っている。37は高杯脚部で、直線的に開いた後に下部で鋭く屈曲して短く開く。38の口縁部は直線的に立ち上がり、体部は扁平で底部は肥厚している。全体にナデているが、体部内面は指で抉るようにナデている。39の口縁部は直線的に立ち上がるが、端部はナデることによって上方に少しつまみ上げている。体部は上半部のみであるが丸く張っている。外面は板ナデ、内面は上部までヘラ削りを施している。

F 1区第1面SH01 調査区の中央部分で検出した竪穴住居跡である。平面形はほぼ正方形で、南北4.2m、東西3.9mである。SH01の壁沿いには四周にベット状遺構が巡る。その規模は上部の平坦面で40~50cm、下部まで含めた全体で50~80cmである。南部では上部の平坦面が20cmほどしかないが、これは崩壊して旧状を留めていないためであろう。このことは土層断面の観察で、他の部分のような丸みを持ったカーブを描かないことから伺える。ベット状遺構の形成については地山の茶褐色砂混じり粘質土を削り出すことによる。検出面から床面までは35cmほどあった。住居内からは9基の柱穴が検出され



第88図 E 2区第1面SH01平・断面図(1/60),出土遺物(1/4)

たがSP01～SP08までが支柱穴であろう。柱穴以外の施設は検出されなかった。

出土土器は土師器の高杯脚部、口縁部などがある、量的にはあまり多くない。40は外面の杯部との接合部分と脚部の屈曲部分に集中的に指押さえを行った後にナデている。内面は脚部下位での屈曲が明瞭である。また内面にはヘラケズリを施している。



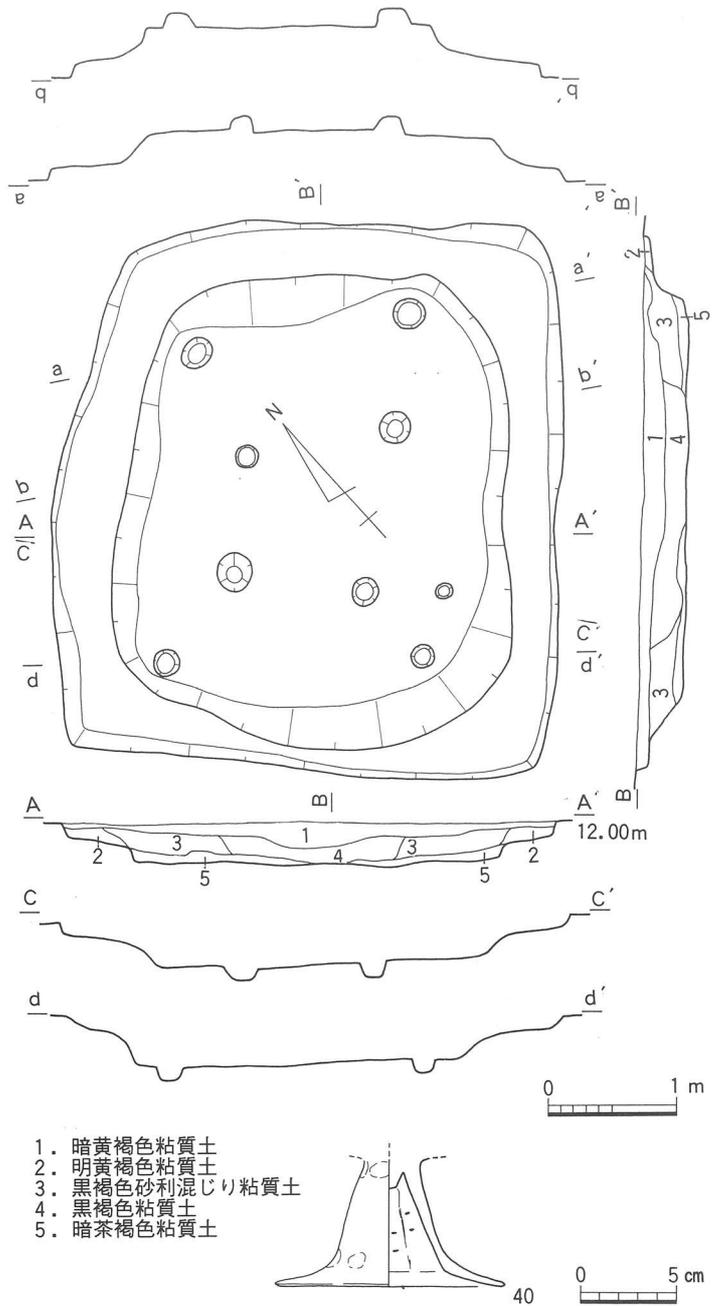
写真78 F1区第1面SH01完掘状況(南より)

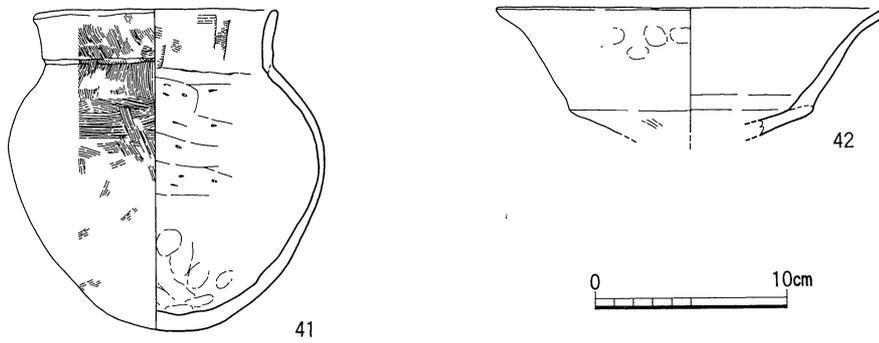
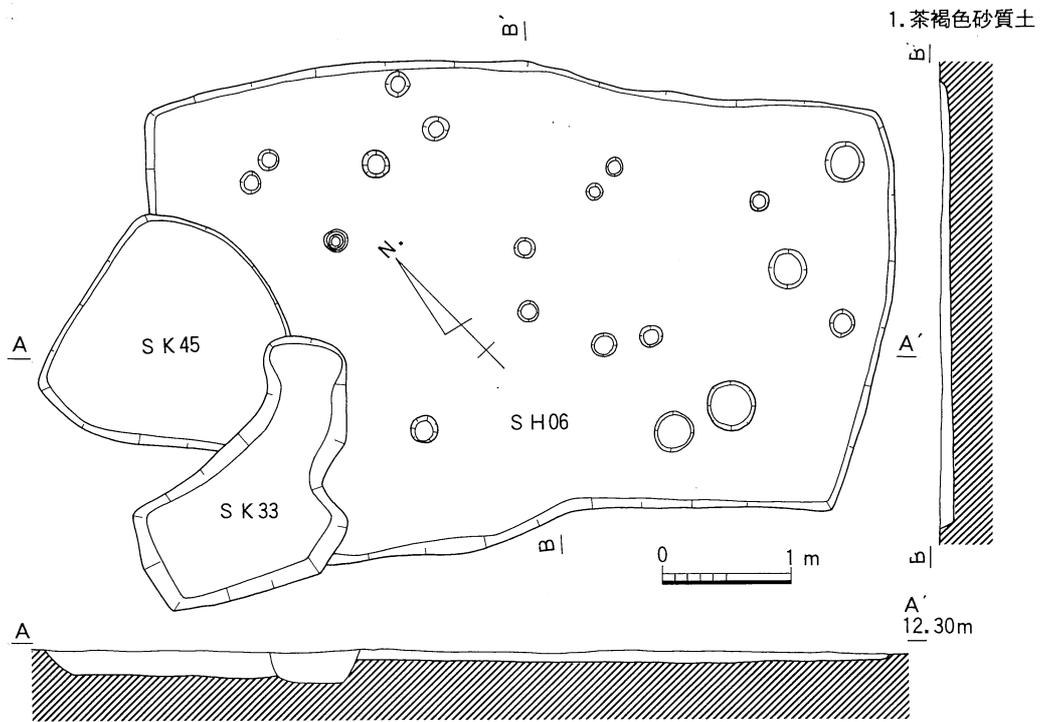


写真79 F1区第1面SH06甕出土状況 第89図 F1区第1面SH01平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)(南より)

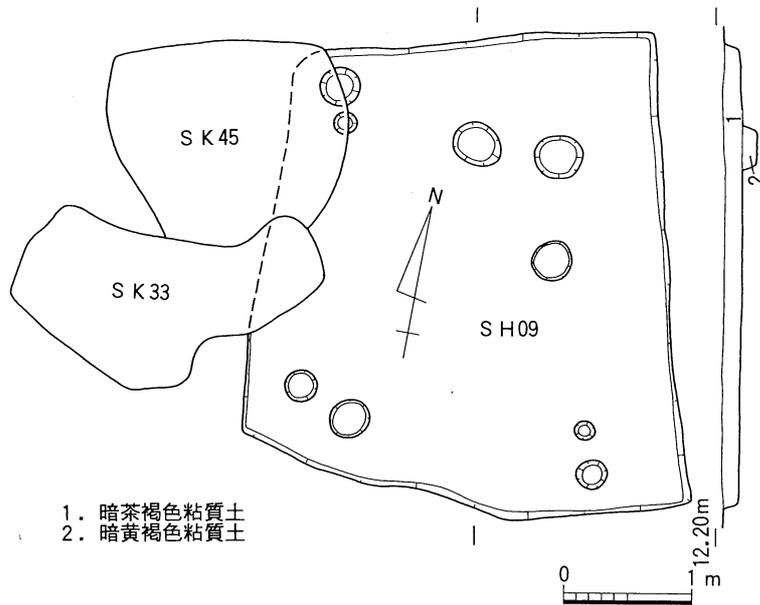
F1区第1面SH06 F1区中央北部で検出した竪穴住居跡である。平面形は西側が大きい台形である。南西部は2つの土坑により切られている。規模は南北2.6m, 東西3.9m, 深さ0.06mである。住居の残りは非常に悪い。柱穴は19基検出したが, SP01～SP04が支柱穴であると考えられる。土器は床面直上より, 甕(41), 高杯(42)が出土している。41は口縁部が直立するが, 端部でやや外湾する。42は杯部下位で鋭く屈曲し, 口縁部端部はさらに外上方に延びる。

F1区第1面SH09 SH06により全体が削平されている竪穴住居跡である。平面形は南西部がやや歪むが, 正方形に近い。規模は南北3.8m, 東西3.3m, 深さ0.14mである。北西部はSH06を切る2つの土坑により壊されているが, 土坑の掘り込みが浅いため支柱穴(SP01)が残存している。SP01～SP04が支柱穴であると考えられる。



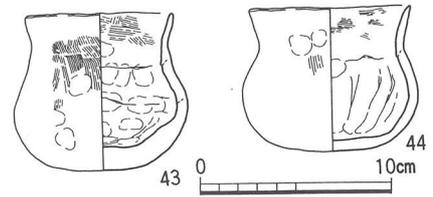


第90図 F 1 区第 1 面 S H 06 平・断面図 (1/60), 出土遺物 (1/4)



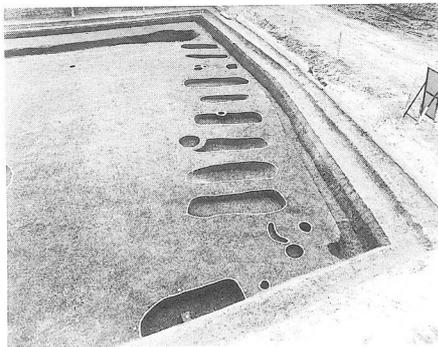
第91図 F 1 区第 1 面 S H 09 平・断面図 (1/60)

土器は床面直上より小型丸底壺（43・44）が2点折り重なって出土している。43・44はほぼ同サイズである。いずれも口縁部は直立気味だが、やや開く。43は口縁部から体部上半にかけての外面にハケ目を施す。体部内面には指押さえが顕著である。また底部は肥厚している。44の体部内面は指で器壁を抉るようにナデている。口縁部内面にはハケ目を施している。

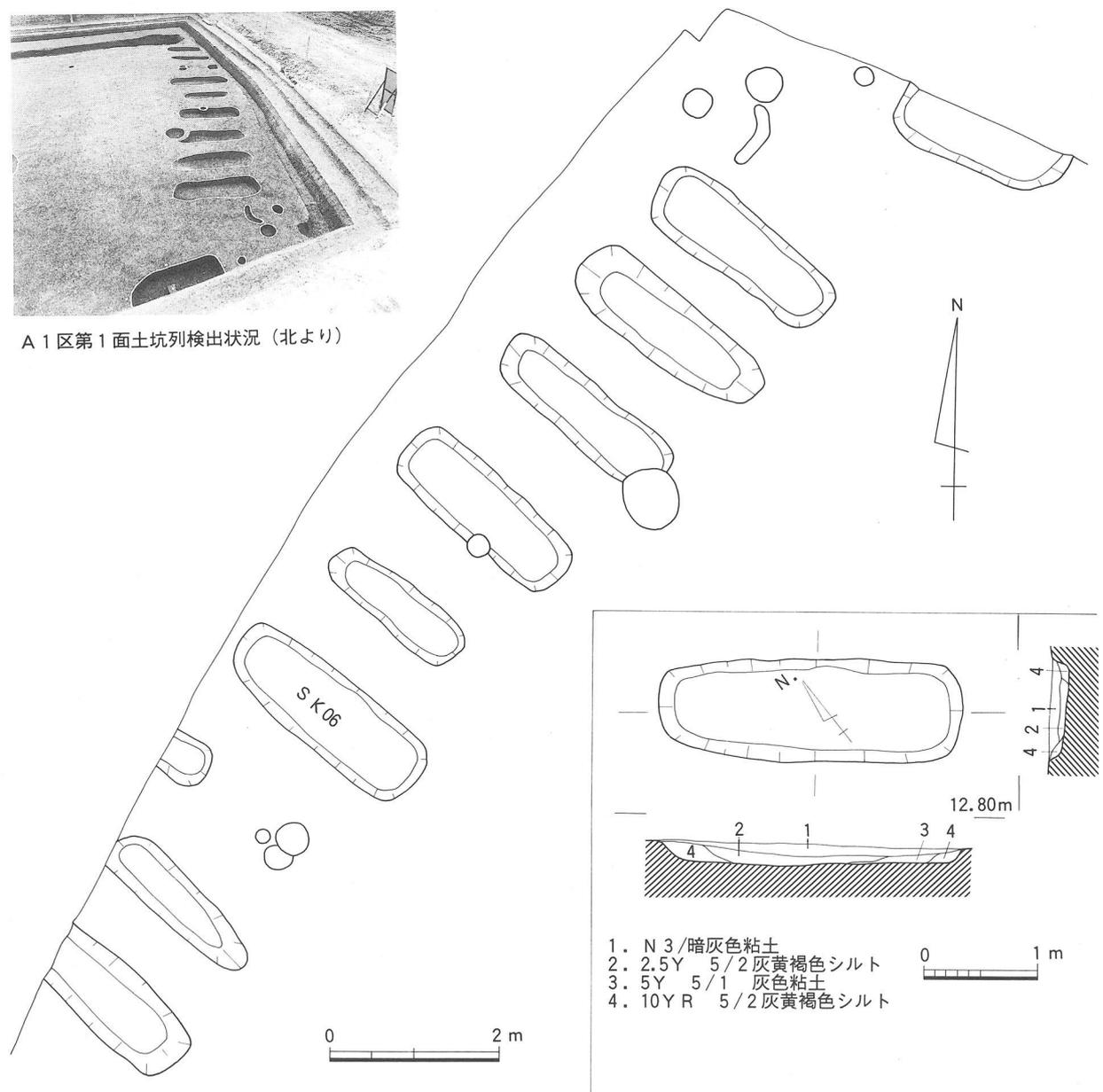


第92図 F 1区第1面S H09出土遺物 (1/4)

A 1区第1面S K01～09 調査区西側において検出された土坑群である。この土坑群はいずれも東西方向に長軸そろえ、調査区南西隅から北へ調査区内で12mにわたって列状に検出された。規模は長さ約2.4m、幅約0.8mのものと長さ約2m、幅約0.5mの大きく2つに分かれる。深さはいずれも約0.3mとほぼ同じものである。遺構内埋土はすべての土坑で黒褐色粘土が見られる。出土遺物は土師質の土器片である。



A 1区第1面土坑列検出状況（北より）



第93図 A 1区第1面土坑列平面図 (1/80), S K06平・断面図 (1/60)

厳密な時期決定を行うことは困難である。他の調査区での中世以降に属する遺構の埋土とは異なるため、ここでは古墳時代から古代期の所産としておきたい。

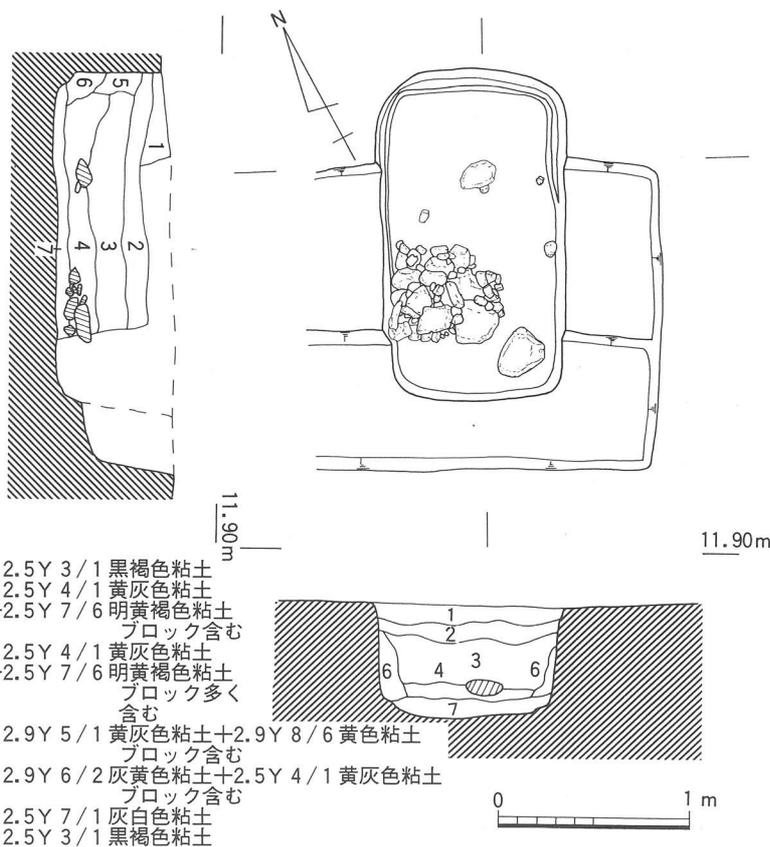
この土坑列のなかでS K06の平・断面図を提示しておく。

C 2区第1面S K23 集石墓K02の西側がほぼ埋没した段階で掘り込まれた土坑である。長さ南北約1.8m、幅東西約9.5m、深さ約0.6mを測る。遺構内の埋土は黄褐色のシルトと黒褐色の粘土ブロックが充填されている。底面からやや浮いたレベルで30cmから5cm程の礫と弥生終末期の土器が検出された。集石墓K02と隣接する位置にある為、上記のブロック土で埋め戻す段階で集石墓K02の土器と礫が混入した可能性もある。従って、本遺構の帰属時期はこれらの土器の帰属時期である弥生時代終末期以降としておく。

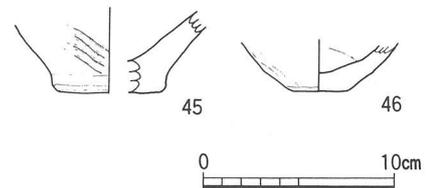
45・46は甕の底部である。ともに底部が丸底を指向する傾向にあることなどから、弥生終末期に位置付けられよう。

F 1区第1面S K47 S X01を切る土坑である。平面形は不整形で、西側が突出している。規模は南北1.6m、東西1.8m、深さは最大0.5mである。土坑の断面は幅広の船底状で最下層には橙褐色粘質土が堆積していた。また上部から中程にかけて暗黄褐色粘質土が帯状に堆積している。底部は東に向かってやや下がる。

出土土器は甕(47)、壺(48)と高杯(49・50・51)である。これらはほぼ同じ高さで、一括して出土した。47は口縁部端部を外側につまみ出しており、口縁部全体を強くナデている。体部は球形で外面には板ナデを施し、内面を指押さえの後に指ナデする。口縁部と体部の境には板状工具の木口部分の痕跡が残っている。48は口縁部端部を強くナデて先細りにしている。体部は扁平で最大径は上半にある。外



第94図 C 2区第1面S K23平・断面図(1/40)



第95図 C 2区第1面S K23出土遺物(1/4)

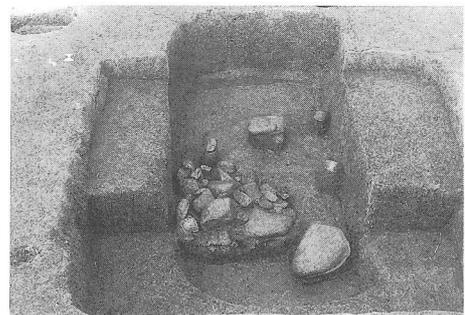


写真80 C 2区第1面S K23(南より)